

札幌国際芸術祭 2014

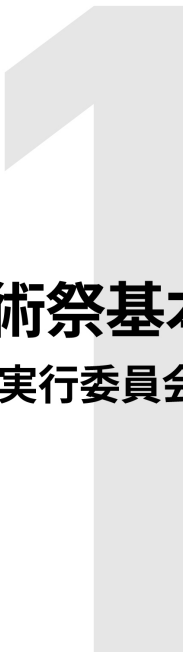
事業評価検証会 報告書

別冊資料

SIAF2014 事業評価検証会で実施した札幌地域追跡調査、
SIAF2014 と地域に関するレポート、ならびに報告書の別添資料などを掲載。

SIAF2014 事業評価検証会 報告書 別冊資料編：目次

1. 札幌国際芸術祭基本構想（概要版）実行委員会作成	3
2. SIAF2014 多様なステークホルダー	5
3. 芸術祭のアセスメントについてのワークショップ資料（SIAF2014 事業評価検証会作成）	7
4. SIAF 関係者への追跡調査及び開催地域への波及に関するレポート	12
① 札幌における SIAF2014 実施後のアンケート調査設問/集計/コメント	15
② 札幌における SIAF2014 実施後のヒアリング調査まとめ	35
・ 参加アーティスト/地元作家/教育機関従事者（伊藤隆介氏）	35
・ 会場運営/エキシビジョン：500m 美術館（佐野由美子氏、高橋喜代史氏）	42
・ 地元美術専門家（穂積利明氏）	47
・ 会場運営/エキシビジョン：モエレ沼公園（宮井和美氏）	51
・ 会場運営/エキシビジョン+参加型プロジェクト（今村育子氏、内川亜紀氏、藤本恭子氏）	53
・ 会場運営/参加型プロジェクト（石井一彦氏）	56
・ 市民協力者/参加型プロジェクト（宇山誠治氏）	63
・ 市民協力者/参加型プロジェクト（米澤修吾氏、菊地歩氏）	69
・ 連携事業グループインタビュー（中島洋氏、畠中秀幸氏、福原明子氏）	73
・ 連携事業グループインタビュー（小室治夫氏、山口哲志氏）	77
③ 札幌（地域）の SIAF2014 の受けとめかたに関するレポートと資料集	82
・ SIAF2014 のしかけによる活動（参加型コンテンツ一覧とその後の展開）	83
__連携事業者アンケート調査（実行委員会実施）集計結果/コメント	91
__市民ボランティアアンケート調査（実行委員会実施）集計結果/コメント	96
・ SIAF2014 に連動して起こった市民主導の活動	104
__アートカフェ in 資料館	106
__SIAF-HACK	107
__ACF 主催「札幌国際芸術祭 2014 フライング・フォーラム」開催記録（コメント集）	107
④ SIAF2014 公式振り返りイベント開催記録（コメント集）	118
5. 来場者アンケート調査設問、クロス集計図表、クロス集計結果	125
6. アート関係者の評（SIAF2014 実行委員会編：開催報告書より転載）	132
7. SIAF 事業終了後のドキュメント発売記念イベント参加者アンケート調査設問、集計結果	142
8. 国際展年表	149
9. 来場者アンケート調査設問改善案（SIAF2014 事業評価検証会 作成）	152

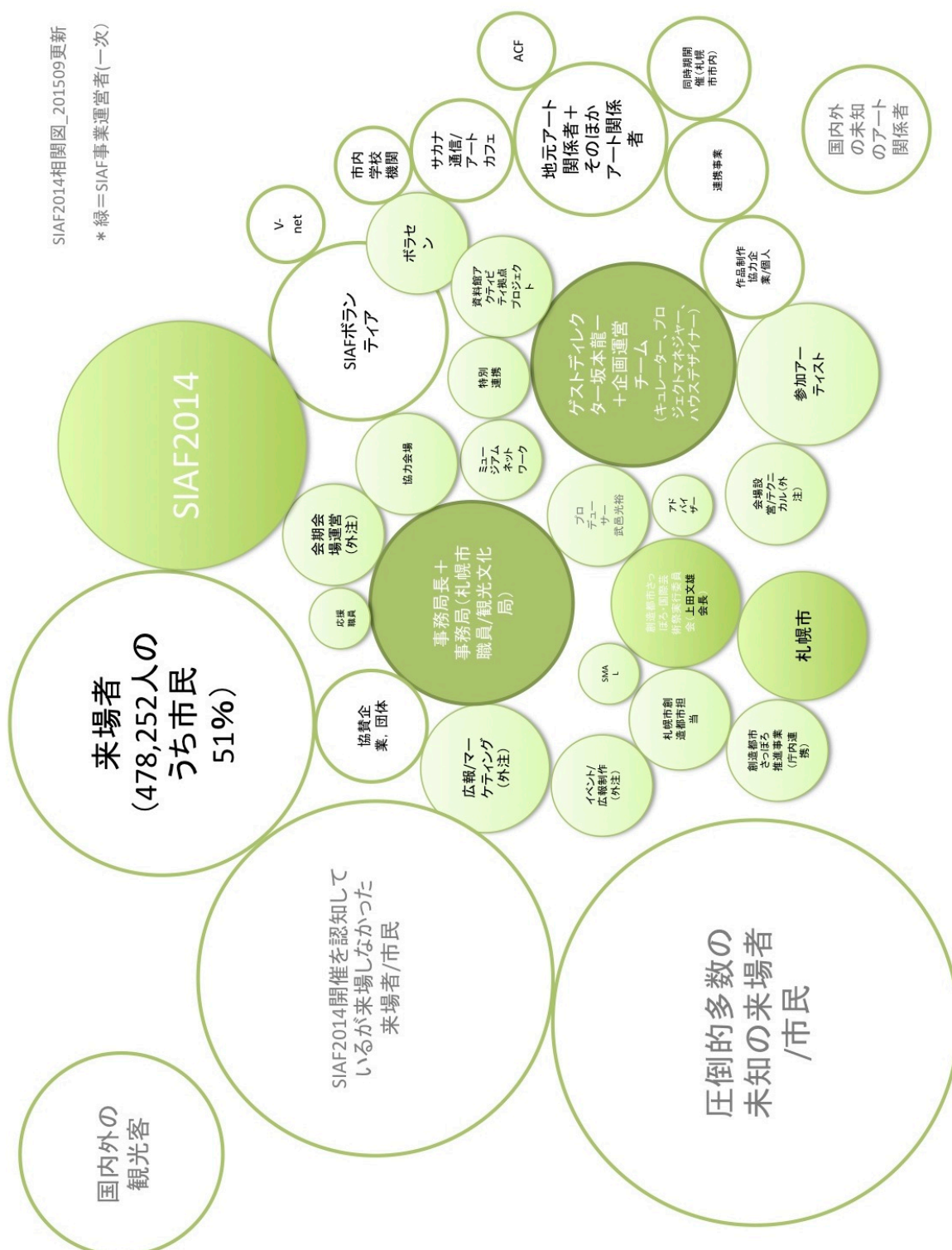


札幌国際芸術祭基本構想(概要版)

実行委員会作成

札幌国際芸術祭(仮称)基本構想の概要		札幌市 観光文化局 国際芸術展担当部
【目 的】	文化芸術がより一層市民に親しまれ、心豊かな暮らしを支えるとともに、札幌の様々な資源をフルに活かした次代の新たな産業やライフスタイルを創出し、その魅力を世界へ力強く発信していくために、「創造都市さっぽろ」の象徴的な事業として「国際芸術祭」を開催する。 具体的な目的は以下の4点とする。	札幌が有する「都市」の魅力と「自然」の豊かさ、この二つの魅力が札幌の資源であることから、「都市と自然」を基本方針とし、今後の開催テーマは、実施主体及び芸術監督等と協議しながら検討する。
	①文化芸術に満ちた札幌独自のライフスタイルの創出 質の高い最先端の文化芸術に触れる多様な機会を提供し、市民一人ひとりが持つ創造性を活き活きと発揮できる札幌独自のライフスタイルの創出を図る。 ②札幌らしい文化芸術を支える人づくり 国内外のアーティストとの交流を促すことで地元のアート人材の啓発・育成を支援しながら、札幌らしいアートシーンの活性化を図る。 ③文化芸術の力による札幌の魅力再発見と新たな価値創造 アートを媒介にしながら、北国固有の気候風土や歴史・伝統文化、豊かな自然環境、都市の資源といったものをさまざまな切り口で、札幌の潜在的な魅力として引き出し、多様な価値を生み出す。 ④「創造都市さっぽろ」を牽引する多様な人材の集積・交流 世界の文脈に通ずる札幌独自の最先端アートを創造・発信することで、文化芸術面での世界における札幌のプレゼンス（存在感）を向上させ、創造都市さっぽろを牽引する多様な人材の集積・交流を図る。	【基本方針】 多くの市民や観光客が親しみをもち、定期的かつ継続的な芸術祭となることを目指すため、5つの展開方針を設定する。 ①多様な文化芸術分野と複合した世界最先端の現代アート展の実施 国際的な現代美術を中心にしながら、音楽やパフォーマンスなど多様な文化芸術分野と複合した展覧会等を文化芸術関連施設や街中の様々なパブリックスペース、自然環境を活用して実施する。 ②既存の文化事業との連携 さまざまな既存文化事業と連携し、芸術祭の広がりを作る。 ③札幌の魅力を体験する観光イベントとの連携 芸術祭の開催期間中に実施される観光イベントと連携し、市民や観光客が札幌の魅力を体験できるようにする。 ④民間ギャラリーやアート関連団体との連携による企画展 民間ギャラリー等による企画展やアートフェアと連携し、より広がりのある芸術祭を目指す。 ⑤メディアアーツの展開 札幌が有するコンテンツ企業の集積やクリエイターの育成施設などの豊富な資源を活かすことができるため、デジタル技術と芸術を融合した新しい芸術表現であるメディアアーツを展開する。
【期待される効果】		
①まちづくりの活性化	幅広い文化芸術活動を市民とともに展開することで、個人としての誇りやアイデンティティの醸成がもたらされ、地域の活性化や賑わいを創出するきっかけとなる。	
②観光の振興	文化芸術の力で札幌の魅力を引き出し国内外に発信するとともに、札幌が有する魅力を体験できる機会を提供し、交流人口の増加につなげる。	
③経済の振興	市民と企業・アーティスト等との多様な交流による創造性の融合を図りながら、新たなデザイン（仕組み）を生み出す創造的活動による新産業の創出や既存産業の高度化を誘発していく。	
【開催年】	十分な準備期間（2年間）をとり平成26年を初回開催とする。	基本方針に基づき、大きく「都市＝まち」と「自然＝森」の2つのフィールドで構成する。
【開催スパン】	十分な準備期間を取るとともに、潮流の変化の激しい現代アートの文脈をタイムリーに伝えるために、3年ごとの定期的な開催（トリエンナーレ）を別途とする。	「まち」のフィールドは、3エリアを中心に、その他の文化観光資源等の活用も検討し、市民や観光客が札幌をまち歩きしながらアートを楽しむことを目指す。 「森」のフィールドは、札幌芸術の森を会場とし、札幌芸術の森全体を活用した自然環境と一体的な作品展示やイベントを展開することを旨とする。
【開催時期】	札幌の過ごしやすい冷涼な夏の気候や様々なイベントとの連携により多くの市民・道民・観光客が来場しやすい夏を基本とするが、冬の魅力の活用もあわせて検討する。	『森』フィールド 大通エリア 札幌駅前通エリア ウエルカムゲート 地下歩行空間 『まち』フィールド 創成川以東エリア
【開催期間】	他の芸術祭の開催期間や収支のバランスを検討しながら、70日間程度を想定する。	公的助成金等の活用や民間活力の導入等を確保しつつ、3億円程度を見込む。
【実行組織】		産学官民協働で「創造都市さっぽろ・国際芸術祭実行委員会」を設立、札幌市観光文化局に新設した「国際芸術展担当部」が事務局を担当する。

SIAF2014 多様なステークホルダー





芸術祭のアセスメントについての ワークショップ資料

(SIAF2014 事業評価検証会作成)

【資料】芸術祭のアセスメントについてのワークショップ

(1) 実施スケジュールと各回の内容

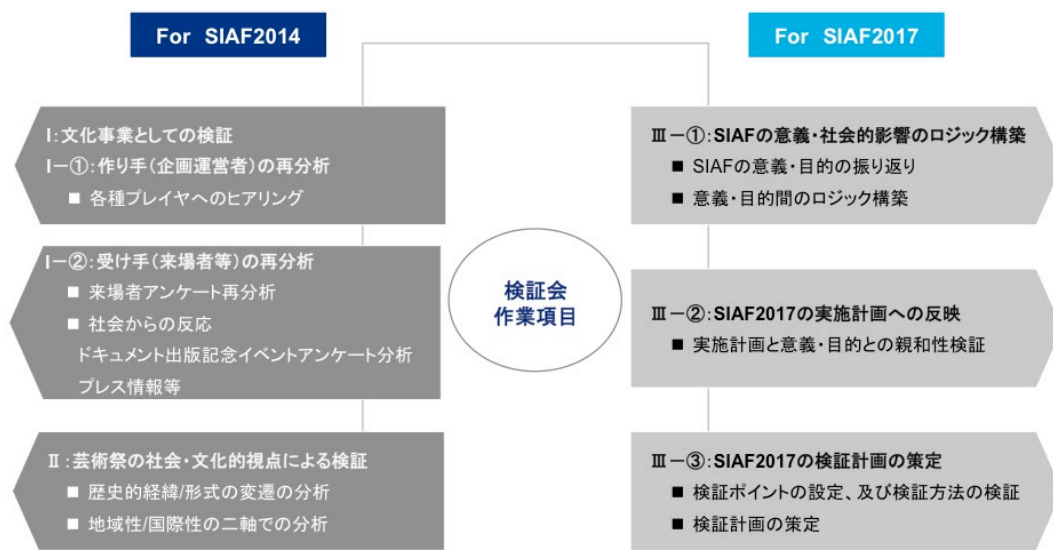
検証会のスケジュール

	①評価の意義・ 芸術祭の 目的の確認	②SIAFの評価 ニーズの ヒアリング	③SIAF意義・ 目的及び特徴 の確認	④最終報告への 作業・スケジュール の確認	⑤中間報告
日付	3月16日	3月18日	4月17日	5月26日	7月5日
場所	オンライン会議	札幌	札幌	オンライン会議	札幌
主要 アジェンダ	・芸術祭評価の一般的意義をオーバービューで確認 ・芸術祭評価に係るハイレベルステップの確認 ・前回芸術祭評価の振り返り ・今回芸術祭の「公式」目的の確認	・SIAFの事業の評価ポイントのヒアリング ・基本構想のブレイクダウン ・各プロジェクトに期待していた点の整理	・SIAFの差別化ポイント、意義・目的、社会的影響のロジックを議論 ・芸術界評価を通して説明責任を果たす主体を具体的に想定	・SIAF2014の振り返りとSIAF2017の評価計画策定に係る主要コンテンツの確認 ・最終方向に向けたタスクとマイルストーンについてのディスカッション	・SIAF2014の振り返りとSIAF2017の評価計画策定についての初次的報告
参加者	SIAF事務局 + 熊谷、光岡、小田井	SIAF事務局 + 熊谷	SIAF事務局 + 熊谷、光岡、大澤、小田井、永井、	SIAF事務局 + 熊谷、光岡、小田井、吉澤、大澤	SIAF事務局 + 熊谷、永井、小田井

(2) SIAF 外部検証委員会のアウトプットのオーバービュー

事業評価長期計画

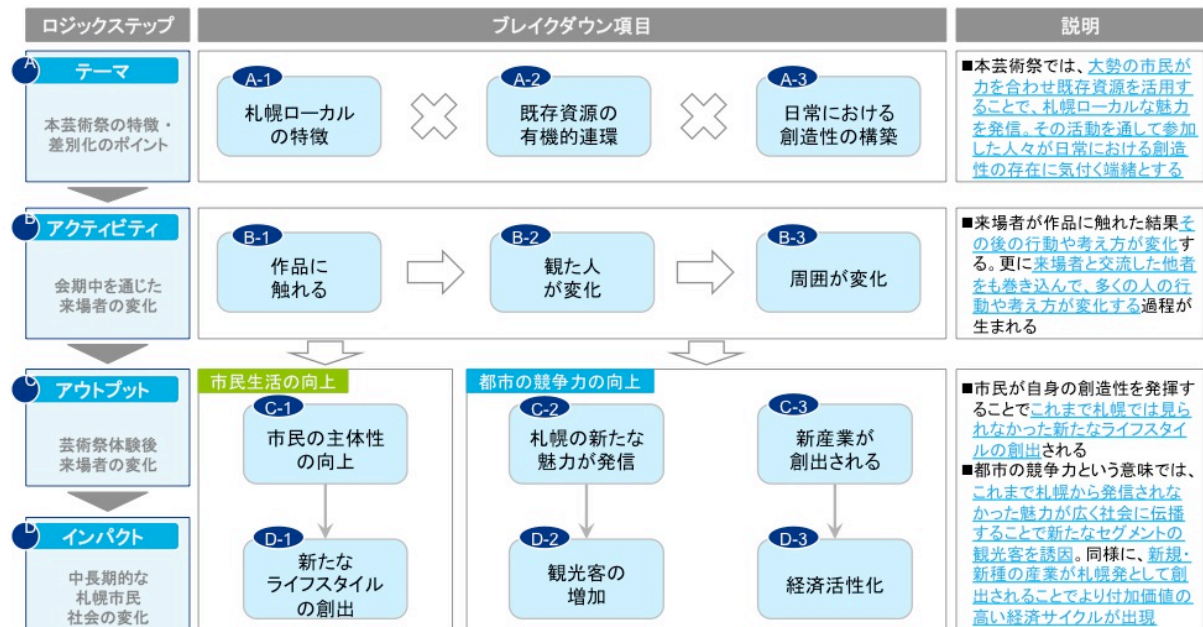
検証会のアウトプットのオーバービュー



(3) 4 回目で使用したロジックモデル案

芸術祭基本構想でしめされた目的とその達成手段としての芸術祭との関係を以下のよう
にロジック立てをして整理

芸術祭基本構想から構築されたロジックツリー



(4) ロジックモデルを使用して SIAF2014 のコンテンツを検証

各プロジェクトが設定したロジックツリーに対し具体的にどのように紐づいているのかを一覧化しました(1/2)

芸術祭の各プロジェクトと評価ポイントの関連性(初期案) *SIAF2014事業フレーム参照

ID	プロジェクト	A-1 札幌ローカルの特徴	A-2 既存資源の有機的連環	A-3 日常における創造性の構築	B-1 作品に触れる	B-2 観た人が変化	B-3 周囲が変化	B-4 主体性の向上	B-5 札幌の新たな魅力が発信	B-6 新産業が創出される
1	展示1(都市と自然)	○		○	○	○			○	○
2	展示2(センシングストリームス)	○	○		○	○	○	○	○	
3	展示3(赤れんが/伊福部 & 掛川)	○			○	○	○		○	
4	展示4(500m美術館)	○	○		○	○	○	○	○	
5	展示5(フォレストシンフォニー)	○		○	○	○	○		○	○
6	展示6(島袋道浩)	○	○		○	○	○	○	○	
7	展示7作品展示(sapporo project)	○	○		○	○	○	○	○	
8	展示8(ウエルカムサウンド/新千歳空港)	○			○	○	○			
9	展示9(イアン・ウィルソン/横トリ連携)		○		○	○	○			
10	パフォーマンス1(北の大地を奏ぐ) 中止									
11	パフォーマンス2(CHROMA)	○	○		○	○	○			
12	パフォーマンス3(BABEL)	○	○		○	○	○			

各プロジェクトが設定したロジックツリーに対し具体的にどのように紐づいているのかを一覧化しました(2/2)

芸術祭の各プロジェクトと評価ポイントの関連性(初期案) *SIAF2014事業フレーム参照

ID	プロジェクト	A-1 札幌 ローカル の特徴	A-2 既存資源 の有機的 連携	A-3 日常におけ る創造性の 構築	B-1 作品に 触れる	B-2 親た人 が変化	B-3 周囲が 変化	B-4 主体性の 向上	B-5 札幌の新た な魅力が発 信	B-6 新産業が 創出さ れる
13	パフォーマンス4(アルパ ント)中止									
14	プロジェクト1(アートトラ イフ)	○	○	○	○	○	○	○	○	
15	プロジェクト2(コログル 公園)		○		○	○	○	○	○	
16	プロジェクト3(暮らしかた 冒険家)	○	○		○	○	○	○	○	○
17	プロジェクト4(プロジェク トFUKUSHIMA)	○	○		○	○	○	○		
18	パブリック1(国際公募)	○	○	○	○	○	○			
19	パブリック2(資料館)	○	○		○	○	○	○		
20	パブリック3(オープニ ングプログラム)	○	○	○	○	○	○			○
21	パブリック4(クロージ ングプログラム)	○	○	○	○	○	○			
22	プレフェスティバルイベ ント(2013/2014)	○	○	○	○	○	○	○		
23	連携事業	○	○		○	○	○	○	○	○
24										

(5) 第4回目時点の評価手法の提案

For SIAF2014

評価手法の具体的提案

SAIF2014の再分析のためのタスク・マイルストーン

大項目		小項目		目的	担当	タスク
ID	名称	ID	名称			
I-①	作り手(企画運営者)の再分析	I-①-1	製作サイドの多様なプレイヤーのヒアリング	・地元ボランティア、アーティスト、その他連携事業者等多様なプレイヤーの反省を収集・分析	小田井	✓ ヒアリング対象者の特定 ✓ 質問項目の設定 ✓ ヒアリング実施・分析
I-②	受け手(来場者等)の再分析	I-②-1	来場者アンケートの再分析	・既実施のSAIF2014アンケート結果を基に別の観点にて再度分析を行う	光岡 永井	✓ クロス集計など分析項目の棚卸 ✓ 分析の実施
		I-②-2	ドキュメント出版記念イベント時アンケート/プレスクリッピング	・社会からの反応を見るために、複数のアンケート及びテキストデータを分析メディア	光岡 熊谷	✓ アンケートの集計・分析
II	芸術祭としての分析	II-1	歴史的経緯/形式の変遷の分析	・美術としてのSIAF2014の社会的意義の確認	熊谷	✓ リサーチャー海老澤彩とともに国際芸術祭について基礎情報の整理
		II-2	国際性/地域性二軸での分析	・SIAF2014のメディア露出結果を通して社会的影響を分析	熊谷	✓ 電通実施のプレスクリッピングの再整理・分析
II	総括	II-3	総括分析	・I-①～③を通してどのような振り返りが可能か検証・取り纏め	大澤 熊谷	✓ I-①～③の結果レビュー ✓ 最終総括のための大澤氏ヒアリングと取り纏め

評価手法の具体的提案

SIAF2017の評価計画確立・全体計画との関係確認のためのタスク・マイルストーン

大項目		小項目		目的	担当	タスク
ID	名称	ID	名称			
Ⅲ-①	SIAFの意義・社会的影響のロジック構築	Ⅱ-①-1	ロジックモデルの最終化	・SIAFの意義・目的の振り返り ・意義・目的間の論理的整合性のあるロジックを構築し	永井	✓ SIAFの意義・目的・差別化ポイントの振り返り ✓ 意義・目的の間にある各評価ポイントの設定
Ⅲ-②	SIAF2017の実施計画への反映	Ⅱ-②-1	ロジックモデルと各PJの紐付	・実施計画と意義・目的との親和性検証するための方法論を確立	全員	✓ 各PJと差別化ポイントとの関係性の整理 ✓ 各PJの計画立案過程へのフィードバック
Ⅲ-③	SIAF2017の検証計画の策定	Ⅱ-③-1	各評価ポイントに対する評価手法の確立	・検証ポイントに対する検証方法の検証 ・方法論の確立	全員	✓ 各検証ポイントに対する検証方法の洗い出し ✓ 実行可能性・重要性観点から最適な方法の選定
		Ⅱ-③-2	その後のPDCAサイクルのご提案	・検証計画の策定	熊谷 永井	✓ 内製化可能な手法やPDCAサイクルのご提案

各評価ポイントについて考えられる評価手法を初期的に整理をいたしました

各評価ポイントについての評価手法オプション(初期仮説)

指標	評価手法			評価段階				優先度	特記事項
	アンケート	インタビュー	DTR [*] /その他	計画段階	製作段階	開催中	開催後		
札幌ローカルの特徴	○	○		○	○	○	○	B	作品へ反映されているか、伝わるか
既存資源の有機的連環	○	○		○	○	○	○	B	長期的な調査が必要
日常における創造性の構築	○	○		○	○	○	○	A	伝わるか
作品に触れる	○	○	参加者 カウント			○	○	A	回遊度などもカウント
観た人が変化	○	○				○	○	A	長期的な調査が必要
周囲が変化	○	○				○	○	B	質的調査
主体性の向上	○	○			○	○	○	A	質的調査
札幌の新たな魅力が発信	○		データ収集				○	C	札幌市データの参照・合同調査の可否検討
新産業が創出される			データ収集				○	C	札幌市データの参照・合同調査の可否検討

*:DTR=デスクトップリサーチ

この中から、実行可能でかつ適切なオプションの選択のディスカッションをさせていただきたく

以上の資料を基にディスカッションを行い、SIAF2014 事業評価検証に使用するロジックモデルを構築した。

SIAF 関係者への追跡調査及び 開催地域への波及に関するレポート

① 札幌における SIAF2014 実施後のアンケート調査設問/集計/コメント

② 札幌における SIAF2014 実施後のヒアリング調査まとめ

- ・参加アーティスト/地元作家/教育機関従事者(伊藤隆介氏)
- ・会場運営/エキシビジョン:500m 美術館(佐野由美子氏、高橋喜代史氏)
- ・地元美術専門家(穂積利明氏)
- ・会場運営/エキシビジョン:モエレ沼公園(宮井和美氏)
- ・会場運営/エキシビジョン+参加型プロジェクト(今村育子氏、内川亜紀氏、藤本恭子氏)
- ・会場運営/参加型プロジェクト(石井一彦氏)
- ・市民協力者/参加型プロジェクト(宇山誠治氏)
- ・市民協力者/参加型プロジェクト(米澤修吾氏、菊地歩氏)
- ・連携事業グループインタビュー(中島洋氏、畠中秀幸氏、福原明子氏)
- ・連携事業グループインタビュー(小室治夫氏、山口哲志氏)

③ 札幌(地域)の SIAF2014 の受けとめかたに関するレポートと資料集

- ・SIAF2014 のしかけによる活動(参加型コンテンツ一覧とその後の展開)
 - 連携事業者アンケート調査(実行委員会実施)集計結果/コメント
 - 市民ボランティアアンケート調査(実行委員会実施)集計結果/コメント
- ・SIAF2014 に連動して起こった市民主導の活動
 - アートカフェ in 資料館
 - SIAF-HACK
 - ACF フライングフォーラム開催記録(コメント集)

④ SIAF2014 公式振り返りイベント開催記録(コメント集)

SIAF 関係者への追跡調査及び 開催地域への波及に関するレポート

【本項の掲載内容】

- ①札幌における SIAF2014 実施後のアンケート調査集計結果
- ②札幌における SIAF2014 実施後のヒアリング調査まとめ
- ③札幌（地域）の SIAF2014 の受けとめかたに関するレポートと資料集
- ④札幌（地域）の SIAF2014 公式振り返りイベント開催記録（コメント集）

SIAF2014 事業評価検証会の作業の一環として、SIAF2014 事業実施による地域／人の変化に関し検証会の吉澤弥生氏に監修を仰ぎ、アンケート調査及びヒアリング調査を実施した。

アンケートの設問とフォームを検証会メンバーで作成。このフォームを用いて、札幌で編成された調査チームで調査実務を担った。

【札幌現地調査及びデータ作成メンバー】

■ ヒアリング・インタビュー調査/データ作成

大友恵理（キュレーター、アートマネージャー、SIAF2014プロジェクトアシスタント）

■ アンケート調査/集計データ作成

石島耕平（北海道大学大学院教育学院 修士課程）

■ データ作成

片寄菜々美（北海道教育大学岩見沢校芸術・スポーツビジネス専攻）

宮澤樹乃（北海道教育大学岩見沢校芸術・スポーツビジネス専攻）

■ 調査に関するアドバイス

加藤康子（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士課程）

金野祐介（一般社団法人A-bank北海道 事務局）

■ 調査及びデータ作成コーディネート/レポート、本項執筆

小田井真美（SIAF2014チーフ・プロジェクトマネージャー）

【札幌現地調査及びデータ作成作業概要】

まず、①連携事業全主催者＋意識的に並走する活動をしていた個人（数人）を調査対象とすることに決めた。その理由は、札幌のアート関係者（団体/個人）は、SIAF2014 連携事業申請者とほぼ重なることから、連携事業申請をしてきた団体/個人を調査対象とすることは「地域のアート関係者」の意見や感想と同様であると考えたためである。アンケートの回答とともにグループインタビューに協力する回答者を募り、二回に分けて聞き取りを実施した。

また、連携事業主催者以外のアート関係者も存在するため、調査担当者が必要だと思われるグループ②参加型プロジェクト、プログラム参加者③SIAF2014 出品参加作家及び作品の制作協力者、さらに、調査対象を検討する過程で、③ SIAF 実行委員会に雇用されていた市職員ならびに、プロジェクトマネージャー、テクニカルスタッフ、会場運営スタッフなども、調査対象にすることとなった。その理由は、SIAF2014 では、市職員と多様な外部の専門人材で構成された事務局が事業運営を担ったこと、そこでアート関係者でもなくアートに関心もなかった一般の市職員がアートマネージャーやコーディネーターと同様の任務をこなしアートプロジェクトの現場を体験したという事実は人材育成やアウトリーチという視点から、結果的にオン・ザ・ジョブ・トレーニングの場と機会であったとも捉えられ、この特徴的な事業運営グループは、事業開催地域における一般市民への波及効果の可能性をも示唆するユニークなサンプルになるのではないかと考えたためである。

アンケートとヒアリングによる調査に加え、レポート形式で「札幌（地域）の SIAF2014 の受けとめかたに関するレポートと資料集」を作成した。内容は、主に SIAF2014 のしかけによる参加型プロジェクトから派生した出来事、また市民主導で興った活動を抽出、実施後の展開についてレポートし、文化芸術事業の質的評価検証作業の為の素材となる出来事（モノ・コト）や資料のアーカイヴを試みたものである。

①SIAF2014 実施後のアンケート調査設問/集計/コメント

1. 調査概要

- 内容・・・・・・SIAF2014 の関係者の属性やこれまでの活動、また SIAF2014 実施を通して
の意識変化等
- 方法・・・・・・アンケート調査
- 対象・・・・・・連携事業運営者、参加作家、プロジェクト協力者として SIAF2014 実施に
関わった札幌市民、及び事務局等事業運営関係者のうち 2015 年 5 月時点で
SIAF 実行委員会事務局にて氏名、住所とメールアドレスが確認できた方々
- 期間・・・・・・2015 年 5 月 27 日～6 月 3 日
- 送付数・・・・・・231（郵送、E メール）
- 回答数・・・・・・127

2. アンケート調 査 （ 設 問 ）

札幌国際芸術祭 SIAF2014 実施後のアンケート調査

以下、問 1 から問 10 までの設問に個人としてお答えください。（全 3 ページ）

問 1 SIAF2014 には、どの立場でかわりましたか。あてはまる番号 1 つ に○をつけ、さしつかえなければ事業名ないしプログラム名をご記入ください。

- 1 連携事業主催者
- 2 自主事業主催者 →事業名 []
- 3 プログラム参加者 →プログラム名 []
- 4 プログラムスタッフ →プログラム名 []
- 5 行政担当者
- 6 その他 []

問 2 SIAF2014 が実施される以前から札幌でアート活動をしていましたか。あてはまる番号 1 つに○をつけてください。

- 1 はい →よろしければ団体名/活動名義をお書きください。[]
- 2 いいえ

問3 SIAF2014にかかわったきっかけは何ですか。1 から 9 番のうちあてはまる番号全てに○をつけてください。(複数回答可)

- 1 芸術祭に興味があった
- 2 ディレクター（坂本龍一氏）に興味があった
- 3 出品する作家に興味があった
- 4 プログラムに興味があった
- 5 「都市と自然」というテーマに関心があった
- 6 札幌のイベントに興味があった
- 7 職務の一環
- 8 友人知人に誘われた
- 9 その他 [

問4 以下のような3つの意見に対して、あなたご自身はどうお考えになりますか。それぞれの意見に「そう思う」から「そう思わない」までの5段階で、最もあてはまる段階に○をつけてください。

	そう思う	まあそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
① 「都市と自然」 という SIAF の テーマ性を感じ た					
② これまでも っていた札幌の イメージとは違 う新しい価値を 見つけた					
③ 現代アート に何らかの刺激 を感じた					

問 5 札幌国際芸術祭 2014 に参加し、特に印象的だったのは以下のどの点ですか？1 から 8 番のうちあてはまる番号全てに○をつけてください。合わせて理由もお書きください。（複数回答可）

- 1 SIAF2014 ゲストディレクター（坂本龍一氏）
- 2 「都市と自然」というメイン・テーマ
- 3 SIAF2014 ゲスト・ディレクターの提示したメッセージ
- 4 キュレーター及び展覧会やアートプロジェクトの企画内容や世界観（キュレーション）
- 5 参加作家または参加作品
- 6 札幌市の魅力を再発見
- 7 作品制作への参加
- 8 その他 []

理由：

問 6 SIAF2014 に対する満足感がありましたか。あてはまる番号 1 つに○をつけてください。合わせて理由もお書きください。

- 1 満足した
- 2 やや満足した
- 3 どちらでもない
- 4 やや不満だ
- 5 不満だ

問 6-1 問 6 で 1, 2 と答えた方 →その理由をお答えください。

理由：

問 6-2 問 6 で 4, 5 と答えた方 →その理由をお教えてください。

理由：

問 7 SIAF にかかわって、ご自身に以下の選択肢のような変化はありましたか。1 から 7 番のうちあてはまる番号全てに○をつけてください。その他、エピソードがあれば、どんなことでもいいのでお書きください。（複数回答可）

- 1 SIAF 以前よりも、アートを身近に感じるようになった
- 2 SIAF 以前よりも、アートを通じた友人や知人との交流が増えた
- 3 SIAF 以前よりも、展覧会やコンサートなどの鑑賞機会が増えた
- 4 SIAF 以前よりも、レクチャーやワークショップなどの参加機会が増えた
- 5 SIAF 以前よりも、アートに関わる創作や実演、ボランティアなどを行うようになった
- 6 SIAF 以前からとくに変化はない
- 7 その他、エピソードなど [

]

問 8 SIAF にかかわって、周囲の人（家族、近所の人、同僚、友人等）に何か変化はありましたか。どちらか 1 つに○をつけてください。

1 ある → どういった人がどのように変化しましたか。具体的なエピソードをお書きください。

[]

2 ない

問 9 次回 SIAF へ期待すること、その他要望や改善点などの提案があればご自由にお書きください。

＊ SIAF2014 開催中、または閉幕直後に実行委員会の行ったアンケートにすでにご意見（ご要望、改善点などのご提案）をいただいている場合には、こちらの設問をスキップして下さって構いません。いただいたご意見は検証作業に使用させていただきます。

問 10 最後に、あなたご自身についてお伺いします。当てはまる番号をひとつお選びください。

(1) 性別をお答えください。

- ①男性 ②女性

(2) 年齢をお答えください。

- ① ～10代 ② 20代 ③ 30代 ④ 40代 ⑤ 50代 ⑥ 60代～

(3) 居住地をお答えください。

- ① 札幌市内 [区]
 ② 札幌市以外の道内 [郡/市/町]
 ③ 北海道以外の国内 [県/府/都]
 ④ 海外 [国名及び都市名]

(4) 属性（職業や社会的な立場）をお答えください。

- ① 会社員
 ② 公務員
 ③ 自営業
 ④ 大学・専門学校生
 ⑤ 高校生以下
 ⑥ パート・アルバイト
 ⑦ 主婦・育児/産休中
 ⑧ 定年退職などリタイヤ世代
 ⑨ その他 [具体的に教えてください :]

(4)-1 文化・芸術活動に関わっている方はこちらもご回答ください。

- ① ギャラリーなど施設運営
 ② 事業企画・運営（アートマネージャー、キュレーターなど）
 ③ 芸術家/クリエイター/作者
 ④ 研究者
 ⑤ 文化・芸術活動のボランティア
 ⑥ 文化・芸術分野の教員
 ⑦ その他 [具体的に教えてください :]

(5) 現在のアートイベントへの参加頻度をお答えください。

- ① あまり行くことがない
 ② 年に1～5回程度
 ③ 年に6～10回程度
 ④ 月1～3回程度
 ⑤ 週1回以上

以上です。ご協力ありがとうございました。

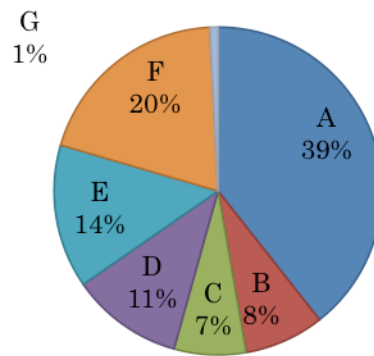
3.集 計 結 果

問 1 SIAF2014 には、どの立場でかわりましたか。

表 1

項目	度数	割合(%)
A,連携事業者	50	39
B,自主事業者	10	8
C,プログラム参加者	9	7
D,プログラムスタッフ	14	11
E,行政担当者	18	14
F,その他	25	20
G,無回答	1	1

図 1

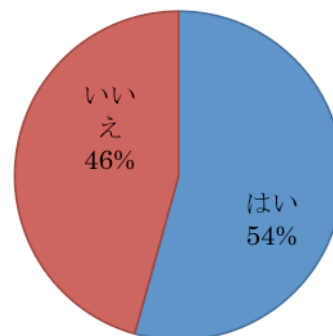


問 2 SIAF2014 が実施される以前から札幌でアート活動をしていましたか。

表 2

項目	度数	割合(%)
はい	69	54
いいえ	58	46

図 2



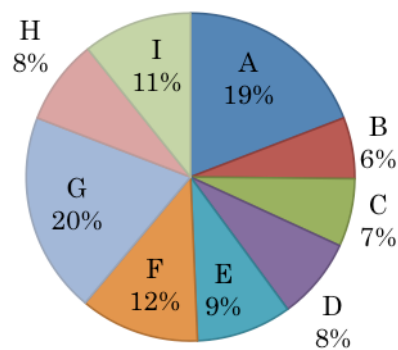
* 「はい」と答えた方に任意で団体名・活動名義等の回答を求めたが、[個人及び事業]が特定されるため回答結果の掲載はしないこととした。

問3 SIAF2014にかかわったきっかけは何ですか。項目のうちあてはまるもの全てに○をつけてください。(複数回答)

表3 (n=298, 複数回答)

項目	度数	割合(%)
A,芸術祭に興味があった	57	19
B,ディレクター(坂本氏)に興味があった	18	6
C,出品作家に興味があった	20	7
D,プログラムに興味があった	24	8
E,テーマに関心があった	28	9
F,札幌のイベントに興味があった	35	12
G,職務の一環	59	20
H,友人知人に誘われた	25	8
I,その他	32	11

図3 (n=298, 複数回答)



「その他」全回答

- ◇ 近所だったから
- ◇ 札幌及び北海道の文化を世界へ向けて発信したい。
- ◇ 札幌市の施設指定管理者として札幌市の事業に協力
- ◇ いけばなで是非参加したいと思った
- ◇ 地域ディレクターからの要請
- ◇ 出品作家として
- ◇ 出品依頼があった
- ◇ 地元愛
- ◇ 展示への参加に声をかけてもらったから
- ◇ 四方幸子氏のアート×ライフ企画の意見交換会?に参加した
- ◇ 業務として
- ◇ 自然な流れ
- ◇ 人事異動
- ◇ 北海道のアートシーンに興味があった
- ◇ 28年前から芸術祭に向けた活動をしてきました
- ◇ 人事異動
- ◇ 事務局からの依頼
- ◇ SMAL からの依頼、招聘作家からの依頼
- ◇ 業務命令

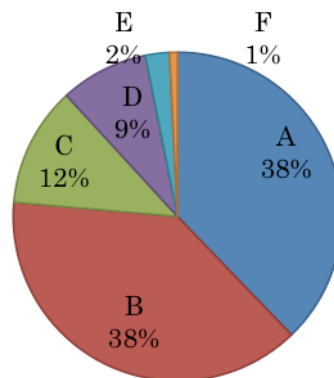
- ◇ 端聡氏の活動に共感した
- ◇ 同時期に演劇シーズンを開催していたため相互宣伝が可能だと思いました
- ◇ 私たちの事業が来札者の役に立つと思った
- ◇ 札幌市で行われる芸術祭のため
- ◇ 国際舞台で活躍する現代美術家を札幌で紹介する為
- ◇ 雪まつりのプロジェクションマッピングに興味があった
- ◇ プレイベント段階から興味があった
- ◇ 大学の研究のアウトリーチとして、企画・運営を依頼した会社から提案された
- ◇ 大学から学内事務局として協力するよう働きかけがあった

問 4-1 「都市と自然」のテーマ性を感じた。(5 件法)

表 4-1

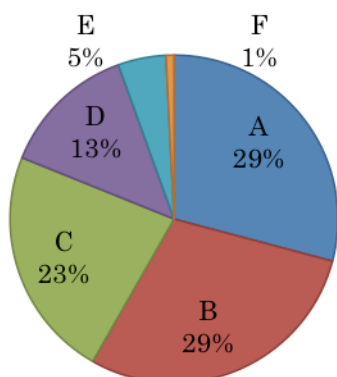
項目	度数	割合(%)
A,とても感じた	48	38
B,まあまあ感じた	49	38
C,どちらとも言えない	15	12
D,あまり感じなかった	11	9
E,まったく感じなかった	3	2
F,無回答	1	1

図 4-1



問 4-2 これまでの札幌のイメージとは違う新しい価値を見つけた。(5 件法)

図 4-2

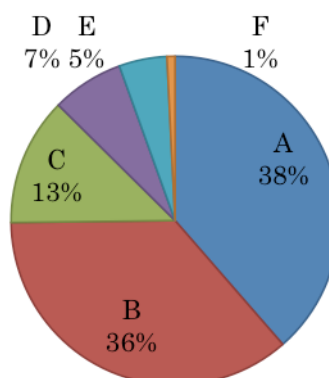


問 4-3 現代アートに何らかの刺激を感じた。(5 件法)

表 4-3

項目	度数	割合(%)
A.そう思う	49	38
B.まあそう思う	46	36
C.どちらとも言えない	16	13
D.あまりそう思わない	9	7
E.そう思わない	6	5
F.無回答	1	1

図 4-3



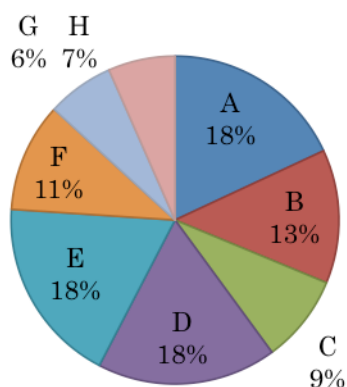
問 5 SIAF に参加し、特に印象的だったのはどの点ですか。

項目のうちあてはまるもの全てに○をつけてください。(複数回答)

表 5 (n=288, 複数回答)

項目	度数	割合(%)
A.ゲストディレクター	52	18
B.「都市と自然」というテーマ	38	13
C.ゲストディレクターのメッセージ	25	9
D.キュレーション・企画の世界観	51	18
E.参加作家・作品	53	18
F.札幌市の魅力を再発見	31	11
G.作品制作への参加	19	6
H.その他	19	7

図 5 (n=288, 複数回答)



「その他」全回答

- ◇ ガイドブック、ドキュメントブック
- ◇ プログラムやワークショップの運営
- ◇ ボランティアの参画
- ◇ 基本構想には社会彫刻概念が含まれていたこと
- ◇ アイヌ、炭坑、近代化などの北海道の歴史
- ◇ 参加作家のセレクションが良い
- ◇ 内外のアート関係者の考え方と動き方

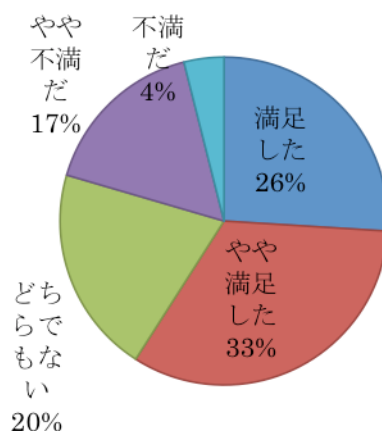
- ◇ 組織づくりが必要だったこと
- ◇ 市民の無関心が印象的
- ◇ 自然史という切り口からの北海道と福島を繋げる写真論的展開と可能性
- ◇ 「札幌で語る近代」で語られた菅啓次郎さんと港千尋さんと佐藤友哉さんの言葉
- ◇ 地下街という芸術祭の会場、入場無料、参加無料のイベント、芸術祭に関連したレクチャーイベントの開催
- ◇ 一カ所だけでなく色々な場所で展示されていて良かった。
- ◇ 現代アートを通して札幌の課題に気がつくことが出来た。

問 6 SIAF2014 に対する満足感がありましたか。(5 件法)

表 6

項目	度数	割合(%)
満足した	33	26
やや満足した	42	33
どちらでもない	26	20
やや不満だ	21	17
不満だ	5	4

図 6



「満足した」「やや満足した」と回答した理由の自由記述

- ◇ 自分自身が担当した業務ばかりでなく、市内各所で多種にわたるイベントや連携プログラムが実施されたので、アートの体験機会が増え、新たな美的価値に出会うことが出来た。
- ◇ 大規模なイベントの一部を業務として完遂できたことと、来場者数が増加したこと
- ◇ ともかくも第一回目を開催できたことは喜ばしいが、その後の市長選挙という政治の波にもまれて方向性が定まらなかったから。
- ◇ 札幌のまち全体が芸術祭の舞台となり多くのアートにふれることができた。
- ◇ 同時期開催事業として参加できたことに意義を感じたため
- ◇ 来場者参加型のプログラムが多かったため
- ◇ 特色のある国際展でした。もっと予算規模も大きく広範囲な場所で作品を見たい。すすきのの活用が札幌の魅力を引き出すと考えられる。今後に期待。地域の作家が 500m 美術館というのは初めから 2 軍的な扱いで見られる展評やコメントが多かった。このように作家のランク付けが見える形はまずいと思う。作品を見る人が判断すべきこと。今後、500m 美術館は若手登竜門的なコンペにすべき。
- ◇ 将来への課題も含め、地域としては初めての試みとして、有意義なものだった。
- ◇ 3 ヶ月の長い間、札幌が文化を享受できるまちになっていた気がします。予算や人材など厳しい状況の中で国際芸

術祭開催は、先人に劣らない部分はあると思いますが、展示作品に旧作が多く作品数が少ないことなど、単純に国際芸術祭としての先進性を感じることができなかったことが残念でした。

- ◇ 今までの札幌では見る事が出来なかった作品や人、感性や思想に出会えたから。
- ◇ 北海道、札幌だから可能なクオリティを持った（少なくとも暗示する）芸術祭であった。
- ◇ 国際的なアーティストの作品を札幌で見る事が出来た。そして彼らも札幌の自然などをテーマに作品を制作してくれたので嬉しかった。
- ◇ 芸術祭を通していろんな人に出会えたので
- ◇ 好きな作品に出会うきっかけになったこと
- ◇ 非常に魅力的な作品やプロジェクトが多く、ボランティアやスタッフの方もとても良い人が多かった。
- ◇ チ・カ・ホなどの空間で芸術祭のプログラムを展開できたのは、多くの人に周知やきっかけを与える意味でも非常に有意義なことだと感じています。また、美術館などの閉じられた空間以外でも展示の可能性を都市に植え付けるのは現代アートやメディアアートにとって非常に重要なことなので、その意味でも大きな成果だと感じています。
- ◇ 「都市と自然」というテーマや、これからの暮らしかたについて考えるきっかけになった。
- ◇ SIAF をきっかけに札幌、北海道の魅力を知りました。自然の近くに暮らすことの喜びを知りました。
- ◇ 末端とはいえ、運営側スタッフとして参加したので、やり遂げた感はありません。
- ◇ 自分の中の価値観として、新しいベクトルを作ってもらえた。刺激的な人とたくさん出会えた。
- ◇ 初回の芸術祭としての成果は得たと思うが、市民に対しての広がりを持てなかった。
- ◇ 事業運営に主体的に関われたため
- ◇ 無事に終わられたという達成感。より良いものに出来る可能性がまだあるため。
- ◇ 限られた時間と予算の中で、ベストと思われる展覧会を実施することができたので。ただ自分が関わった企画以外については、成果について疑問に思うものもいくつかあった。
- ◇ 前評判を覆すような結果（集客数、道外客数）を得ることができたから。
- ◇ 個人的には、運営に関わったこともあり、作品やテーマの趣旨を深く理解でき満足した。しかし、周囲の市民では、北海道の近代史や現代アートを理解しきれない人、芸術祭との関わり方がわからなかった人もいて、運営側の人間としては、PRや会場設定、作品構成に工夫の余地があったのでは、という心残りもある。
- ◇ 札幌の新たな一面を内外にアピールできたから。
- ◇ 運営スタッフとして関わり、制作の現場等に立ち会うことができたため
- ◇ 道内で今日の芸術表現に触れる機会が少なく、大きな文化的イベント頻度も少ないため。
- ◇ 札幌ではなかなか観ることの出来ない作品が見られたこと、大規模な芸術祭が札幌ではほぼなかったため、新鮮さ、ワクワク感がありました。第一回目としては良かったのではないかと思います。
- ◇ 人員も日程も費用も全く十分ではない準備状況ではあったが、それでも多くの関係者の努力や想いで、ひとまず芸術祭は始まり、そして終了を迎えられたこと。
- ◇ 連携事業としての位置付けが事業の実施にプラスになり、よりよい事業になったため。
- ◇ 「都市と自然」は札幌でこそベストフィットのテーマで他の芸術祭の追随を許さないものだから。
- ◇ 現代アートという世界の一端を知ったこと。
- ◇ 将来的な国際芸術祭への成長と定着に一定の道標を示せた。

- ◇ ゲストディレクターが急遽会期中に参加できないことが発表となったにも関わらず、市内様々な施設において市民参加のもと芸術祭が遂行できたと思う。札幌市において、このような芸術祭を進めていく下地があったことが認識できたため。
- ◇ 連携事業に対する宣伝効果もあり、利用者が増加した。
- ◇ 札幌各所で世界の作家、作品に触れることができたため。
- ◇ 都市と自然とが融合した年の魅力を再発見出来た反面、市民への周知期間が足りなく感じた
- ◇ 北海道内では普段中々得られないインスピレーションや新たな考え方を得る事が出来たから。
- ◇ 多くの市民ボランティアが参画し、会期の後半になるにしたがってじわじわと盛り上がった芸術祭であったと思う。道外や海外からの来場者も多かったのではないかな。北海道に縁のある作家作品も多く、札幌・北海道の自然と都市の近代化の歴史を改めて考えるきっかけとなったと思う。
- ◇ 無料で借りられたことと、芸術祭の知名度により普段接点のないお客さんが来てくれた。
- ◇ 札幌で初めて開催する国際芸術祭として、開催する意義があった。
- ◇ 芸術祭との連携事業として開催したことで、自分たちのイベントに、道外からの美術関係者の方たちやお客さんが立ち寄ってくれたことは収穫であった。また、連携事業とすることで、通常よりは大きな企画を立てることができ助成金も申請することができた。ただ、自分たちのイベントで精一杯で SIAF をゆっくり味わうことができなかった。

「やや不満だ」「不満だ」と回答した理由の自由記述

- ◇ 一部の人だけの盛り上がりに見える。また、仲間同士、知り合い同士が多くて関わりづらい。私の周りで SIAF を知っている人は一人もいませんでした。なので、お手伝いしていることを説明しても理解されていないと感じました。
- ◇ 個別に各イベントが開催されていただけで、SIAF としてのテーマ性も深みも連携も全く感じなかった。
- ◇ 本体事業での札幌から発信する音楽や舞台芸術の発表の機会がなく、SIAF2017 での改善を求めます。ただし、道外海外アーティストの表現に触れられて大変刺激になり幸せでした。
- ◇ もっともっと札幌独自のものをやってほしかった。テーマである「都市と自然」をもっと大切にしていってほしい。地元の活動をもっと認めてほしかった。
- ◇ 札幌独自の企画が少ない。市内の遊園地の利用など、新しい場所の魅力の創造・発見がない。
- ◇ 満足がいく展示にならなかったこと。その原因として自身の経験・力不足。また企画チームとの連携がうまくいかなかったため。
- ◇ こんなものなのかな、という失望感というか、期待しすぎたのかもしれません。総括して言うと「なんだかよくわからないうちに終わってしまった」という印象です。
- ◇ 国際的イベントが開催されているという祝祭感をまちなかで感じられなかったから。
- ◇ 一般の札幌市民への浸透がなされていなかったため。札幌の各地域の活用があまりなされていなかったと感じたため。
- ◇ 運営に関わった立場として満足だとは決して言えない課題・問題を沢山知ったため。
- ◇ 市民の無関心、「作家」の市民に対する上から目線

- ◇ 市民全体に芸術祭ムードが足りなかったと感じている。
- ◇ 最終的に目的目標としていたものが見えづらかったです。
- ◇ 芸術への関心が深くないと楽しめない作品が多い。会場が広すぎて会場毎のボリューム感がない。各会場を回るツアーを企画するなどの工夫があっても良かったように思う。ツアーがなくても、1日パスポートなど交通手段を検討するなどあっても良い。
- ◇ 市民がもっと関われる取り組みがあったら良いと思った。
- ◇ 札幌やその近郊の地域の物語をモチーフにしている作品について、道外の作家やキュレーターの解釈が浅いと感じました。そのため、共感やうなずける新しい視点がありませんでした。
- ◇ 身近なイベントとして感じる事ができなかった。
- ◇ 廻った中では芸術の森、資料館は楽しかったが、地下歩行空間は「芸術祭なのにたまに行われている他のアートイベントよりつまらない」と感じました。インターネットやミイチは面白かったです。

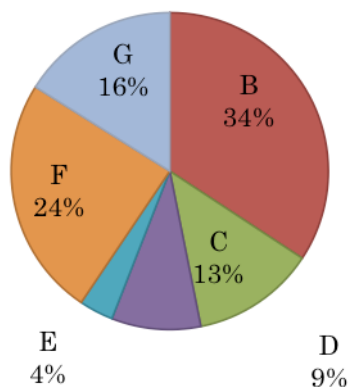
問7 SIAFにかかわって、ご自身に変化はありましたか。

項目のうちあてはまるもの全てに○をつけてください。(複数回答)

表7 (n=143, 複数回答)

項目	度数	割合(%)
A,アートを身近に感じるようになった	0	0
B,アートを通じた交流が増えた	49	34
C,芸術鑑賞の機会が増えた	18	13
D,レクチャー・WSなどの参加機会が増えた	13	9
E,アートに関わる創作やボランティアを行うようになった	5	4
F,変化はない	35	24
G,その他	23	16

図7 (n=143, 複数回答)



「その他、エピソード」全回答

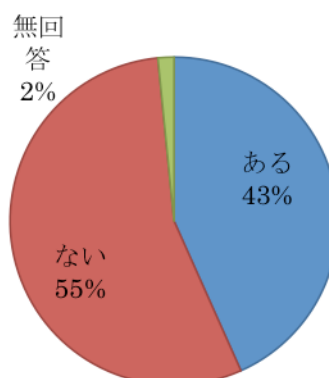
- ◇ よくわからないけど自分なりに理解しようとする事が多くなりました。色々なアート、それに関わる人がいて楽しい毎日でした。今現在も楽しく過ごせていて SIAF に関わって良かったと思います。
- ◇ 参加作家やボランティアの方々との個人的な交流は持てたが、それは日常の延長に過ぎない。むしろ SIAF 側との壁・隔たりを強く感じた。
- ◇ おかげさまで札幌・北海道から発信し世界に影響を持つコンセプトワークをより強く意識するきっかけとなりました。
- ◇ 他ジャンルの芸術文化が前よりも気になるようになりました。
- ◇ SIAF 以後の作品出品や招聘の際のきっかけになっているようだ
- ◇ 他の芸術祭を訪れた際に、展覧会はもとよりまちへの導入や展示場所への誘導方法など、札幌と比較して考えるようになりました。また都市の規模や特徴、それにふさわしい芸術祭・アートプロジェクトの実現と必要性について、より関心ができました。
- ◇ 良い作品がひとつ増えた
- ◇ 公共の場で展示を行う上で起こりうるリスクや、自身の作品の問題点に気付かされた。また、企画側との関わりについて今後注意する点など学ぶことができた。
- ◇ SIAF 期間中に開催したイベントを、SIAF 後継続して行っていくことになりました。ボランティアで参加した者同士の交流や、本当は SIAF に興味あったけどなかなか入り込んでいけなかった人の手助けができていているように思います。SIAF から独立し、みんなが自由にアートについて語れる場所になっていけるよう計画しています。
- ◇ 社会・企業にとってアートとは何か？を初めて考えた
- ◇ 様々な視点での鑑賞を考えるようになった。
- ◇ SIAF をきっかけに札幌に移住することになりました。いつまでいられるかわかりませんが。
- ◇ コピーライターとしての自身の在り方を考え直した。
- ◇ 今までの人生において、美術館に行こうと思ったことはなかったが、今では近くの美術館や旅行先の美術館等について興味をもって調べるようになった。
- ◇ 他の芸術祭や、芸術を通じた地域活性への興味が高まり、情報を収集する機会が増えた。
- ◇ 多くの高いレベル感覚を持つ人々と交流と出会いがあり、これからの北海道展開の可能性と展開性を想定することができたと思います。高いレベル意識で、作家や知識人との知的交流と出会いがあり、これからの北海道文化の展開の可能性に繋がるネットワークが出来たと思います。
- ◇ こちらで行った主催事業の会場にトクイの銀行を置きました。
- ◇ 札幌資料館が非常に身近な存在になった、良い空間

問 8 SIAF にかかわって、周囲の人（家族、近所の人、同僚、友人等）に何か変化はありましたか。

表 8

項目	度数	割合(%)
ある	55	43
ない	70	55
無回答	2	2

図 8



周囲の人の変化についての自由記述（「ある」と回答した方に任意で回答を求めた）

- ✧ 周囲の人たちから、現代アートの所感や SIAF への要望を聞くことが多くなった。
- ✧ 企画や出品の中枢部が道外勢中心で行われたことによって、道内作家たちは北海道の独自性に対する意識が深まった。
- ✧ 好恶の違いはあれ、現代アートに対して関心を持つようになった人がある。
- ✧ 作家や作品の意図が理解できなくても何が起きているか把握しようとするようになった。
- ✧ 太鼓演奏家の弟子達も、世界にあわせて活動するなど、意識改革になりました。
- ✧ 私はダンス関連の人間ですが、劇場だけではなくまずは美術館に生徒や観客の方たちが行くようになった。
- ✧ SIAF をきっかけに他分野で活動する方々とデザインに関わる勉強会を行うようになりました。
- ✧ 家族が語学（英語）の習得に励むようになりました。
- ✧ 地元（札幌）の友人が初めて自分の作品に実際に触れてくれました。
- ✧ 30 代を中心に、美術、デザイン関連のボランティアなどの、社会参加が増えたようだ。
- ✧ 芸術祭や現代アートに批判的もしくは関心のなかった知人もスタッフとして働いていました。仕事を通じて、様々な層の芸術文化への理解や興味関心が高まるきっかけになるのではないかと思います。
- ✧ アートを通じた友人・家族との交流や、札幌の歴史や文化の再考のきっかけになった。
- ✧ SIAF について議論するようになった
- ✧ 久しぶりに多くの友人に会えた。
- ✧ 両親がこのイベントのことを知っていた。お茶の間レベルで情報が行き渡ったのだと思った。
- ✧ 楽しそうに見えると言われるようになった
- ✧ アート関係の友人が増えた。
- ✧ 日常の話題に芸術祭が出るようになった。
- ✧ 展覧会などがあつた場合に誘う人が増えました。

- ◇ アートに対しての事柄について話す機会が多くなった。また、他の芸術祭に出向いてみたいという声を聞く機会が増えた
- ◇ 仕事で SIAF に関わった市役所の人たちが、苦しみながらもアートに巻き込まれて変わっていく様子はおもしろかったです。
- ◇ アートについて語る機会や、交流する場が増えたと思う。
- ◇ 家族が美術に関心を持つようになった
- ◇ 札幌のアーティスト、展示関係者との交流する機会が増えたと思います。
- ◇ 周囲の若手アーティストの活動が活発となった。同時にアートマネジメントを目標とする若手も増えた。
- ◇ 同僚から出てくる話しが、やたらとアートの話しが増えていった。
- ◇ クレームめいたことも含め、芸術祭の感想を言われるようになりました。
- ◇ 今までアートの話しをしなかった友達が美術館に行ったとか、SIAF に行ったとか話しをしてくれるようになった。
- ◇ 自分の仕事を知ってもらう機会になり理解が深まった
- ◇ 事務局同僚（主に市からの出向職員）の、現代アートへの心理的抵抗が少なくなった。
- ◇ 手芸や小手先の表現、また古典以外の芸術表現に触れる機会を創出し、学生が日常の（サブやメイン、カウンターを含めた）文化や社会的な問題、テクノロジーを自身の活動と接続して考える契機の一つとなった。
- ◇ 家族や知人が鑑賞し、それがきっかけとなって芸術に関心を持つようになった。
- ◇ 事務局としてアートに関わった行政の人が、アートに興味を持ち、アートに関する色々な話が出来るようになったのではないと思う。
- ◇ この3年間、家族共々アートを身近に感じる事ができた。
- ◇ 同僚が興味を持つようになり、色々と参加していた。
- ◇ 友人知人などから、チカホの企画展示などに触れ「街と芸術」を実感したという声を聞いた。
- ◇ 少なくとも芸術文化を話題にするようになった。
- ◇ アート活動において市内アーティストと繋がりによる活動の幅が広がった学生がいる
- ◇ 芸術祭の関わりを共通の話題とする人が増えた
- ◇ 仕事で働くスタッフの意識が商品陳列やPOP作成などに対して大きく変化した
- ◇ アート業界相互の理解が以前より少し進んだと思います。

問9 次回 SIAF へ期待すること、その他要望や改善点などの提案があればご自由にお書きください。(自由記述)

全 77 件の回答があった。本報告書では紙幅の都合上、全ての回答をそのまま掲載することはできない。全回答の質と量を担保することはできないが、回答の傾向性を示すために、回答から共通するキーワードを抽出し項目を作成した。また代表的な意見を掲載した。

・広報について

- ◇ 次回、告知をもう少ししたほうがいいかと思います。札幌に住んでる友人の認知度がほとんどなかったです。
- ◇ ポスター、チラシ、web 等の宣伝媒体のデザインのテイストがあまりに市民感覚とずれていて、親しみが持てなかった。広報体制を確立することが必要。
- ◇ 特に広報体制について、連携事業と本体事業との間に溝があると感じた。有機的な連携となるよう、実行委員会側で連携事業についてまとめたパンフレット等を制作して各会場等にて大々的に配布するようにして、本体事業と連携事業の回遊を促進することが好ましいと感じた。
- ◇ 3 年に 1 回という微妙に時間が空いてしまうのも忘れられてしまう要因になりそうなので、次も開催すると早めに広報を開始し、プレイベントを継続的に実施するなど、何らかの対応が必要だと思います。

・アーティストについて

- ◇ 札幌はもちろん広く北海道の芸術作家を大切にしてほしい。各人の実績や試みを紹介し、今後への活動の意識向上となるように。地元芸術家、地元市民の底上げになるように。
- ◇ もう少し国際性のある作家・作品選考だと多様な価値観を楽しめる気がします。

・作品、プログラムなどのコンテンツについて

- ◇ 解説や説明、敷居の低いツアーなど増やしてほしいです。もしくは初心者同士が企画して実践できるような余裕が欲しいです。SIAF 期間中、途中で導入された子ども向けの展示説明シートが大人にも好評でした。
- ◇ 参加作家の選定や上演作品、その他の企画について、他の芸術祭と際立った差別化を図った上で、未来に向かってどのような展望を作り上げるのかという問いと回答のかけらを示すような芸術祭となって欲しい。
- ◇ 誰でも楽しめるわかりやすい作品、参加型アートの導入も必要ですが、アートの楽しさと同時に奥行きを感じることの出来る作品を増やしていただきたいです。

・運営体制について

- ◇ なるべく早い段階でディレクターの選定とキュレーターチームの選定をするべき。またキュレーターチームについては、札幌を拠点に活動できる体制を整えるべきだと思う。
- ◇ 運営チームの連帯感や信頼関係を内部だけにとどめず、アーティストやボランティアも含めてしっかり築いてほしい。アーティストと関わる専門のスタッフを企画の段階からもっと増やしてほしい。

・会場について

- ◇ 資料館や赤レンガ、清華亭など、古い建物で行うのはとても良いと思ったし、続けて欲しいと思う。
- ◇ すすきの、狸小路での展示、炭坑遺産展示など場の魅力や歴史的な意味合いを取り込んだ展示に期待したい。
- ◇ アクセスの改善

・北海道札幌で行う芸術祭の独自性について

- ◇ 北海道、札幌だから可能となるクオリティの掘り下げを、世界の中の札幌というひとつのサロンと捉えて、世界の文化と交感しながら進めていただきたい。
- ◇ 芸術祭全体としていわゆる「東京文化の輸入」という、良くない意味でとても札幌らしい印象になってしまっているように感じます。札幌生まれで現在東京にいる立場からは悔しくも思いますし、札幌が価値としているところはそれだったっけ？という思いもあります。

・市民（回答者、まわりの人々）の反応について

- ◇ 市民全体の盛り上がりには程遠く、イベントについて知らない、知っているが行っていないという友人も多くいた。
- ◇ 就業しているので休日に参加となると、観覧で手一杯となります。平日でも金曜の夜なら、とか就業していても関わられるような時間帯があれば何かできることもあるのかと思いました。

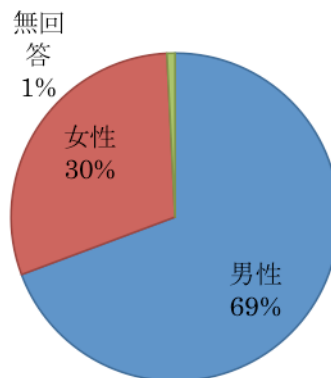
問 10 回答者の現在の状況

●性別

表 10-1

	度数	割合(%)
男性	88	69
女性	38	30
無回答	1	1

図 10-1

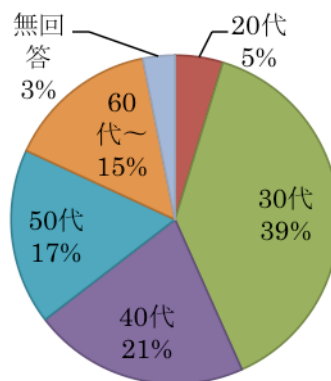


●現在の年齢

表 10-2

	度数	割合(%)
～10代	0	0
20代	6	5
30代	49	39
40代	27	21
50代	22	17
60代～	19	15
無回答	4	3

図 10-2

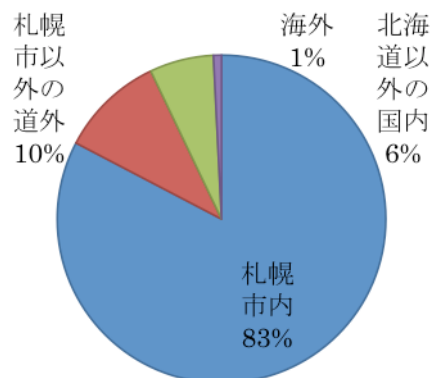


●現在の住まい

表 10-3

	度数	割合(%)
札幌市内	105	83
札幌市以外の道外	13	10
北海道以外の国内	8	6
海外	1	1

図



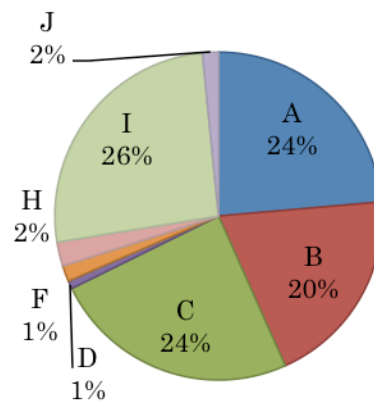
10-3

●現在の職業

表 10-4

	度数	割合(%)
A,会社員	30	24
B,公務員	25	20
C,自営業	31	24
D,大学・専門学校生	1	1
E,高校生以下	0	0
F,パート・アルバイト	2	1
G,主婦・育児産休中	0	0
H,定年リタイヤ世代	3	2
I,その他	33	26
J,無回答	2	2

図 10-4

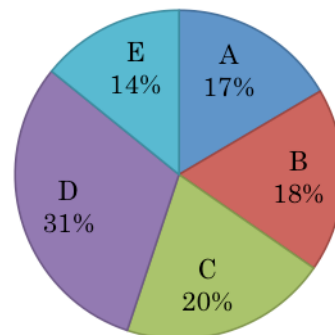


●現在のアートイベントへの参加頻度

表 10-5

	度数	割合(%)
A,あまり行くことがない	21	16.5
B,年に1～5回程度	23	18.1
C,年に6～10回程度	26	20.5
D,月1～3回程度	39	30.7
E,週1回以上	18	14.2

図 10-5



②札幌における SIAF2014 実施後のヒアリング調査まとめ

●SIAF2014 参加アーティスト／地元アーティスト／教育機関従事者

日時：2015 年 7 月 3 日（金）

出席：伊藤隆介（SIAF2014 参加アーティスト／北海道教育大学岩見沢校）

聞き手：大友恵理

※電話によるインタビュー

○開催前の話：札幌国際芸術祭の開催が決まって

開催に至るまでは、展開が早いと思った。あと 1、2 年はかかると思っていたので。プレビエンナーレという市民レベルの動きはあったが、実現に向けては政治や行政のプロセスがあと 1、2 ステップは必要だろうと考えていた。市が実施へと動くまでには、芸術祭そのものの市民への浸透や、賛成や反対といった意見のつなひきがあると思っていたが、上田市長のリーダーシップだと思うが、札幌市が意外とサクサクと動いてびっくりした。

芸術祭の開催については、もちろん歓迎した。「ビエンナーレのような国際的な美術展を札幌でもするべき」と発案した故・門馬よ宇子さん（アーティスト／ギャラリー門馬オーナー）と端聡さんが長く運動しており、そのために門馬さんは私財を投入していたのを尊敬していたし、運動自体にも個人的にも賛同していた。

○学校関係者の立場から

近年は、30 代くらいの北海道の人達の間では、京都国際現代芸術祭その他の道外の芸術祭や展覧会を観に行くのが珍しくなくなってきたが、東京はともかく福岡や京都などの長い歴史や文化的蓄積のある地域と違い、学生は地元で歴史的な名品や、最新動向の作品を見る機会がない。制作への熱意に対して、観る能力を養う機会が圧倒的に少ないから、芸術祭のようなものが北海道で行われることは、今後、表現に関わる才能にとっては非常に良い教育機会と思っている。

たとえば豊田市などの産業の中心地、アメリカの地方都市などでは、豊田市美術館やニューヨーク州のオルブライト・ノックス美術館のような地元企業や地域の名士が大規模なコレクションを持っており、地域住民も文化的なご相伴に預かるというのが普通だが、北海道は歴史が短いこともあり、そういった環境にはない。

道立美術館は努力しているものの、主なミッションは「地域の美術」に特化されているし、札幌市の美術館はアートパークの一部であるため、収蔵作品や購入予算が多いとはいえない。そのため、世界や日本美術史上の流れを名品のコレクションを通して網羅的に見せるような常設展示は不可能で、それが地域の文化的なネックとしてある。これは一朝一夕には解決しない。だから、公共サービスとして、世界の新しい動向や活躍中の作家などを紹介して、問題意識を持つ若い人たちが知識を広げたり、学ぶ機会として国際芸術祭には期待している。

一般の市民も、道外やアート・ヒストリーに属する作家の仕事を観るという経験が少ないから、いつまで

経ってもメインストリームの美術や文化そのものに対して、他人事というか贅沢品という意識があり、興味が深まらない。昨今の北海道では「グローバル」という掛け声をよく聞くが、自分たちの住む世界を知り、自分たちの価値をマッピングできなければ、それはただの自己満足。ポピュラー音楽のフェスティバルでは、「ライジングサンロックフェスティバル」や岩見沢の「ジョインアライブ」等、いろいろな音楽家を呼ぶことに関しては誰も反対する人がいないし、開催にはご苦労があるにもかかわらず、音楽ファンが刺激され続けていることを考えると、美術の場合にも同様の可能性があるのではないかと思う。

○最近の学生や若い世代

長く続く不景気で、いろいろな情報が北海道に入ってこなくなった。その結果、北海道教育大学に限らず、学生・若者全体の美術・芸術に対する専門的な興味（とりわけ道外、海外の動向への好奇心）は薄れている印象がある。

少し上の世代、現在の30代半ばくらいで道内で活躍している作家たちが学生だったころは、バブル崩壊で今以上に社会状況が悪く（いわゆるロスジェネ世代）、インターネットもそれほど普及していなかった。先行世代の活動を通して様々を学んだということもあると思うが、芸術や表現、それらの情報に対する飢餓感というか感度がとても高く、機会に対して積極的だった。それに対し、現在の20代は、美大生でも美術そのものに興味が薄い。教育大の芸術系教育組織の岩見沢への移転、札幌市立高専の市立大への改組（実技者教育からプロデュース教育への移行）、私立学校の芸術系学生定員の減少や閉校などで、実は札幌におけるアート系の若者の地力は弱くなっている印象だ。芸術祭に対してもある程度の興味はあるけれど、そのポテンシャルを自発的に引き出しているかというと、程遠い感じがする。彼らは本来は芸術祭みたいなもので啓蒙されるべき対象なのだけど、事務局やスタッフや制作側がやっていることが十二分に伝わっておらず、その方法にはまだまだ検討の余地があると思う。

程遠いと言ったが、むしろ一般の人達の方が芸術祭に対して興味があるかもしれない。道内の美大生の多くが「美術＝公募展や地域展」だと思っている。その中でも、先行世代は東京や京都の全国的な公募展と地域の公募展で自分の実力を測る複眼的思考だったが、現在の学生は二股というよりは道内の公募展オンリー。そこそこ絵を描けていけたらいいというモチベーションだから、「洋画」のことは考えても「美術」のことは考えていない。伝統的に、どこでも公募展派と現代美術派というのは対立するものだけれど、今は公募展を含めた美術自体の体力が落ちているので、お互いに脅威という関係も成立しづらい印象だ。

○文化における景気と情報の関係

日本中の美術館に共通して言えるが、収蔵予算が大幅削減か、予算があっても使えない状況にある。例えば、北海道立近代美術館には基金があって、五年前に藤田嗣治の作品の購入に高橋知事がストップをかけた。購入予算はあるけれど「絵の価格や緊急性、道民感情を配慮した」というのが理由。つまり美術や文化を「無駄使い」と考える感覚がある。展覧会も、新聞社やテレビ局主催の展覧会の共催や貸館事業が多い。道近美も以前は2、3年に1度は現代的な美術の展覧会はできていたが、近年は収益や動員を求められるのかので、時代にビビットな展覧会や、マニアックな自主企画の開催はなかなか難しそうで、気の毒だ。

北海道の場合は気概がある経営者だったり、やたらと「やる気」の町おこしの人達など、文化事業を個人でやる人もいる。小金があっても「マイブーム」でやっている場合が多いから、ある種勘違いみたいみたいな面や長期的な視野が欠けるもあって、結果的に文化的な収穫は小さいのだけど、それでもそういうところから起こるといって「文化」はこの20年存在したと思う。が、おそらく景気の低迷で、最近はそれも見なくなっている。

こうした状況では、若い人にとっては自腹で遠くへ観に出掛けられない限り八方塞り。でも、保護者などの経済的な状況が苦しいから、それも難しい。芸術祭のような存在は、文化芸術の知識や情報のアップデートや地域のアートシーンの牽引役、あるいはペースメーカーとして重要だと思う。

○地元作家の気概／500m 美術館会場の予算

出品作家同士でなにか意見交換をした訳ではないが、500m 美術館会場にはもう少し運営予算を回した方がよいのではないかと…という気持ちは共有しているだろう。スタッフの配置や造作の予算にしても、かなりカツカツで事務局は苦勞をされた様子だった。美術館に対してサブ的な位置づけだとしても、公式な会場であるならばもう少し余裕のある対応が望ましい。

ここに出品した地元作家達は、上遠野敏さんらベテランの作家達を中心に、国際芸術祭というものを札幌で開催することの意義を感じ、「地域の作家として声がかかったのだから、“主体”としてサポートしなければ」という意識が強かったと思う。作家への制作・出品予算は数万円で、制作費が持ち出しになったとしても手を抜くような人はいなかった。そういう意味で、500m 美術館の展示を観ると、ベテラン作家たちが北海道の美術や芸術の状況に対して責任を果たそうという気持ちがとても強く、感心した。恵まれた他のスペースの「メイン作家」以上に力を注いで、決してゴージャスではないが充実した展示となっていた。実際、500m 美術館会場への道外の美術関係者は評価をよく聞いた。彼らの地域への姿勢の賜物だ。

○ボランティア

各地で展覧会に参加した経験の中では、SIAF ボランティアはレベル高いと思った。

500m 美術館では、会場ボランティアが突発的な事態の際にもトラブルシューティング的な対応を自主的にやってくれる人がとても多かった。搬入や搬出の際も、(バイトかボランティアか分からないけれど) サポートスタッフがとても献身的にやってくれたと思う。

例えば福岡アジア美術トリエンナーレの場合、美術館(展示空間)でボランティアを行っている人は年配の方が多い。作品解説なども上手く(というか、作家より詳しい)、文化事業のサポートに慣れているという印象で、福岡の地域性として文化への理解が深いということを実感する。SIAF ボランティアは、美術が専門でもなく美大生でもない一般の方がやっているのだけど、全般にとってもよく気がつくし、真面目で、なにより一生懸命関わろうとする姿勢があった。北海道民の個人主義的な性格を考えると、ボランティア活動に関心がないだろうと思っていたことを反省した。

基本的に組織化された訳ではないのに「道民は、こんなにできるんだ!」という驚きがあった。北海道は歴史が短いし、SIAF が横浜のように、つまり天野太郎さん(ヨコトリ／横浜美術館)や山野真悟さん(黄金

町バザール)、池田修さん(BankART1929)のような、地域アートイベントのベテラン勢が運営している訳ではなかったし、初めて開催される国際芸術祭だから、ボランティアを組織化するにも(道外から専門スタッフを招聘したとはいえ)札幌市自体が経験がなく、かなり難しいだろうと思っていた。ふたを開けてみたら、札幌のボランティアの人達がこれほどできるのだと、嬉しい誤算というか、ぼくら作家、クリエイターが札幌の人達を甘く見ていたという気はした。それが分かったことは、SIAF2014の一番大きな財産だといえる。

○岩見沢／上遠野敏氏と「そらち炭鉱の記憶アートプロジェクト」

空知(夕張、三笠など)では「そらち炭鉱の記憶アートプロジェクト」(以下、炭鉱の記憶)が連携事業とされていて、そこに関わる人達の姿勢はSIAFにも学ぶ点があったと思う。

「炭鉱の記憶」はNPO法人炭鉱の記憶推進事業団の共催で実施されているが、企画としてはほぼ上遠野さんを中心とした事業。特に昨年(2014年)は頑張って、札幌市立大学として文化庁から予算獲得をしている。上遠野さんやNPOはあの地域の中でアート活動が浸透していくことに長く努力されていて、学生や地域の人たちなど、広く様々な所からアートと接点や感心のある人達が集まって関わっている。

上遠野さんらに単純にいつも感心するのは、「プロジェクト系」の美術の初期から表現をやったり、早くから地域発」のアートマネジメントをやったりしてきた人達というのは、まず表現としても地域の問題に対しても興味があって、「現状」をこじ開けて入ってくるパワーを持っているということ。最近では、全国的に滞在型レジデンスや地域おこしのプロジェクトもたくさん存在するが、極端に言えば、そこに美術作家がやってきて、1〜2ヶ月程度の滞在で話を聞いて、地域の人たちの参加型の作品を作るという「フォーミュラ」が多い。作家や制作をお世話する人も仕事として関わるし、地域の人との関わり合いは仕事上の付き合いになる。悪くすると「搾取」になる。上遠野さんたちの場合は違って、そこにいる地域のおじいちゃんやおばあちゃんを本当に大切にしていって、宴会をやったりしながら、一年を通して関係を作っている。そこはとても尊敬できる点で、地域の信頼が厚いと思う。「炭鉱の記憶」と国際芸術祭が、ほかの連携企画と全く違う厚みを感じるのは実施側の地域におけるコミュニケーション力の高さが影響していると思う。テーマも大切だけど、やっぱり人だと感じる。

そういった意味では、例えば「一石を投じる」の島袋さんのアプローチと、上遠野さんのプロジェクトは似て非なるところがある。島袋さんは現地に来てグッと調査をしてそこでエッセンスみたいなものを掴み取って作品化するけど、上遠野さんは地域の中に入っただけのボトムアップ的な構造になっていて文化的な意味合いも、行う意義も全く違う。

○テーマ設定「都市と自然」について

非常に良かったと思う。北海道を通して近代を問うという設定が良かった。坂本龍一さん達は鋭いと思った。むしろ、「都市と自然」を掲げずとも「近代を問う」とストレートに打ち出しても良かったのではないかな。また、北海道外にアピールする時に、「都市と自然」と言い替えることは悪くない。

○SIAF2014で印象に残った作品や作家

スーザン・フィリップスと中谷芙二子の作品は、北海道にとってもマッチしていたと思う。ストレートに芸術祭のテーマを問う作品ではないが、北海道や札幌の地域の風土を上手く使っているのがその二つの作品だった。感受性にあふれ、見応えもあった。この二人は札幌以外の様々な場所で同様の作品を発表しているけれど、もし札幌と同じ作品を横浜や東京で展示しても決して同じには見えないと思う。

また、キュレーターの好みなのかもしれないが、ややホワイトキューブ的な作品が多かった印象。繊細な作品が多かった。恐らく予算やロケーションの制約だと思うが、もっと荒っぽい作品があっても良かったのではないかな。おそらくは創造都市札幌市としてメディアアートを掲げる必要があったのだと思うが、テーマに合っていればジャンルが偏っても問題ないと思う。

今後も「都市と自然」というテーマを継続的に取り上げることについては良いと思う。「都市と自然」という言葉をそのまま使うかどうかは別にしても、いろいろなアプローチやバリエーション、話法が考えられると思う。ただし、都市についての作品や、都市や近代や文明から見た被害者としての「自然」を扱う作品はたくさんあったが、自然そのものの暴力性を扱うような作品は少なかった。その点で、中谷とフィリップスの作品は、テクノロジーを使いながら自然との関ぎあい、人工的なものとの関ぎあいがはっきりしていて、テーマに合っていた。美しい作品けれど、ただ美しいだけでなく、ただ癒されるだけのものではないと思う。ちゃんと、見応えのある「モノ」として（スーザンの作品は音だけ）提示できていた。

○会場の可能性やアイデア

モエレ沼公園と芸術の森美術館で開催したことはとても良かった。「遠い」「交通が不便」という声もあるが、札幌の街の中だけで終わらない意外性があるし、直島と比べればはるかに利便性が高い。芸森の施設や彫刻公園自体も素晴らしいと思うので、もっと SIAF 作品を展開してもいいと思う。具体的には、芸森のもう少し上の方まで作品展開をして、来場者が体力や予定や予算によって「今日はこれで終わり」という人がいてもよいし、元気のある人は広域をまわったり。広域にするなら、全作品を回するには 数泊の滞在を想定した規模などに、もっと戦略的、意図的に広げてよいのでは。

札幌市中心部での屋外作品は島袋さんくらいしか思い出せないが、このようなレベル（質やサイズ）の作品がもっと街中に展開していたら更に良かったと思う。チ・カ・ホも街と言えるけれど、地上の街にもあちこちにあればいいと思う。札幌は動線が駅前通りと、地下の動線と、大通公園が中心になって、分かり易いけれどもエリア的な広がりが無い。協賛や様々なネゴシエーションが必要になってくるとは思うけれど、赤レンガ以外のロケーション（商業施設内やビルの屋上など）も使用して、「発見」や「同時多発」を演出できれば、観光感も経済効果も期待できるのではないかな。

○SIAF は北海道のアートシーンとどのような関係性や役割を構築するか

SIAF 自体が、北海道の美術界に受け入れられ、サポートや協力関係を築けたかは疑問や課題が多かった印象だ。それは、北海道の美術界の構造への、事務局側の興味と対処が薄く、テクニカルな策がなかったためと考える。

北海道のアートシーンでは前述の公募展派に加え、公募展から独立し 1970 年代にグループ化された造形作

家（準現代美術的な表現を行う）の流れ、デザイナーや建築関係者で造形的な作品を制作する作家も多く、この層が北海道における美術の「現代性」を担保してきたと言える。つまり、「団体展」と「現代美術」の間に、地域ならではの大きな層がある。中央ではローカルのアートシーンと全国的なサーキットが重複しているので、層としてはそれほど分裂が少ない。青森などの場合はアーティストやアート関係者の絶対数が少ないから層ができない。（画家として活動しようと思ったら全国的な公募展に出品せざるを得ないから、あまり地元感がない。）しかし、京都や札幌、福岡などの大都市の場合は、これら造形作家の層が厚く、地域文化でのネットワークや発言力が大きい。その層へのアプローチの方法が上手く作れず、協力を得られなかった（むしろ反感を持たれることすらあったのではないかと）というのが、第一回の芸術祭の印象だ。

もちろん岡部昌生さんのように全国、ローカルのどちらでもそれぞれの文脈で重要で、SIAF メイン作家としてふさわしい作家もいるが、その国際芸術祭の両義性（つまり「北海道」と「近代」という入れ子構造のテーマや、「国際展」と「ローカル」の橋渡し）については、地元の層においては身近過ぎて、客観的な理解がされづらかったのではないと思う。（岡部さんがベネチアビエンナーレ（2007）の日本館代表展示作家になった時も、北海道ではその意味をどう捉えていいかわからず、特に美術界の反応は盛り上がりに欠けた印象だった。）そういう土壌での、「外タレ満載！」の国際芸術祭とは、地域文化に現代性をもたらす好機であると共に、地域のアートシーンについては「黒船」でもある。（ちょうど、戦前のアメリカ美術における「アーモリーショー」と「ジ・エイツ」の関係に近い。）もちろん、国際芸術祭そのものが地域事情におもねる必要は皆無だが、芸術祭現象が地域に対してどのような機能やサービスをもたらすのかは、開催側は何度も自問する（熟知して、より自信を持って行う）必要はあるだろう。

たとえば芸術祭本体への評価はともかく、「芸術祭の季節」が地域のアートシーンのパブリシティにとって魅力のあるものとして映ったのは、この時期の美術展や連携事業の多さからも明らかだった。会期中に芸術の森美術館で連携事業として開催された野外展覧会は、作品は玉碎混交の感があったが、地域の作家や作品が紹介できたので悪くはなかった。であれば、芸術祭と同時期開催で、例えば市や教育委員会などが今の北海道の若手で「いい仕事」をしている作家トップ10 くらいを選んだショーケース等、「札幌市オフィシャル」な形で関連展示をもっと企画するといいと思う。レベルやジャンルは違ってもある種の連携性が生まれたり、やりがい生まれる「芸術祭のメリット」を創出すべきだろう。（こういう仕組みがあると、道外から来た人にとっては、時間があれば北海道の現状がまとめて観られるし、いい作家が集まっていれば何らかの可能性も生まれることもあるかもしれない。）

今回は第一回の国際展をとにかくやると決めて、短期間でとにかくあそこまで持っていけたというのが奇跡みたいな話なので、2 回目以降はオール札幌、オール北海道みたいな感じでできるかどうかは知恵を出す必要がある。それがあ程度上手く行けば、本来の意味での国際展のテーマとかコンセプトが、北海道のアートシーンのみならず、道民全体にちゃんと伝わると思う。

○2017 年に向けての要望や期待

教育機関の立場から言うと、今回は今回以上に質と量を高めて欲しい。そこで良いものを量で実見させることによって、勉強する機会が少ない北海道の学生達や若手も、ルールや質の異なる「本当の世界」がどう

なっているか知ることができる。

もう一つ期待するのは、学生もボランティア、学校との連携における、札幌市や実行委員会からのもっと踏み込んだアイデア。学校への協力依頼で事務局が各校を回ったけれど、結局パートナーシップといえる活動には至らなかった。第一回で事務局が芸術祭を成立させることに大変だったのだと思うけれど、具体的な協力とか仕組み（学校や学生がどうしたらいいのか、手伝って欲しいのか、観に来て欲しいのか…等）を考える前に時間切れになってしまい、市民ボランティアと比べて上手く関係が作れなかった。まだ2年あるので、その辺りをもう少し踏み込んだ考え方が必要と思う。もう少しゆっくり練っていけば良くなると思う。

ボランティアの考え方も再考が必要。ボランティア参加によって芸術文化について意識したりみんなで共同するのは大切だけど、一方で安い労働力という側面がある。地下歩行空間などの完成以来、行政や企業、各種団体の「善意」での学生の公共のスペースでの発表機会は増えたが、予算や準備期間の裏付け、実施側のノウハウが少ないもの（つまり丸投げ）が多く、また（前述の通り）学生数自体も減っていることから、疲労感やボランティア離れも起きている状況がある。つまり地域の大人（自治体や企業など）が、地域おこしなどで学生を消費していて、懲りているという面もある。

— それは恐らく全国的な傾向ではないか。越後妻有トリエンナーレは当初ボランティアは多かったが、最近ではボランティア獲得に苦戦していると聞く。昔はこのようなアクティビティが少なかったから興味を持つ人も多かったが、アルバイトとかアートマネジメントを仕事で動く人もいるし、大学でマネジメントを学べるし、学生自体も今学校忙しい。ボランティアをする余裕がない人が多いのだと思う。

そうすると、労働力の観点を別にすれば、学生は入場料を無料にした方がいいと思う。札幌市の若い人へのスタンスを教育や啓蒙だと割り切ってしまうと、学生は大学生・専門学校生・高校生は無料、学生証持っていたら無料とか。例えば教育効果を考えたら、そのような思い切った方策を検討してもよいのではないか。

ちなみに、2002年に芹沢高志さんが担当した「とかち国際現代アート展／デメーテル」では、川俣正、インゴ・ギュンターなどが道内の大学で対話を行ったりして、学生の能動性を引き出すのが上手かった記憶がある。

●会場運営／エキシビジョン：500m 美術館

日時：2015 年 6 月 18 日（木）

場所：CAI02 <http://cai-net.jp>

出席：佐野由美子（会場スタッフ/CAI02）、高橋喜代史（会場スタッフ/アーティスト）

聞き手：大友恵理

○会場運営

500m 美術館は SIAF2014 開催以前から運営されている施設ではあったが、設備が普段と違っていたので（ステーションの設置、常駐スタッフ、ボランティア、Wi-Fi）、最初は、例えば、ステーションにお客さんが Wi-Fi の利用方法を聞きに来て、ちゃんと案内ができないなど、対応に不慣れな面があった。ステーションは、机（3×6 板）2 つに、パンフ、チラシ、芸術祭の情報、ボランティア休憩所（詰所）、アンケート、作家のワークショップもできる場所で、Wi-Fi も使用可。

来場者は、通常の運営時と違い、かなり観に来た人多かったのがチケットのスタンプで分かる。「スタンプください」とお客さん。スタンプが当初、全会場と同じだったので、文句や「全部集まったら何か特典あるの？」と期待されたり。会期最初はとくに美術関係者が多かった。どこの会場で押しても同じなので、文句言われてもしょうがない。モエレの分と 2 つ押してください、（押し忘れて別会場で押して貰えるので）便利だね、という来場者もいた。

予算や環境面において、他の会場に比べて過酷だった。500m 美術館のステーションは、ここだけとても簡素だった。芸術祭の一区画とは思えないくらい小さなステーションとなり、他会場と統一されたデザインでもなかった。来場者から見たら、他の会場同様 SIAF の会場だと、思ってもらえたかどうか少々不安でした。500m 美術館の展示予算は、別予算（SIAF ではなく通常の 500m 美術館の運営予算）で開催されたので、予算上厳しかった。他の会場に比べて会場が長く過酷だったので、ボランティアがだんだん減っていき、途中からアルバイトを増やしたことも厳しさを増した。

○ボランティア

ボランティアといろいろ話をしたけれど、人気は近美と資料館だったと聞いている。500m 美術館は、過酷なせいか、それほど人がなかったようだ。

しかしながら SIAF ボランティアから 2 名が、今年 2015 年度のメーターズに入った。500m 美術館の常連ボランティア岩本さんとサカナ通信をやっていた寺岡さん。岩本さんは当時 500m 美術館の担当と言えるくらいたくさん入ってくれていた人だ。昨年の 500 メーターズから天神山アートスタジオのスタッフや芸術祭事務局の臨時職員になった人もいる。これらをきっかけにアートに興味を持って関わり始めてくれることは、いい流れ。

○来場者の反応と出品作家の成果

ガラスケースを一部外して、中を覗き込むと今村育子の作品は、SIAF の様に作品を監視するスタッフがいなければ展示できない作品なので、とても好評だった。

小さな磁石が付いてずっと動いている小さくて繊細な作品の神谷泰史さんに、監視がついていたが、作品の管理について最初の頃はボランティアさんへの説明不足があり、作品パーツが落下するなどの問題があった。作家がパーツの予備を用意してくれていたのが助かった。

様々な来場者がいたことをボランティアから聞いている。中には、すごく思想の強いおばあさんに「何が脱原発だ。エネルギー問題の対応どうやるの？」と話をされた。

普段通勤している人たちには好評だった。「今回のいいね〜！」と言われたり、そういう反応がとても多かった。全会場の中で「一番いいわ！」と言ってくれる人も。道外のお客さんのように各地を観て廻っている人などは、道内作家を見たことがないから、全部面白いと思ってくれた様だ。ニシダヒデミさんは海外のギャラリー関係者の目に留まって、ちょうど今その同じ作品を海外で展示している。伊藤隆介さんも児玉画廊（京都）の展覧会をすることにつながった。谷口顕一郎さんは「第1回本郷新記念札幌彫刻賞」を受賞して、今年7月本郷新記念札幌彫刻美術館で個展も開催される。

○SIAF が終わって感じる変化

坂本氏が関わったことで、親が関心を持ってきて家族の話題に上った。SIAF を開催したことで、ギャラリーである CAIO2 に来る人が増えたかどうかは分からないが、札幌の芸術文化イベントは増えたような気がする。芸術祭の開催が決まってから増えてきた。レクチャーやイベント等。SIAF 開催期間中はとてもイベントが多かった。地元美術関係者も元気にやっていたし、便乗じゃないけどかなりたくさんやっていた。そのうちの幾つかが継続してその後もやっているから、増えた印象があるのでは？ これを機会にいろいろな人達が 観に来るのなら、何かやろうと自発的に活動を始めたと思う。実際、連携事業とかすごい数たくさんあった。あの人達がこれをきっかけに続いているのかもしれない。続いていくのは絶対あると確信している。モチベーションのある人は3年後を待たず来年やると思う。

今まではアートやデザインの大きなフレームがなかったから、イベントや展示をしても、いつものメンバーが観にきて終了したのが、SIAF を通じて道外から観に来る人がいて、道内、海外からも観に来るかもしれないと期待が持てるようになって、モチベーションが上がっている。とくに写真の人達が多く展示やイベントを開催している印象がある。

もう少し建築のイベントがあってもよかったと思う。青木淳さんが関わったけれど、会場構成にとどまった。SIAF からもっと複合的なアプローチがあってもよかったと思う。ビビットに反応した地元関係者は写真だけだった気がする。

○札幌のデザインの分野（CAI に偶然居合わせたデザイナーのご意見）

芸術祭の折にデザインの分野では、何もアクションはなかった。僕自分の周りは影響なし。関わっているかどうかの話題はあったけど、関係する人は少ないし、イベントを自分でやるにはなかなか至らない。基本受注産業だからクライアントあってこそ。

○札幌のアートシーンについて

30代後半が多くなってきた。20代後半の人達もポツポツ出てきた。札幌周辺で芸術関係の部門を持つ大学として、北海道教育大学岩見沢校、札幌市立大学（前身は札幌市立高等専門学校）、札幌大谷大学等がある。

○教育機関としての CAI

CAI スクールとアートイニシアチブ東京[AIT]が、通年の教育プログラムを持っている点での存在感が似ていると思う。CAI で今開催している展示（「自分のためにアートを買いたい-U50000-展 2015」）には CAI スクール出身者も数名出品している。美術系の大学を卒業後に CAI を受講した人もいる。受講生は、社会人だったり、アーティスト志望ではない人も受講している。講義内容はジャンルも、彫刻、絵画、インスタレーション、企画まで幅広く、いろいろな先生が教える。受講生からサポートしてくれる人が育っている。今年度の受講申込人数は大幅アップした。去年 8 名、今年は 14 名。側からみれば、SIAF の地域ディレクターが主催する事業なのに、その点はあまり影響力がなかった。2015 年度は芸術祭をきっかけに受講した人はいない。端さんが CAI 代表だと知られていないかもしれない。

○500 メーターズ

500 メーターズは第 1 期→第 2 期への継続者は 2 人しか残らなかったが、第 2 期から第 3 期は 6 人が継続して続けている。1 年だけで内容を理解することは難しいと思うので、1 年終えて終了ではなく継続してほしいが、なかなか続かない。毎年プログラムの最後に企画を作る。今年はワークショップ「巨大ぬりえ大作戦」を行った。（この取材中、傍では 500m 美術館のチラシ封入発送作業を第 3 期 500 メーターズが集まって作業していた。）

○500m 美術館部会と作家選考

SIAF においては、500m 美術館の企画は SIAF 地域ディレクターの端が提案し、500m 部会（市内芸術専門家 4 名で構成）に提出した。タイトル「時の座標軸」やコンセプトは地域ディレクターの端を中心に部会と一緒に考えた。作家選考については、何度も協議を重ね、確定するまでにかなりの時間を要した。準備の時間が少なくなり、大変だった。結果的に、展示の成果としては精鋭を集めて好評でよかった。SIAF 全会場通して絵画や彫刻があまりなかった。

○SIAF のその他について

天神山アートスタジオができたのは良かった。助かっている。作家を呼びやすくなった。お金かからないし、分かりやすい。札幌は夏季、普通に宿泊ができない。シーズンは宿泊料金が非常に高い。

○すすきの夜のトリエンナーレ

SIAF 期間中、CAI 来場者数が増えたとはあまり感じない。一方で、札幌の美術関係者（今村育子、川上大雅、佐野由美子、高橋喜代史、穂積利明）が中心となって企画した「すすきの夜のトリエンナーレ 2014」は、芸術祭を見にきた人達もたくさん見に来てくれて、良かった。去年は会期 2 週間だったので、次回はあれを 3 ヶ月できたらいいと思う。予算 300 万円付けてもらえたらいいな！それでも人件費が足りそうにないからスタッフはボランティアで。

場所代が高く、2 週間 10 万円だった。いろいろやっていると楽しい。夜見に行く場所なかった。夜は暇だからこのような企画があるといい。あいちトリエンナーレを観に行ったが、L PACK と青田真也さんによる「ビジターセンター」があって、よかった。CAI がその役を担えたらよかったけど、そのような役目としては手狭であった。ミュージアムショップ+コーヒーの飲めるところ。今は資料館ができたから期待。次回の芸術祭でススキノが一会場になったらいいな。がんばります。予算も付けてもらって。夜担当。

例えば、SIAF2014 での 500m 美術館の存在を「ススキノ」にするとか。日中遠いところも全部まわって、他の会場が閉まった後、夜にススキノで展示を見るとか？

○会場アクセス

全体的に会場が遠かった。モエレ沼公園に芸術の森美術館。会期途中から無料でバスつながったので、強引に全部まわる人がいたと、アートファンや関係者が頑張ってまわるケースがある。来場者に「バスより地下鉄の方が早かった。」と言われた。バスは近美～芸森間 40 分かかかる。料金は地下鉄と同じ。地下鉄を活かして、芸森～真駒内間とモエレ沼公園～大通間でバス運行するというのは？でもバスは楽。初めてきた人でも乗ったら必ず辿り着けるところが良い。

SIAF 期間中に芸森で開催される展覧会は、美術館のスタッフが自分の企画をやればよかったと思う。予算なかったのだろうか？（自身の企画力を発揮する機会であるとか）そこに力を注ぐ時間がなかったのだろうか？

○他の国際展との比較

札幌でこんな国際展を札幌で見ることができて幸せ。わざわざ海外や道外に見に行かなくても今まで見られなかった作家の作品を見ることができたり。去年、他の芸術祭で観に行ったのは京都国際現代芸術祭くらい。あとは海外へ行った。光州ビエンナーレ、台北ビエンナーレが面白かった。展示作品も、知らない見たことない作品だった。光州はハコがデカかった。見やすかった。コンベンションセンターみたいな規模。横浜トリエンナーレは最初、パシフィコ横浜（コンベンションセンター）を使っていたが商業展示会みたいで

かっこよくなかった。ヨコトリが古い赤れんが倉庫や海辺の倉庫を使った時はもっといい感じで観られた。光州ビエンナーレも同じく巨大なのに、良かった印象を与えるのは興味深いですね。日本は会場の作り方使い方が下手なのか？

○連携事業「ハコレン」

最初、端さんと小田井真美さんで始めて、その後小田井さんが忙しくなり、佐野が入って準備が進められた。市内のギャラリーに参加を呼びかけた。でもフライヤー作ったりマップ作りで精一杯だった。最初は、参加ギャラリーみんなで集まって何かやろうと言っていた。ギャラリーツアーとか。でも予算的な事などもありできなかった。

○人材とネットワーク

SIAF 終了後、いろいろな人が札幌に残っているのが一番良かったことだと思う。人材が残ったこと。終わってしまっても元の場所へ帰らず関係が構築できたこと。ずっとここでやっていたから分かるのだけど、(アートの領域では)北海道が孤島で他の地域と断絶している。向こうの情報が全然入ってこない。誰かが、とあるギャラリーの人に「君ってどこ出身？」と聞かれ、「北海道」「札幌でやっています」と答えたら、「札幌にアートあるの？」と露骨に言われた。SIAF のために来札して今も関係者が何名かいることは成果の一つと言えるのではないかと。「札幌にこういうのがあってね」と道外で語ってくれる人が増えた。道外に行くと「芸術祭やるんだね」と声をかけられ、そこから随分話ができるようになった。

●地元美術専門家

札幌国際芸術祭 2014 は国際展としての意義を果たしたか。

穂積 利明（北海道立近代美術館主任学芸員）

札幌国際芸術祭 2014（SIAF2014）は、昨年 2014 年の 7 月 19 日から 9 月 28 日までの計 72 日間札幌で開催された。

札幌にいて全体の動向を見守りつつ、今回の芸術祭には全く関わらなかった地元美術人として、純粋に外部として感じた展評を書き記したいと思う。

札幌国際芸術祭の目的

札幌国際芸術祭 2014（SIAF2014）の目標は何だったか。札幌国際芸術祭は、市民派の上田文雄市長のもとでの「創造都市さっぽろ」への提言としてはじまり、それが市民運動の高まりに結びついた。市民団体を母体としながら、いくつかのトーク、シンポジウム事業が行われ、2009 年 11 月には「札幌ビエンナーレ検討委員会」という団体が正式発足する。これは委員会と名乗りながらも純然たる民間団体であった。

さらに民間資金によって「札幌ビエンナーレプレ企画」と題された地元現代アートの展覧会も行われた。とりわけ、札幌国際芸術祭 2011 のヴェニューとなった北海道立近代美術館での「アートから出て、アートに出よ。～美術館が消える 9 日間～」(2011 年)、及び札幌芸術の森美術館での「表現するファノシーサブカルチャーの表象たち」(2011 年 10 月 29 日(土)～11 月 23 日)は、それぞれ地元作家を中心にした展覧会ながら、規模的にも内容的にも、前哨展としてふさわしい躍動感に満ちていた。

彼らが目的としていたのはほぼ 3 つ。「アートツーリズムや観光関連プロジェクト展開」「市民や子どもが参加できるプロジェクト展開」「世界的文脈における質の高い展覧会を核とする」ということである。特に最後の項目は、札幌の国際芸術祭が単なる市民作家による芸術祭にならないためにも重要項目であったと思われる。

このような民間の実践的盛り上がりのおかげで、札幌市としても、2011 年 4 月「定期的な国際芸術祭の開催」をマニフェストにかかげた上田市長の三選を契機に、同年 8 月に国際芸術展基本計画策定検討委員会を設立、翌 2012 年 7 月に「創造都市さっぽろ・国際芸術祭実行委員会」が発足している。ここでの目的は「文化芸術に満ちた札幌独自のライフスタイルの創出」「札幌らしい文化芸術を支える人づくり」「文化芸術の力による札幌の魅力再発見と新たな価値創造」「『創造都市さっぽろ』を牽引する多様な人材の集積・交流」という 4 項目があげられ、役所らしい、あらゆる方面に気を配った目的設定であり、悪く言えば焦点がぼやけ、具体性に欠ける目的が並んだ。

これを補完したのがその展開方針であったと言えるだろう。具体的テーマ「都市と自然」に加えて、発表された展開方針は次の 5 つ。「多様な文化芸術分野と複合した世界最先端の現代アート展の実施」「既存の文化事業との連携」「札幌の魅力を体現する観光イベントとの連携」「民間ギャラリーやアート関連団体との連携による企画展」「メディアアーツの展開」である。実質的には、この 5 項目が目標と言って良い。

このような当初の設定目標がどのように実現されるよう試みられてきたかは、コンセプトブック（『人と自然が響き合う都市のかたち－札幌国際芸術祭 2014 ドキュメント』坂本龍一＋創造都市さっぽろ・国際芸術祭実行委員会編、2014、平凡社）に詳しく記されている。

どこがメイン会場かわからない－有料ゾーンの作品の少なさ

札幌国際芸術祭を見た市民や観光客がまず戸惑ったことは、北海道立近代美術館会場の作品数の少なさであろう。街中のメイン会場として最もアクセスがしやすい場所で多くの人がここをスタート地点とするのはわかっていたはずなのに、岡部昌生、工藤哲巳、スポード・グプタ、アンゼルク・キーファー、畠山直哉、カールステン・ニコライ、中谷宇吉郎、高谷史郎の6作家の作品しか設置されていないのである。しかも、雪の研究者の中谷宇吉郎を作家扱いすることには、観覧者から少なからず抵抗の声があった。

展示を丁寧にひもとくと、炭鉱から始まり原子力にいたるエネルギー政策に翻弄される北海道や、雪に対する人々のたたかいなど、近代北海道の開拓に対する思索がストーリーとして込められているのだが、そのストーリーが厳密すぎる故に、他の思考や想像が飛翔する余地が極めて低い。また、作品数が少ない故に、一点の作品がもつ役割が重く、作品が予想外の物象化を余儀なくされた部分もある。

それに比べると、もうひとつの有料会場・札幌芸術の森は、作家作品数も多く、札幌の「自然」というテーマに対するアプローチも多様で、ひとつの会場として満足できるべき映えに仕上がったと言えるだろう。中でも、平川祐樹の作品は都市と自然をつなぐ微妙な場所に置かれたが、作家がその役割をつよく意識し、生きている北海道樹木の切り株を映像化し、森林や都市を思わせるビデオ・インスタレーションにするというやり方で応えていた。また、中谷芙二子の《霧の彫刻》は会場美術館の入り口に設置され、このアーティストの父親である中谷宇吉郎から引き継ぎ、雪から水資源への切り替え、冬から春夏への季節の切り替え、固体から気体への切り替えを鮮やかに実現して見せ、コンセプトの要諦を担うとともに、本展覧会中の最も人気を集めた作品となった。

そうした良作の効果を加えても、有料会場全体としての作品数の少なさは印象としてまだ残る。それは、二会場間の距離がありすぎ時間的に連動して見るのが難しいこと、国際展でありながら既存の借用作品が多いこと、また国内作家ばかりで海外作家の新作が少ないことなどによって、「まとまった会場で、国際的にカッティング・エッジで優れた作家作品を概括的にみる」という国際美術展に期待する意義のひとつが失われているからではなかろうか。

近代都市と自然を巡るコンセプトは、札幌国際芸術祭実行委員会の要請でもあったが、ゲストディレクターである坂本龍一氏の設定でもあり、この2館を担った飯田志保子氏はずいぶん苦労したのではないだろうか。おそらく、この北海道の近代をめぐるコンセプトは、坂本氏だけの考えではない。本展スタッフの中でも最も何をやったのかわからない役割が「企画アドバイザー」であるが、そこに名前を連ねている浅田彰氏の考えが少なからず反映されているのではないか。

プレフェスティバルイベントとして開催された「シンポジウム 札幌国際芸術祭が目指すもの」（2013年11月3日、札幌コンサートホール kitara）では、浅田氏はゲストディレクターである坂本龍一よりも、展覧会の基本コンセプトに対し多くの注文をつけ、基本的な考え方を細かく提示していた。

なかでも特筆すべきは、「いわゆる有名アーティストをちりばめた国際芸術祭、そこから出発しないことが大事です」と浅田氏が言っている点である。「ダミアン・ハーストとか村上隆とかスター作家を並べたところで、世界のどこでやってもそんなの同じじゃないですか。そのこと自体がアートワールドを閉じたものにしてしまっている。そんなのは、国際市場に引っ張られた『国際化』にすぎない。札幌がそれをしないのは正しいのです」。

この言葉に従うと、確かに今回の札幌国際芸術祭は、活躍中の有名アーティストがちりばめられている展覧会にはならなかった。しかし、どんな展覧会になったかといえば、よく知られた既存のコレクションを用い、展示が主張とドラマツルギーを強く持った、美術館企画の展覧会に極めて近い展覧会である。これは国際芸術祭すべきことなのであろうか。当初の目標であった「世界的文脈における質の高い展覧会を核とする」（民間の実行委員会）、「多様な文化芸術分野と複合した世界最先端の現代アート展の実施」（札幌市）と合致するものであったのであろうか。

国際展の国際性

対照的だったのは、同じように都市名を冠した京都国際現代芸術祭 2015「PARASOPHIA」である。こちらは逆にほとんどテーマ性やストーリー性を持たず、安定した実力を持つ国際展に頻出する作家たちに依頼し、充実した作品を展示していた。会場はメイン会場だけでも一日では回りきれない物量を持ち、かなり見応えがある。作家人数は意外なことに札幌よりも少ない約 40 作家。特筆すべきはほぼすべての作家が京都を訪れ、新作を発表している点、このあたりも札幌とは対照的である。

しかしながら、先の浅田彰氏は京都国際現代芸術祭に対し、「もちろん全く期待してなかったとはいえ、ここまでつまらないと思わなかったというのが正直なところだ」と、これ以上ない酷評をしている（浅田「パラソフィア 京都国際現代芸術祭 2015 の傍らで」『Real Tokyo』2015 年 3 月 6 日）。

いわば、浅田氏によれば、札幌国際芸術祭 2014 は開催するに足る意義を持ち、京都国際現代芸術祭 2015 は意義を持たない、ということらしい。あまりにも我田引水的な気がするのは私だけであろうか。京都国際現代芸術祭 2015 のアーティストック・ディレクターを務めた河本信治氏は「（美術館と）違うかたちでやる展覧会に、世界や社会の問題のすべてを担う必要はないと思うんですよ。必要だというのはよくわかるし、できたらいいなと思うけれど、それをもし意識してやったら、とても自己肥大になって、押し付けがましくて、グロテスクな思考になるんじゃないかなと、いう気がするんです」と言っている（インタビュー「国際展のあるべき姿（2）」『Real Tokyo』2015 年 2 月 26 日）。もしかすると浅田彰氏の札幌の、いや「日本の近代化を相対化する」という強い意識は、この自己肥大的で、押し付けがましく、グロテスクな思考にあたらないであろうか。

浅田彰氏は、その活動の当初から「脱近代－ポストモダン」というテーマを担っており、ニューアカデミズムの騎手とされたころも、そのポスト近代指向が多くの人に受け入れられた。しかし、そこから 30 年が経ち、世界を巡るポストモダンの脱近代の動きはユートピア幻想とも捉えられるようになっていく。

札幌国際芸術祭 2014 は、こうした一思想家の背景に強く依拠した、作家作品のクオリティや一般性よりも「脱近代」コンセプトを重視した国際展であり、実は国際展の考え方としては必ずしも一般的ではない。こ

れはあまり指摘されていないことだが重要なことだと思われる。もちろん、一般的なものが必ずしも良いとは限らないし、芸術においては極めて個人的なものの方が、強烈で質の高いものができあがることが多い。筆者がそれを知らないわけではないし、その価値は観客が決めるとか、市場が決めるとか一方的に言うつもりもない。しかし、国際芸術祭として一般的なアートクラスタの評価が得られなければ、国際的な観客を集めるのは無理であろう。

そう、あらためて確認すれば、国際美術展の「国際」とは「出品アーティストが国際的であること」「キュレーションが国際基準を共有していること」、そして「国際的なオーディエンスを集めることができること」である。瀬戸内やあいちや京都が成功したこのことを、札幌が達成できるかどうかは、次回の展覧会の美的愉悦に深く関わっている。

●会場運営／エキシビジョン：モエレ沼公園

日時：2015 年 6 月 16 日（火）

場所：モエレ沼公園ガラスのピラミッド

出席：宮井和美（モエレ沼公園 学芸員／公益財団法人札幌市公園緑化協会）<http://moerenumapark.jp>

聞き手：大友恵理

○モエレ沼公園における SIAF の成果

SIAF の会場として関わった結果は良かったことが多く、デメリットは特になし。SIAF 期間中の来場者は通常の 1.25 倍。交通面でも、普段は路線バスしかないが、SIAF 開催時期に札幌市の無料送迎バスがモエレ沼公園まで来たことでアクセスが良くなり、来場者数の増加につながった。来場者数が売上に直結し、この収入で施設内の案内表示等施設修繕の更新費用に当てることができた。

○来場者の種類

天気が悪くても来場するのが観光客（市外道外）。来場者のレスポンスは（所定の）アンケートを事務局に提出済み。回収できたアンケートの年齢層に反映されているかわからないが、来場者は、通常と比べて若者が、とくに若い女性が個人あるいはグループで訪れるケースが多かった印象がある。また、アートというよりも坂本龍一に関心がある層や作品のテーマとして取り上げられていた電磁波など科学・工学的な部分に関心のある来場者（研究者、専門家）もいた。展示作品がインタラクティブなタイプだったことも、モエレ沼公園（の来場者層）に合っていたと思う。ボランティアは、坂本龍一＋真鍋大渡による作品の担当を希望する人が多かった（説明内容が平易でなおかつ来場者とのコミュニケーションができる）。《触れる地球》は情報量が多くて案内が難しく、ボランティアからの人気としては坂本・真鍋作品には及ばなかった。

○開催前後の変化

通常は子供を伴う若い家族連れが多い。夏期はモエレビーチに直行する人たちなどもある。施設（公園）利用者の変化は特にないと思われる。SIAF 会期終了後間もなく冬期となり来園者の少ないオフシーズンということで、変化が見えにくかった。SIAF の会場となったガラスのピラミッドは貸館が中心ではあるが、年 2 回（夏冬）の自主企画展を開催している。企画展についての開催前後で来場者が変化しているかは分からない。

○モエレ沼公園の特徴

夏季は、スポーツイベントでぎっしり予定が詰まっている。自転車レース、マラソン大会、他多数。今は特にテニスの大会が多い。施設は大分古くなったが、メンテナンスしてなるべく良い状態を提供するようにしている。イサム・ノグチのデザイン、アートとしての価値が生み出す良い環境が知らぬ間に利用者を惹き

つけているのではないか。札幌市は、イサム・ノグチ作品という側面はそれほど考慮せず、緑地・公園を一律同等に扱うというスタンス。想定している必要人員数が認められず、徐々に予算が削減されている。新しいモエレ沼公園の活用方法を打ち出したくても、現状の人員、予算ではこれ以上の（エクストラの）事業ができない。収益を見込める公園であると文化庁の視察者等他都市の文化政策関係者等から高い評価を得ているものの、条例上の制限があつて難しいことが多数ある。例えばベロタクシー導入。公園が広いので、利用者から要望がありながら（広告、営利目的等の要素があるため）導入できず、難しさを感じている。

○観光客について

最近の円安の影響で、海外からの観光客が増えている。先日タイの旅行代理店から、3000人、バス60台の観光客受け入れの問い合わせがあつたが、現状のスタッフ、施設の管理方法では難しい面があり、半分に減らして欲しいと伝えた。その他、海外富裕層向けのレセプション、フォトツアーの問い合わせが増えるなど想像を遥かに超える変化が起こっているように感じるが、その情勢変化に追いつけていない。その規模の観光客が今後頻繁に来るようになった場合、スタッフの受け入れ体制の面でも施設管理（芝生管理、清掃）の面でも対処不能となり、来場者、受け入れ側の両者ともにアンハッピーな状況になる。人数的には問題なく入れるが、大会利用等と違い、海外の観光客はいつどれくらい来るのか予想がつかない。誘導・警備費も必要だ。いずれにせよ無料施設のままでは維持しがたい状況になっていくと思われ、今後の情勢を懸念している。観光客など市民以外からは入園料を徴収する、もしくは夏季の駐車料金を有料にするなどして、収益を生み、公園維持に活かしたい。

○市民の苦情

モエレ沼公園のオープン当初は多数苦情が来たが、最近は落ち着いている。今回SIAFの会場になったことについての苦情は寄せられていない。

○展覧会会場としてのモエレ沼公園

非常に大きな施設なので、普通に作品を設置してもスケール負けしてしまい、使い方が難しい反面、うまくいけば素晴らしい展示ができると思う。スキルのあるアーティストであれば大丈夫。条例で制約もあるが、うまくクリアして展覧会会場としても機能していくことを願う。

●会場運営／エキシビジョン＋参加型プロジェクト：札幌駅前通地下歩行空間、北3条広場

日時：2015年6月16日（火）

場所：札幌駅前通まちづくり株式会社 <http://www.sapporoekimae-management.jp>

出席：今村育子、内川亜紀、藤本恭子(札幌駅前通まちづくり株式会社)

聞き手：大友恵理

○ボランティアについて

札幌駅前通地下歩行空間（以下、チ・カ・ホ）は他の会場と比べて拘束時間が長く、いろいろな人が来る、作品を触ろうとするのでその場を離れられない。他の会場の人の話を聞く限り、他の会場は気持ち的にも余裕を持てたけど、チ・カ・ホは気が抜けず「働く」という感じで従事していた。守るものがいっぱいあった。他の会場は展示を観たい人が足を運ぶけれど、チ・カ・ホは観たいと思わなくてもたまたまそこにあるから、マナーを知らない人が作品を触るなど、初めはいろんな問題や予期せぬアクシデントがあった。

キャプションが間に合わなかった。キャプションがないとボランティアに質問が殺到するのでストレスになる。口頭で解説しすぎると主観が混じってきてしまう。見てほしいポイントだけ教えられれば良い。一方で会場の方針やカラーによってどういう解説をするか全然違うところがある。SIAFではボランティアは毎日人が変わるから解説の質が定まらない。後半細川さんがボランティアヘレクチャーしてくれたのは良かった。ボランティアのモチベーションにもつながっている。ボランティア向けに事前に会場ツアーなどレクチャーできていればよかった。

○来場者の反応

話好きな人が来る。話がたくさんできて楽しかった。初めのころはボランティア側の自負が良くも悪くも遺憾なく発揮されていた。鑑賞者の中には話しかけられたくない人もいるだろうから、コミュニケーションのバランスが大事。文句を言ってくる客もいたが、意見を言ってくるということは興味があるということ。公共空間だから作品と施設の区別がつかない人もいたので説明が必要。清華亭はわざわざ足を運ぶ場所なので、ある程度のマナーがあったが、チ・カ・ホはなんでも触っていいと思われている。壊されてしまうかもしれないという覚悟をもって臨んでもらう方がいい。とにかく人数を多めに配置したほうがいい。まち会社で委託を受けて有償スタッフを用意したが、他の会場・全体のことをわかっている有償スタッフが事務局から派遣される方が応用が利いていいと思う。今回ボランティアを経験した人達からそのような次に繋がる人材が出て来ることを期待する。

○「一石を投じる」

札幌市北3条広場（以下、アカブラ）のオープンと島袋さんの石の設置がかぶってしまった。メディアには設置予定を知らせていなかったのでアカブラオープンの取材に来たメディアがたまたま出くわして混乱を招いた。設置作業をイベントとして活用すべきだった。いろいろな情報を出すタイミングが今回のことで分

かったのではないかと。カムイノミは概ね好評だった。石の前で写真を撮る人がいっぱいいた。何かわかっていないひとは多かったと思う。作家の意志を汲んだため説明が不足していた。イベント効果もあってか、アカプラのオープニングは1,000人もの来場者につながった。設置に至るまで荷重やら工事などクリアする問題がたくさんあったが、アカプラで実施できてよかった。チ・カ・ホの柱の有無の兼ね合いで微妙な位置に設置していたので動かすのは難しかった。撤収もボランティアが集まってくれたし、愛着を持ってもらえた。

登らないでほしかったが、囲いを作ることができなかったので防げなかった。お賽銭を入れるなど、思いがけないアクションをとる人もいた。

○「フェスティバル FUKUSHIMA! 北3条広場で盆踊り」

スタッフも楽しんでた。ゲストがたくさん来た。盆踊りがSIAF主催、コンサートは連携事業で開催された。出演者のギャラが足りないということで、収益を生むためにライブの提案が沼山さんからあってスタッフが動いた。事務局の山田さんが運営に動き、設営はまち会社が対応。去年は会場提供的な役回りで動いたが、今年は主催になってSIAFと立場が逆になった。去年つないでくれた関係者や設営業者が今年も継続的に協力してくれる。そこは前回よい関係が築けたお陰。宣伝量のわりに来場者数が多かった。アンケートをとれなかったので客の感想はわからない。1日イベントは現場アンケートがものをいう。しかしそこに人を割く余裕もなかった。例えば会場にボードを設置して「また観たいか・観たくないか」だけでもよいから調査の仕掛けがあるとよかった。市民から参加募集をかけたのがよかった。継続事業が生まれてよかった。地域に密着したプログラムとして根付いていくとよい。

今年は大風呂敷工場をチ・カ・ホと天神山アートスタジオで作る。チ・カ・ホはパフォーマンス的な役割。ちょうどチラシができたところ。札幌バージョンのバンドを結成したほか、近隣のビジネスパーソンからボーカル募集も行った。またこれから2日目に実施するオーケストラ SAPPORO! の募集もかける。オーケストラ、ボーカルを募集した。縁日、仕事帰りに浴衣を着てもらう企画、線香花火などアイデアいっぱい。大友良英さんが今年も来るということで特別感あり。

○BLIND BOOK MARKET (以下、BBM)

ボランティアに人気が高かった。段ボールの壁があることで、お客さんは敷居が高かったかも。一方で囲いが無いとお客さんと本の管理が難しかったと思う。ボランティアにとってはコミュニケーションがとりやすいから人気だった。通行客にとっては入ったら出にくいのではと抵抗感がある。いろいろなお客さんがいるので、本を持っていかれる危険とか。

○チ・カ・ホ会場の運営

チ・カ・ホのイベント（フリーマーケットなど）自体は芸術祭前と後では特に変化なし。芸術祭の二か月間出店できなかった反動で、芸術祭が終わった後の申し込みが殺到した。芸術祭期間その会場を使えないのは大きく、毎年恒例で行っているイベントや団体があるので、関係者とのつながりを持っていた団体が連携

事業で上手く入り込んでいたり、関係者と仲良くなった人達は使うことができた。イベントできるチャンスを狙っている人達はいつもアンテナ張っている。アソシエイトキュレーターの四方さんも市民の活動を取り入れる・声かけることを気にかけていた。札幌市資料館もチ・カ・ホも普段の利用者への配慮が求められる。芸術祭期間中に一般が利用できないというアナウンスが半年前に告知されたが、使えなくなる場所やアナウンスの文面など事前にかなり細かく確認した。3年に一度の特別だから、と。それでも普段の利用者への配慮が求められる。期間が3ヶ月と長期であることの影響も考えて対応が大切。

展示替えはするののかという問い合わせがあった。毎日同じ展示を観ていると飽きるから変化が期待されたのだと思う。「ドローイングモジュール」のように変化を観られる作品はよい。

一番人気はBBMかドローイングモジュールか？客の反応が把握できる作品（ブックマーケット）と、どれくらいの人が見たか把握できない作品（ドローイングマシーン）がある。とくいの銀行のように説明がないとわかりにくいイベントもある。ちとく（用紙の利用）が多くて、ATMの用紙補充が間にあっていない、引き出しイベント情報がATM周辺に掲載がないので分かりにくい、HPや資料館への誘導では弱い。旅行者などは作品の進捗・結末を知る手段がない。美術館の来場者あれば作家名検索するだろうけど、チ・カ・ホの観客は作品や作家名前が分からなかったり検索へは至らない。北四条の展示は分かりにくかったかもしれない。全体を通して、受託者側のほうで、スタッフがどこまで関わったらよいのか、どれくらい準備してあげればいいのかという決定の見極めが難しい。特にチ・カ・ホはどんな意見が寄せられるのか、やってみないと分からないことが多い。

テーマが難解。美術館の「都市と自然」は平易な言葉でイメージしやすいが、「センシングストリームズ」というカタカナ（英語）は（センシング→感じる→センサー？）と理解に至るまでハードルが高い。

チ・カ・ホは札幌駅側から来ると分かるが、大通側から来るといきなりドローイングモジュールが突然あって説明少なく分かりにくい。説明量が全然違う。入口を両方に設置すべき。設置場所も飛び飛びに点在して、フリーマーケット等SIAF以外のイベントもチ・カ・ホ内で行われていて、それが芸術祭の事業のように見えてしまったり、分かりにくくしていた。例えば、思い切って広報予算かけておもてなし感を出して、遠慮しないでフリマやっているとか、ゲートにしてしまうとか、考え方をいくつか持って展開した方が上手くいく。チ・カ・ホは当初作品展示会場ではなく協賛用のPRブースと言われていた。途中で坂本龍一氏が視察して展示活用の話が持ち上がり四方さんが入ったという経緯がある。チ・カ・ホの特徴を活かすならば、インフォメーションセンターを置いたほうがよかった。各会場のダイジェストであれば点在していても無理がない。警備費用もかからない。インフォメーションの運営が大変そうだった。右と左で入口をちゃんと作らないとだめだと強く感じた。あるいは大きなスペース1カ所に絞るなど。京都国際現代芸術祭では京都駅に全然情報がなかったの、それと比較すれば札幌は頑張っていたと思う。やってる感があった。

市民からのクレームとしては、何分かに1回チ・カ・ホ全館で流れていた音楽で、「暗い」という意見が多かった。こちらでも都市空間のサウンドコンペティションの受賞音楽であることは伝えたが、ご理解は得られなかった。また芸術祭以外にも北大通側のスペースは一般に貸出をしていたので、そこで流れる音楽等とバッティングすることもあり、音の流し方については、考える必要があると思う。

とはいっても、市民がチ・カ・ホのジャックに対して寛容だった。クレームはなかった。都市の体質としていいと思った。

●会場運営者／参加型プロジェクト：コロガル公園 in ネイチャー

日時：2015 年 6 月 16 日（火）

場所：札幌市宮の沢若者活動センター（ちえりあ内）

出席：石井一彦（公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会 [SYAA]）<http://www.syaa.jp/>

聞き手：大友恵理

○担当したきっかけ

当財団が運営を担当したきっかけは、児童会館の運営やキャンプ事業など子供たちの遊びを総合的に取り扱っていることから、札幌市からお話をいただいた。

コロガル公園 in ネイチャー（以下、コロガル）のコンセプトは『メディアを使った遊び』と『フィジカルを使った遊び』の融合であり、自ら考え遊びを創造する機会を提供すること。「自分の責任で自由に遊ぶ」といったプレイパークの基本をベースに、規制を極力排除したフィールドで自分自身のケガなどのリスクを含めて安心安全面の判断や決断をして遊ぶという点に興味をもった。

私たちの財団の事業の一つに、子供たちのキャンプや、カヌーなど野外アクティビティを行っている。スタッフが引率する野外活動というのは様々な危険を伴うリスクもあるが、絶対安全でなければならないという大前提の中で実施している。また、児童会館など子どもの施設管理者の立場では常に安全を第一とし、ケガがないように（先に準備しておく、対策を取る）することが当たり前だが、既に YCAM で実績のあるコロガルパビリオンで行われている自己責任で子どもたちを遊ばせることが、私たちにとっては初めてであり怖さと同時に興味を持った。

○山口バージョンから札幌バージョンへ

依頼の話が進み、平成 13 年秋に山口情報芸術センター[YCAM]で実施していた「コロガルパビリオン」の運営現場を見せていただく機会があった。YCAM での運営体制は、エデュケーターがプレイリーダーを育成し、プレイリーダーが中心となって運営していた。そこでは、子どもたちの自主性に任せ、できる限り子供たちに活動の規制をかけずに遊びの発展をサポートし、時には発展した遊びを他の子供と一緒に遊び、それがさらに他の子にもシェアされ、徐々に浸透していく。子ども遊び場ミーティングも見せてもらったが、コロガルパビリオンで遊ぶ子どもたちが、YCAM InterLab のスタッフと共に、パビリオンに追加したい遊びや機能を話し合っていた。このミーティングで採用されたアイデアは、その後のアップデートを経て、パビリオンに新しい機能として追加されることになる。

コロガルパビリオンを訪れて、穏やかな雰囲気の中で運営をしていたことに感心する反面、札幌に置き換えた時少し危惧することがあった。山口の人口規模が札幌と大幅に違うという点で、札幌の子供たちが、予想通り大勢来るとしたらパニックになるのでは？沢山の子供が遊ぶことができるか？そんな心配しながらマニュアル作りに着手した。

当財団では各種イベントも行っていて、財団自主事業や受託して行うイベントがある。札幌雪まつりで雪像の制作や、第二会場つどーむ（札幌コミュニティドーム）での雪の滑り台や、氷の滑り台の制作、さらにその運営なども行っている。つどーむ会場は来場者数万人規模の会場。実際は数万人の来場者ではきかないほどで、雪で作ったチューブ滑り台は人気があり行列ができる。日曜日の朝のオープン時に来場者が大勢来る。多い時は朝入口ゲートに並ぶ行列が千人を超えている時もある。会場前に並んでいた人のほぼ全てがチューブ滑り台に来るので、来場者整理についてはあらゆる事を想定して、具体的な対応のマニュアルを作っておかなければならない。そうしないとパニックになってしまったり、收拾がつかなくなったりしてしまうので、今回のコログル公園同様、対応策などを事前にたてることで、混乱や問題解決のリスクをなくするため、きめ細かい事前準備を行っている。

コログルでは人数制限も当初から計画されていた。来場人数を予想し、十分考え、どこから並び始めどこまで回して流すなど、綿密に準備することにより、結果的には列が敷地の外まで溢れることなく、落ち着いた雰囲気の中で行うことができた。入口後方に並ぶ列を作っておき、一度にたくさん来場された時に列へ誘導すよう最初からゲートを作っておいた。それ以上の来場者があった場合は、今度は建物の横に流すなど、マニュアル上は予想し得ることは全て作っておいたので、仮に一度に数百人が来場したとしてもクレームなく一旦は並べるように体制は整えていた。

○リスクとハザードを考える

私たちは本当に戦々恐々として運営に臨んだのだけど、広報、芸術家（設計者）、そして私たち運営側の三者は、運営上それぞれの立場があり、どうしても視点や想いの違うところがあった。運営側はできる限り安心して安全に子供たちを遊ばせてあげたいし、芸術家は芸術制作ですからロープ1本にしてもこだわりがある。運営側としてここに目立つトラロープを張りたくても、ここにロープは作品が壊れるからここにロープは張れないなど、なるほどと思うところもあった。反面、ここにロープがないとどうやって列を整理しようかと悩んだものの、その中で臨機応変に上手くやっていくのがなかなか難しかった。芸術家が制作する作品は子供たちが入る前の完成した綺麗な状態までであり、そこに子供を入れて遊ぶからには運営用のロープを張るのは当たり前と思っていたようで、私たちはロープが張って子供が遊ぶところまでが作品とは考えていなかったため、トラロープで済ますところも麻紐で雰囲気を壊さないよう対応したり。芸術価値という違った視点で作品を観るということは大変に勉強になった。

別の例をいうと、制作作業をする方もコンセプトを理解して制作にあたったが、完成間近に会場確認に入り丸太の表皮を剥がさずそのままの状態になっていたのも、トゲについて質問したところ、「それも含めてリスクと捉えています」とのことだったので、運営側としては触っただけでトゲが刺さるのは運営上問題があると考えた。私たちはこの問題について、リスクとハザードをきちっと分けて考え、ハザードは先に取り除くべきものであって、リスクは自分で考えて背負っていくべきものであると考え対処した。トゲの事例はハザードと捉え、高いところから飛び降りようとしている子供が入りとすれば「ここから飛び降りたらケガするかも知れない」自分がそれを背負って考えて飛ぶことはリスクと考える。その結果（何も怪我などが起こらないかもしれないし、怪我をするかもしれない）について自分で責任を負うことになる（当然子供によっ

ては、目先の活動だけしか意識しない場合もあるため、その活動の結果については、スタッフがそのような子どもたちに考えられるような場を促す)。もしみんなが走り回る場所に丸太があって、丸太に手をかけて回ろうとした時に、ほとんどの子がトゲが刺さる状態であれば、それはリスクではなくてハザード以外の何物でもないを考える。手をつくところだけではなく、隙間など子供が中に入ってしまうところの処理をしたり、ハザード状態のものは制作者の意図に最大限沿いながらも、開催直前たくさんのスタッフを入れて処理した。コロガル公園の構造物の内側は上から釘を打っているため、その先が裏側に飛び出ている状態なので、そういう部分に「入っちゃダメだよ」と規制をかけたくないため、先に入れないような状況にした。

建築（作る人）と、芸術家（設計者）と、その芸術を使ってそれを遊んでもらう（運営者）そのどちらも打ち合わせを十分行い、《遊ぶ子供たちのために》という考えを携える全ての人を持てればと思う。

○来場者の感触

期間が長かったので、夏休み期間中と夏休みを終わった後では、子供たちの来場について全く違っていた。夏休み中はたくさんの子供たちが来場し、YCAM みたいにリピーターが遊びを増やし支えるというよりは、毎日新しい人達が来て、その中に何人かがリピーターとして来場する程度。遊ぶ時間を区切っていたため、たくさんの子供が来場している時はリピーターの子供ももう一度並び直さなくてはならず、そのリピーターの子供が来場している時間帯は前回の遊び方から少しずつ発展していくというスタイルだった。夏休みが終わると平日は近所の子供がリピーターとなりドンドン遊びが変化していった。新しい子達は、最初は走るところからスタートする。次のステップで音や仕掛けを探す。次に仕掛けた鈴を見つけて色々な場所から転がしてみる。リピーターは、みんながすでに遊んでる以外に、何か違うことを探す。かくれんぼしてみたり、鈴をお金にみたててお店やさんを開いたり、いろいろ遊びが発展していく。それを見た子供がまたレパートリーに加え、さらに変化していく。

遊びが大きく変わったタイミングとして、遊び場ミーティングがある。ミーティングで出た子供たちの要望を会場内に加えるアップデートがあり、雰囲気まで変わっていた。YCAM のスタッフやメディア担当の札幌市立大の先生や北大の先生が参加してミーティングの場でアップデートできることとできないことを判断し、「それいいね！入れましょうか！」と採用する。子供たちの要望を取り入れられるところは取り入れて、毎回発展があった。

○スタッフやボランティアと子供たち

毎日入るコアスタッフは数名。YCAM のプレイリーダーのように子供と関わり遊びの発展を伝承するのはこのコアスタッフが担っていたが、たくさんの来場者が入る日はほとんど運営側に回っていたため、ボランティアスタッフが中心となってパーク内の子供の関わりを担当してもらった。ボランティアスタッフには必ず毎朝スタッフの心得や運営上のルール、プレイパーク的な遊ばせ方についての説明などを行った上でエリア配置をかけた。「必ずこの上に1人、ここに1人いてください、あとの人達は交代してください」とか「それ以外の方は子供たちと一緒に遊ぶなどしてください」とお願いしていた。ただし、大人が遊びの誘導をすることについては避けた。子供たちの自発的な遊び、もしくは、子供たちがきっかけを必要としている場合、何

していいかわからなくなった場合には、簡単な遊びや発展した遊びを提供するよう、事前にボランティアスタッフに説明していた。ボランティアスタッフは毎日午前午後で変わるため、走れる若い人もいれば走れない人もいたり、子供たちの話を聞いてあげる人、一緒になって遊んで汗かく人もいた。様々なスタッフがいるため、今日はどんなスタッフが居るか楽しみにしてくる子どもたちもたくさんいた。

○親について、子供について

親の反応は良かった。対象年齢や入場ルールなど、コログルグのことを事前に調べ理解して来場する人が多かった。もちろんオープン当初は子供向けイベントが会場そばで行われていたため、小学生しか入場できないことへ不満を言う人もいたが、理解した人が徐々に多くなった。予想ではあるが、SNS 等で（情報や噂が流れて）それを知って来場するので、徐々にトラブルが少なくなった。（笑）

今の時代を反映しているという点では、入場時に説明を受け iPad をタッチして自己責任を承認する手続きがあった。この効果が絶大で、他のイベントでは有り得ないと思う。手続きが有り得ないのではなく、遊んでいる最中に擦りむいたり手を切ったりしても事故に入らない。親が納得の上で消毒絆創膏などの処置で終わってしまい、これにともなう苦情などは全く現場ではなかった。学童保育の先生と一緒にやって来たグループの子供が大きく転んで痛がり、こちらで「大丈夫ですか？」と心配しても先生が「大丈夫です」と帰っていった。入場前の自己責任を承認して入場しているのでその意識があるから、先方が引率上の事故として処理したようだった。

実行委員会が主催とはいえ、市役所が大きく関わったイベントで事故責任システムを実施してもいいのかという心配があったが、全く問題は起きなかった。プレイパーク式の自己責任のルールは、これから私たちのイベントでも状況に応じて使わせてもらおうと思うぐらい、効果は絶大だった。

承認は大人ではなく、子供が自分自身でやっていた。付き添いの大人がいる場合は、大人に聞こえるようにスタッフが入場に関わる様々な説明を行い、自分の責任で遊ぶということを確認し、その上でボタンを押してもらう。大人が自分の子供に責任を持つという側面もある。例えば子供が遊ぶ靴にしても、長靴はいて遊んでもスリッパで遊んでもいい。その代わり走りやすい靴を私たちの方で用意していることを必ず伝える。自分で長靴の走りづらさや転んだりすることを体験して「やっぱり借ります」と言ってくる。児童館などであれば、ケガすることが予め予想できるので、先に対策を施してしまう。大人によって予防策としてルールが先に作られていて、子供達はどのようにしてダメなのか経験せずに、それに従って遊んでいることが多い。高い所から飛び降りたら痛いぞ、ということを理解する為に、一度飛び降りて実体験してみるという発想。自分で飛び降りられる高さを自分で知れば怪我を自ら防ぐことができるようになる。昔はそれが当たり前だったけれども、今は体験しようとしても、札幌のような都会の中で、制約のない場所で子供が遊ぶことはほとんどできない。児童会館や学校などでは安全の標準や照準を小さい子に合わせてしまう。高学年と低学年が遊んでいた場合、6年生が飛び降りても大丈夫な高さの場所で、飛び降り遊びをしたら低学年が真似してしまう事が予想できるので、6年生は危なくないけれど「そこは上がっちゃいけないことにしましょう」というきまりができてしまう。どちらに視点を置くかによって違うけれども、この遊び場は小さい子たちにとっては危ないからと、低学年が遊ぶ事を禁止すると高学年が楽しく遊べるようになる。逆に低学年の子どもたち

を優先する方法を取ると、高学年の子どもたちは面白くなってしまふ。幅広い年齢層が遊びで共存するのは難しい。それがコロガルでは共存する事ができた。

大きい子が小さい子をリードする場面はたくさんあった。しかし、たくさんの子供がいるので、ぶつからないように大きい子が自分で気を付けて遊んだり、小さい子は大きい子の真似をせず、スタッフの助言でできるかできないか考えるきっかけをつかんで、無理なく遊ぶ事により安全に共存していた。面白かったですね。

○自立支援プログラムのスタッフ

スタッフ体制として、私たち[SYAA]は業務を請け負っている立場で参加していたが、財団の職員だけでなく、財団で管理運営している札幌市若者支援総合センターで行っている自立支援プログラムに参加している青年も参加してもらった。引きこもったり就職や些細な事でつまづいてしまった青年が、もう社会へ出て大丈夫だが、その一歩が踏み出せないでいる。そういう青年に仕事の体験の場として提供し、働くことを経験してもらった。人に向かって喋ることが最初は無理でもチャレンジすることや、約束の日に出勤できることができるなど最低限の勤務条件をつけた。また、状況によっては現場から外すこともあることを条件にしたが、予想を上回る成果を出してくれた。彼らは最初、声を出すのも一苦労していたが、徐々に声を出すことができるようになりました。入口で子供たちに伝える説明文はマニュアル化できるうえ、喋る言葉はある程度決まっている。青年たちは最初は大きい声が出なかったようだが、徐々に大きな声で説明できるようになり、iPadを使って上手に伝えることができるようになった。そうすると周りが見えるようになり、ルールを把握し、徐々に子供たちとも遊べるようになり、コアスタッフとしての役割を十二分に果たせる青年も出た。彼らもコロガルに関わって大きく成長できたと思う。

○子供向け作品を - 次回3年後の芸術祭でやりたいことや期待すること

子供たちを接点とした芸術は是非あってほしい。ワークショップなどは参加人員が10人とか20人とか人数が限られてしまうので、いくら良いことをしても子供の体験できる人数が少なく、芸術に関する波及効果が少ない。コロガルも参加人数を絞らざるを得ない点は残念だったが、長期にわたって毎日開催しているので、延べ参加数はワークショップとは比べ物にならないくらいたくさんの子供たちに体験してもらった。通りすがりに参加できるような作品は今後も是非あってほしいと思う。

高度なプログラムばかりであると、芸術を理解している人だけが知っている国際芸術祭になりかねない。敷居を低くし間口を広げ、しかし奥は徐々に高くなっているような作品がたくさんあるといい。入口がちゃんと見えていて、その人の好奇心やレベルに合わせていろんな風に自分に見ていける。入口は浅くて広く、奥は高くてもいいと思う。そういう芸術祭になってほしい。またそういうもの企画されるのであれば、またお手伝いさせていただきたい。

○ルールから始まる親の意識や学校、社会変化の可能性

芸術祭に関わってここは良かったという点は、やはり子供たちとの関わりの中で普段と違うルールで遊ぶ

体験をしたこと。今までの私たちであれば自己責任で遊ぶルールは普通はない。ギリギリの冒険はあっても手放しの冒険はない。それでも大人の目線で絶対安全の枠からはみ出そうなギリギリの安全の中で行う。自己責任で遊ぶ、これは、これから少しずつ色々なものに波及し、市全体にも大きな影響が出て来ればと思う。コロガルを何度か行うことによって、お母さん達にも大きな意識の変化が期待できる。最近では運営側の責任についてすぐクレームを出す方が多くなっているように感じるが、親の意識が変わると「とりあえず文句言っておこう」みたいな人が減ると思う。

子供にはスタッフが「大丈夫？」と聞いたら「大丈夫。」と答えるけど、お母さんが先に「痛い？」と聞くと「痛い。」と言うし、「病院行く？」と聞いたら、子供が必要以上に不安になり、病院に行かなければならないと思う。その中には本当に病院へ行かなきゃいけない子もいるわけで、その見極めが当然大切。現場のスタッフが救急法とか学び、スタッフトレーニングをきちっと積んだ上で親の意識をちゃんと変えられたら、「親が大丈夫。」と言っても「これは病院行ってください」と言い切れる。逆に何かあった時に子供たちに大したことがないと分かれば、親に対してきちんとした説明ができる。大きく変わっていくきっかけになるんじゃないかなと思う。

— 子供の主要な環境として学校へ考えが及ぶのですが、学校でそのようなシチュエーションになった時、親が心配している時に、「大丈夫」とか「病院行きましょう」とか対応する役目を、昔であれば先生がその役割を負っていたと思うのですが、最近の先生や学校の状況は、今うかがったコロガルへの期待とどう結びつくと思いますか？

学校や施設側の対応というのは、今のスタイルはもう崩せないと思う。逆に親の方で意識が変わってくれば、学校側の対応も自然と変わって来るだろうと思っている。親側の意識を変化させるきっかけは、学校でもない施設でもない、こういうコロガル公園みたいな所で体験した時に変化が起きればと思う。

○運営チームと制作チームがともに作り上げること

今回、当日の運営だけ担ってほしいと言われた場合は、たぶん引き受けることはできないと思う。与えられたフィールドでその日から突然運営をするのはとても難しいので、できる限り作る段階から関わり、安全な運営ができるよう細部まで制作にまで関わりマニュアルを完成させたいと思う。今回の芸術祭はYCAMの視察ができたことが大きかった。設計の段階、建築の段階それぞれではあまり関わることはできなかったが、徐々に出来上がる現場をみながら運営について考えたり、運営の要望などを伝えたり、最終的に満足のある運営マニュアルができあがった。私たちが関わっている雪まつりのつどい会場でなぜ制作を担っているかということ、迫力満点の滑りを出しつつ、一人のけが人も出さないよう安全に遊ぶことができる滑り台作りのために、設計から施工まで自分たちで行うことができるから。遊ばせる側（運営サイド）は作る段階から一緒に関わらないと、どんなに素敵なものを作っても運営サイドと分離したら結果、事故があったり怪我が多発する作品になってしまう。想いやデザインと結果は別物。

今回、多少なりとも建築家と運営サイドと一緒にディスカッションして作ることができた。基本構想から見

私たちの不安や疑問点は伝えることができたと思う。そうすることによって、それぞれの立場を理解し、事業の趣旨を達成し、実りの多い事業につながると思う。細かなことと言えば、建設者には板の切断面などは必ずエッジ落としをお願いしたけども、結果落ちていなかった。板の角ってエッジ立って危ないので、前日自分たちでサンダーで削り落としたりした。角に頭を打った時に全然違うので。やはり理解してもらい一緒にやれるといいと思う。作っただけ、運営するだけじゃなく、子供たちを見据えて、子供たちが触る・遊ぶんだったら、こうしなければならないなど、運営する側と制作側が協議することで、安心安全面での遊びができる。危なくて遊べないものができたりすれば、いくら素晴らしい芸術作品でも作品価値が落ちてしまいかねない。

○札幌の環境に対応すること

せっかく作っても、観るだけになってしまう幼児さんがかわいそうだった。今回小学生を対象として作られたが、幼児は学校の夏休み終了後の平日午前解放する対応ができた。どこかに視点を置いて対象者を決めなければならないが、運営方法で対象を広げることができた。長期間であり、必ず小学生の使わない時間があるから取れた対応だった。山口で運営していた前例があったことは大きく、いろいろ研究して準備することができた。もし札幌の実施で山口の運営方法をそのまま持ってきた場合、対象人数も違うし難しかったと思う。入場している人数とか子供たちを見ていくと、あれはできるけどこれはできないとか、見えてくるので。

●市民協力者／参加型プロジェクト：とくいの銀行

日時：2015 年 6 月 19 日（金）

場所：Dons／本郷商店街 <http://www.dons-sp.com>

出席：宇山誠治（自営業／本郷商店街）

聞き手：大友恵理

○本郷商店街について

利用者層は年配が多い。商店街で調査も行っているが、若者にとって“商店街”という時点で自分の行く場所ではないという意識があり、商店街でなく地下鉄に真っ直ぐ向かってしまう人ばかりである。“近くの商店街より遠くのまちなか”なのだろう。業種にもよるだろうが、若い人が来ないというのは若い人が行きたい店がないということであり、それをどうするかが課題だろう。年配の方のお店で後継者がいるというところは少ない。130 店ほどの加盟店があり、それだけの数があることで良いところも悪いところもある。

○とくいの銀行本郷商店街支店を設置するきっかけ

2013 年 12 月オオドリ大学での SIAF に向けたまちでの講義に参加した。漆さんの瀬戸内芸術祭の市民参加型プログラムの話を聞き、興味をもち直接お話をしたところ、その流れで SIAF の取り組みの話にもなり、そこでとくいの銀行の支店の誘致にいたった。どうなるかわからないという気持ちも。

○商店街の人々ととくいの銀行

商店街として SIAF とのコラボをチラシに掲載したりしたが、一般の人から聞くと難しいようだった。とくいの銀行そのものに対して、何かよく理解できず、不安感が強いようだった。また「アート」「芸術」という響きに問答無用で拒否感を示す層もあり、一から理解しようとして踏み込んできてくれる人は少数であった。踏み込んでくれるのは商店街とは関係なしに既に SIAF と関わっている人が多数。深澤さんの狙いでもあるかもしれないが、見る人によって捉え方の変わる作品というのが逆に、“芸術祭”の取り組みという方向から入った人にとっては、人によっては“このとくいの銀行が芸術なのか”という受け止め方も。早めに ATM を設置したがこれによって特に起きたことはなかった。宇山さん主導で商店街のお祭りの際に、商店街界限完結というよりお祭りを活気づけるためとして、とくいの銀行に預けたものを引き出してアトラクション（フラダンス・書道パフォーマンス・ギター弾き語り・手紙を書く等）を行い、商店街での「とくいの銀行」の知名度 up も狙った。これによる参加者からの声としては、「引き出してくれたこと自体はありがたいが、商店街側で関わってくる人がいないのは寂しかった。」「銀行経由の引き出しはどうしても一体一もしくは少数の関係になりがちなので、こうして不特定多数の人対象に自分が何かできる機会を与えられるのは嬉しい」などがあった。深澤さんは実際にこのお祭りの件には関わっていない（引き出しリストの提供はあった）が、後に「自分(宇山)ではなく誰かに引き出させるべきだったね。」という意見も（時間的なことを考えると作

業的には困難であったが）。このお祭りによって、結果としてとくいの銀行に関わった人たち（参加者とスタッフ）での距離は縮まり、その点での意味はあった。

○SIAFにおける、とくいの銀行のあり方について

資料館におけるとくいの銀行本体と、商店街の支店とで（活動・評価等を）切り分けることはできず、どっちがどうだったと言うことはできない。ATMの運営に関しては、興味のある人には説明をしたりして、なかにはとくいを書いてくれる人もいたが、やはり若い人でもなかなかとくいの銀行そのものを理解するのが困難なようではあった。しかし「とくいの銀行」そのものを芸術作品と捉えるならば、「分かりやすさ」や「参加者がより増えていくこと」が必要か、そのための説明や工夫を深澤さんがすべきだったかと言われると難しいところであり、一人ずつ捉え方は異なるから、地域・タイミング・その他諸条件によって変化してもかまわない面はあるだろう。むしろ他のボランティアが深澤さんを頭取として扱い、トップダウン制の考え方になっていたことが気になる。とくいの銀行を作品として捉えれば間違いではないが、もっとふわっとしたイメージとして捉え、深澤さんの手から離れて「銀行員それぞれのとくいの銀行」が産み出される雰囲気になればより良かったのでは、と個人的には感じた。深澤さんが札幌に引っ越してこられるが、次回のSIAFでもう一度このとくいの銀行を行うことよりも、深澤さんもボランティアも、例えばとくいの銀行でも今回と違った形をとるなど、あくまでアーティストとしての新たな作品を望んでいるのではないかと。自分自身「アート」という世界に精通している訳ではなく「札幌国際芸術祭」になにか協力できるかは覚束ないが、深澤孝史という一人の人間を尊敬している面があるので、彼と一対一の人間として協力できることはしたい。

○商店街における、芸術祭の認知度や関心について

芸術祭の認知度はほとんどなかった。赤レンガ広場の盆踊りなども噂は全く届かなかった。商店街のイメージとして、おそらく“坂本龍一のなにか”というもので、「坂本龍一がなくなったからやめるんだろ」といったことを言う人もいたり、その程度の興味であった。むしろ坂本さんの名前でもかろうじて芸術祭に興味を持った、というところかもしれない。そもそも、『芸術』＝自分には関係ない、としてしまう人が多く、特に現代アートはどうしても年配の方中心に拒否感が見受けられ、受け入れられにくかった。印象派や写実主義など見目で分かりやすいジャンルの方が理解はされやすいのでは？とは言えそういったオーソドックスな絵画があれば良いと一概に言える訳ではないだろう。ただビジネス戦略的に言えば、年配の方や芸術に普段興味が無い層に訴えるのであれば分かりやすく知名度の高い作家・作品を大金を積んで持ってくるのが手っ取り早いのは確かだろう。

○SIAF 連携事業について

SIAFとの連携事業として本郷商店街でとくいの銀行をやったことに対して、特に意義はなかった。連携というからには、お互いに相談して、できるできないは置いておいて何か違う協力を探すことができれば良かった。実際に受ける協力は認可を受けてのチラシやのぼりなど。コミュニケーション面からの協力がほしい。

○札幌や北海道について

SIAFに限らず、札幌のイベントも郊外でやればまた何か違うのではないだろうか。札幌は人口が多いが田舎っぽさ、物足りなさがある。札幌の人は大通・札幌駅周辺のことを“まち”と呼び、その“まち”以外にはっきりした市街地がない。札幌は個人商店（飲食店除く）に対して厳しい。副業やイベント収入がないとなかなかやっていけず、チェーン店ばかりである。札幌の年収は全国平均より低く、購買力では（本州の同規模地域と比較して）人口ほどの力がないことははっきりしているが、それにしても物足りなさが否めない。芸術祭でもそういった部分があったが、身内までは行かずとも知り合いの知り合いなど、関わる人が固まっている印象を受ける。190万人の人口がいてこうなるのは、つまり流動性がないということかもしれない。興味のある人となない人の差が激しいのではないだろうか？ではなぜ興味がないのか？また、個人の興味の問題で片付けてしまって良いものなのか？という問題点もあるのでは。SIAFにしてみても、「気付いたら終わっていた。」という人は多く、ポスターをたくさん貼っていても「知らない。」と言われ続け、芸術であろうとなかろうと、なかなか運営側はやっているつもりでも伝わっていないことが多く、情報のつながってなさが目立つ（広すぎるからなのか、情報が集結する場所がないからなのか）。

個人的にチ・カ・ホという存在そのものには反対の立場である。北海道の人間は雪を気にするが、北海道に住む上では仕方のないことである。地上で閉店する店が多いことも問題では。チ・カ・ホでイベント的に出店する店はあるが、それは商店街ではなく、国の補助金が出ている時点で常設は不可であり、違和感を覚える。世界的に見て、これだけの豪雪地帯にこれだけの人口がいることは珍しく、特殊性に配慮すべきかもしれない。

夏期・冬期の売り上げの差をどう解消するかも考えなくてはならない。雪まつりは道外向けであり、市民向けにはどうなのだろうか？北海道の特徴なのか、観光誘致がさかんである。観光誘致自体が悪いことではないが、それ以前にそこに住む人々のためにどうするかが先ではないだろうか。（札幌に限らずどこの自治体も）他にも例えば、移住に力を入れているが、それ以前に商工業の活性化をすべきではないか、など。“地域創世→観光客・若者誘致”とされているが、商売が成り立たなければ誘致しても人は来ないし、そもそも魅力あるまちでなければ人は来ない。その点で地元のいろいろなことを知れる旅プロジェクトは面白かったかもしれない。

北海道の人（全国的にも似たようなものかもしれないが）は行政に依存する傾向がある。行政の人も“どうすれば国・都道府県の予算がつくか”と考えがちであり、そこを意識すると国が言っていること・進めていることに引きずられて地域の特色が活かない傾向にあり、結果どこでも同じ食や観光の方面に話がいつたりする。それはどうなのだろうか？個人的な意見であるが、街中がだめということではないが、雪まつりやオータムフェスト等様々なイベントを街中で行い、飲食店を出店し…と、同じスタイルであり、芸術祭でも飲食店出せば良かったという人もいた。飲食店だと正直人はたくさん集まるが、それだけではないやり方をしてほしい。芸術祭では、せっかく「都市と自然」をテーマにするのであれば、藻岩山や手稲・石狩方面などでも開催するなど。

○SIAF について

3年に一度のSIAF開催となれば、会期ごと完結でなく、何か引き継がれてほしい。事務局では行政主導というのあったり、年度で区切られることもあり難しいことであるだろうが、それをクリアして継続していけるのであれば、参加した方々の自発的な、市民のボトムアップのような形でやっていけばよいのでは（とくいの銀行ではなかなかそういう形にはならなかった。）。SIAF全体に対し、既存の大きい博覧会的イベントと特に違いがなかった印象を受ける。（「都市と自然」というテーマ、市民参加型というところでも）とくいの銀行もそうだが、アトラクション的な参加だとあるが、実際にそこから次につながる何かや広がりというものは今回無かったように思える。理由として、資料館より向こう側と商店街のギャップや、いつも通りの会場（資料館、赤レンガ、モエレ沼等行政主導で芸術イベントを行っている場所）だったことがあげられるのでは。“札幌という都市のなんたるか”があまり表されていなかった。

○3年後にむけて

・開催場所について

（近代美術館・赤レンガ・資料館等）道の施設を多く使用するが、自分のものでない施設を使うというのはとても大変なことである。実際3年後は使用できないらしく、ではどんな場所があるかと考えたとき、札幌市内に広げることで、会場が点々としているからこそお客さんを運び、つなげることができて良いかもしれない。商店街だとSIAFの活動を見るために訪れる人は少なく、来てもらうためのなにかを、商店街に限らず事務局で力を入れて拠点を設けるなどすると良いのでは。工夫や仕掛けがほしい。まちに凝縮すると鑑賞する・参加する分には良いが、札幌を楽しんでもらうためにはどうなのだろうか？また、「都市と自然」というテーマからはどうなのであろうか？

・誰に向けた芸術祭か？

また、芸術祭は市民向けなのか、観光客誘致のためのものなのか？予算的にどちらも両立するというのは厳しいだろうし、どちらが良いのか？市民芸術祭なのであればもう少し市民の生活に根ざした、関わりやすい取り組みがほしい。国際芸術祭であることを考えれば、外国人向けの内容が少ないように思える。（例えば、ホームページのアテンド等）参加型プログラムは結構少なく、資料館が市民向けの役割としては最後の砦だったかもしれない。サカナ通信は評判も良かった。会場ごとに空気が異なった。

視察に来た文化庁の人からはボランティアの参加している感じに驚いていたり、周りから見ている人とのギャップがあるようにも思える。参加している・関わっている人と参加していない人でもギャップがあった。参加していない人からは「なにが国際だ。メディアアートだ。わけがわからない。」という声も。“メディアアートとしての”をプログラムで推してきたのでそういったイメージがついたのかもしれないが、携帯電話と石器を交換するなど、全くメディアアートじゃないものもあり、それもよかった。

・周囲の環境

道民は道新を購読している人が多数であり、道新に後援についてもらわなかったことが良くも悪くもある

かもしれない。SIAF が始まる前には批判的なメディアが多かった。食の祭典のトラウマか、食品販売会社で非常に批判的な方も。決算は黒字であり（芸術において決算がどうこうというのは重点を置くところではないかもしれないが）、赤字を出さない・経済効果があるというのは議会が認めてくれるところであり、このことや新市長が秋本市長であることから次の開催を考えればなんとかやっていけそうな要素である。

今回の SIAF に参加して、とくいの銀行の個別イベントに関わっては手応えはあるが、SIAF 全体としては手応えがない、感触がない印象。雲をつかむようであった。SIAF ボランティアをシフト制で渡り歩く人が多く見られたが、とくいの銀行は身内感があってこわいという声も耳にした。「SIAF のボランティア」というより、「とくいの銀行の深澤さんのボランティア」というイメージだったかもしれない。全員が賛成するというのはあり得ないことであり、どこに重点を置くかが大切である。ボランティアは良かったというだろうが、一般来場者、遠くから見ている人はどうであるか。どういう仕組みを今後つくっていくかが大切。ネガティブな感覚を持っている人の考えを知って建設的に活かせると良い。

・広報について

SNS の利用についての考慮も必要。実際に日々 SNS を利用している人の比率はそんなに高くないだろうし、やっても真剣に見ていないことが多いだろう。“こんなに宣伝してるのになんで！？”はよく聞く声であるが、情報がありすぎて流され、情報として認知できないのかもしれない。また、メリットしか考えない発言（関係者に把握されてはまずいようなこと）をする人もいる。しかし、デメリットを承知の上で、コストがかからないことから“やってみる”というのも一つの手ではある。ただ、例えば Facebook で一日に何度か更新をして宣伝をして、それで広告した気になって“なんでお客さん来ないんだろう？”というのは進歩がなく、あまり感心できない。さらに、SNS で宣伝をすることでどれほどの効果があるのか？会期中のホームページリニューアルを3回行っているが、そこに使う予算を一部折り込みチラシに使うべきだったのでは？という反省もあるべきと感じる。（芸術祭に折り込みチラシはどうかという考え方もあるが。）そうでなくとも、例えば道新で記事を書いてもらうなど。そもそも根本的には集客数をあげることが目的なのだろうか？そのための広告媒体も、国際芸術祭を重視するのであれば道新に書いても意味はないと言えるかもしれないし、海外メディアから取材があって、上々のアンケート結果をもらっても、実際にどんな記事を書いたのかというのはこの場所ではわからず、感覚としてはわからない。例えば著名な外国の新聞に載るなどすれば話題になるかもしれないが。

・“国際”芸術祭としての SIAF

“国際”となったときに、札幌と海外の間には東京が入る。いきなり海外から直接人が来るというのは観光ではあっても、芸術分野的には難しいことではないだろうか。そもそも“国際的な企画としてふさわしいのか、そうする意義はどこにあるのか”という議論があっても良いのかもしれない。“国際”というのは、外国の作家がいることではなく、海外に発信していくということであったり、日本人でも海外で活躍したり、名前は日本だけど海外では著名であったり、定義は難しい。方向性として、全世界でなく、アジア（海外からの客層として多い）やロシア（アイヌ民謡・道東との関わり等から）にターゲットを絞るなどあっても良いのかもしれない。いまの時代にあまり内向きになるのも良いことと考えられない。

・道民と SIAF

SIAFに関わろうとしている人がいないのか選定に引っかかるようなものがないのかはわからないが、道民の参加率があまり高くないように思われる。しかし、実は他の著名な芸術祭と比べれば地元アーティスト率は高い。（地元だからアーティストを選ばなきゃいけないということではないが。）このことを発信した方が良かったかもしれない。北海道の人は北海道がとても好きである。個人的にはアーティストの出身地にさほどこだわる必要はないと思うが、芸術にそこまで感心のない人からすれば“北海道出身”のアーティストというのはとっかかりになりやすい面はあるかもしれない。北海道の人は今でこそ大通公園のイベントで慣れてきたかもしれないが、イベント慣れしていない印象。興味のない人のなかには「(飲食の)屋台を出せば？」と言う人も。単純に人に来てほしいだけなら効果的で、逆に面白いかもしれない。

場所の性質の考慮が必要だろう。（例えば、チ・カ・ホは期間が長く、通勤利用者が多いため注目度が日経つにつれ低下したり、預けられるとくいが多かったりなど）

・市と SIAF

狙うこと、課題、考えなくてはならないことは多い。市の予算があるとそれはなおのことである。集客やPDCAなどいろいろと言われるが、芸術にそれを言ってしまうと遊びや余裕からくる意外性や面白みがなくなってしまう一面もあるだろう。議会对応などは課題もあるが…。アンケート調査も経済的な数字だけではない、ソフト面をはっきりと見えるようにしようとする実験的な調査が行われているが、お金でなく、やってよかったという人がどれだけいるかを知れると良い。多くの人に受けるか受けないかだけが評価基準では寂しいだろう。どこが響き、そうでなかったかなど。評価というのは皆に共通した悩みの種となるところであるが、市の事業で事後の反省やヒアリングというのはあまりなく、ある程度定形の文言をつけてのビジネス的な評価・結果報告が多いなかで、前進している面と言えるのではないだろうか。

・市民と SIAF

基本構想の見直しも議論したいところであり、市民としてそういった構想に関わりたいという人もいるだろう（実際は“自分が”関わりたいという人であろうが）。意見の交換の場はたくさんつくれると良い。情報収集窓口としてのラウンジの期待もあるだろう。

●市民協力者／参加型プロジェクト：旅プロジェクト

日時：2015 年 6 月 12 日（金）

場所：SIAF ラウンジ

出席：米澤修吾（企画協力者）、菊地歩（企画協力者）

聞き手：大友恵理

○関わるきっかけ

札幌での国際芸術祭開催の実現をめざして、SIAF 開催前に札幌ビエンナーレ・プレ企画実行委員会を民間で組織していて、そのプレ・ビエンナーレの実行委員として関わっていた。十数人が集まって、まずは民間でもできるんだということを示そうと、一回目は北海道立近代美術館で開催した。それが 2011 年 4 月。東日本大震災の直後で、止めようかという話も出たがやりましょうと。そして二回目が芸術の森美術館で開催。実行委員会は北海道大学の太平先生が代表、武邑先生もいて、基本的には創造都市をどう作るかという文脈で札幌での芸術祭を考えていた。私は創造都市に非常に関心があったので、太平先生や端さん達から声がかかって一緒にやりませんか、ずいぶん何度も集まった。札幌市からも担当の方が覆面を被って参加していた。私は経済畑の人間で、当初は現代アートと創造都市が全然つながらなかった。今はだいぶつながってきたけれど。美術展もみているとだんだん見方が変わっていく。創造都市づくりのきっかけはできたような気がする。ただ、実際は、ちょっともったいなかったと思っている。非常におもしろかったが、その面白さが普通の人には伝わっていないのではないかと思った。やはりアーティストという敬遠してしまうし、自分とは違うだろうと思ってしまう。だから SIAF では参加型プロジェクトというのが非常に良かったと思う。自分との関わり、接点を持てるから。（米澤）

○創造都市への関心

資本主義経済社会がこれから先どのように展開していくのかということを考えたときに、産業資本というものがある。18 世紀くらいから今日までずっと続いているが、19 世紀 20 世紀になると金融資本というものが出てくる。今その産業資本や金融資本が転機を迎えていると私は思っている。日本はその最前線です。恐慌など世界経済の行き詰まりを防ぐために、私たちの暮らしに必要なモノ・コト、人と人との関係性などいわば経済の質を積極的に変えていく時代が始まっていると思う。新しい芽生えとして創造資本の時代が始まっていると思っている。創造都市というのは、市民や事業者の創造性を資本にして社会や経済を動かしていこうとする都市。市民や事業者が日常的に創造的になっていく地域社会をどう作っていくか、芸術祭と関わることに繋がってきている。（米澤）

○旅プロジェクトへの取り組み

私は道外の出身だけど札幌は非常に魅力的な都市。都市の真ん中から山が見えるのは素晴らしい。ふだんの空気も軽井沢みたいで。まさに都市でありながら自然が身近にあって。旅プロジェクトは当初は一般募集

で集まった 20 人ぐらいの人たちで何をしようかと。4 つのグループができて、私たちのグループでは最終的に三人が残って旅プロジェクトを進めた。三人でけっこう話し合いもした。アートを対話を生むソフトパワーと捉えると、旅もアートでしょ・・・って。(米澤)

○旅プロジェクトのテーマ

縄文の発見者は岡本太郎だといわれている。坂本龍一さんも縄文に非常に詳しいし、もっと縄文やってほしかった。縄文遺跡は札幌に 300 か所近くあるが、遺跡はみな小さいので、ほとんどの人が知らないと思う。なぜ縄文かというと、創造都市の原点につながってくると思っている。縄文時代というのは、国家とか世界宗教が形成される前、日本の地域に 1 万年以上もの長い間続いていた時代。暮らしはどうだったかというと、大変だったろうけどたぶん自然を恵みとして、人と人との関係も結構豊かだったんじゃないか。北海道はその縄文を受け継ぐアイヌの人たちが現存している地域として、世界に自慢できると思う。そして札幌には、人と自然が共生する縄文の、目には見えない豊かな精神文化というのか、分かち合う豊かさというのか、こだわらない雰囲気や都市の底流に流れていると思う。創造都市のキーワードのひとつは、こだわらない寛容さ。札幌は扇状地に人工的に作られた都市なので、地下鉄の駅では今でもコンコンと水が流れているし、都市を流れる豊平川の伏流水でお酒も造られている。人工的という言葉が英語ではアートのと表現するし、都市やお酒もアート作品・・・といっているのかも。(米澤)

旅プロはすごい楽しかった。体験バスツアーはよかった、ほんとうに。秘境というところに連れて行ってもらったが、札幌市内にあってびっくり。ときわの森が、個人の所有地で住所は明かせないところで、すごい滝があって本当にヒーリングスポットで、アイヌ料理を食べたり、なかなかないツアー。講座でしっかりと流れが作られていて、全部参加していくと本当にこの芸術祭の主題に沿ったテーマだったけれど、開催が SIAF 関連のイベントがいくつかバッティングしていて、聴講者が 5 人のときとかあったのが残念だった。

「空知炭鉱（ヤマ）の記憶ツアー」は、既に炭鉱の記憶推進事業団で開催されていたものと絡めたツアーだった。ハコモノじゃないアート展示みたいなものがあり見たことがなく、その土地の景観を利用してというのがすごく迫力があつた。これに行ったらすっかりタ張好きになって、今年タ張映画祭も見に行った。なんだか頑張れって応援したい気持ちになった。炭坑の今までの歴史とかを熱く語ってもらったり。現地のタ張プロジェクトのスタッフの人達が常にアットホームに熱心に迎えてくれて、上遠野敏さんとかはその後もお話をさせていただく機会とかあったり。裏話で、梅もけっこうタ張取れるらしいが、人手が少なすぎてその梅を外に出荷できないそう。せっかく良い梅が取れても、メロン農家だとメロンの出荷で忙しかったりするから。そういうことを聞いてちょっともったいないなと思った。特産物人手不足で出荷できずみたいな内情を話していた。(菊地)

○次回 SIAF への期待

次回芸術祭が開催されるのだったら、こういうバスツアーみたいのたくさんあったらいいと思う。何かのきっかけがないとなかなかこういうところへ行かないので。(菊地)

3年後の芸術祭にむけて私はもう食プロジェクトをやろうと思って準備をしている。ちゃんと芸術祭の文脈でやるために準備をしている。去年のSIAFでアーティストの横のつながりができたし、市民ボランティアの横のつながりも一応できてきたし、次回の課題は、やはり企業や事業をやっている人、経済系の人の関わりをどう作っていくかだと、私は思っている。企業や事業やっている人たちも芸術祭にお金を出すだけの役割から芸術祭を作る側に回りましょうと。経営にとって、アート、アーツは経営の創造資本であると。関わるなら初めから関わった方がいい。そのほうが自分で考えるし、芸術祭との接点ができるし、そうすると他のものを見に行くようになる。芸術祭のことも伝えなきゃならないから。初めから関わった方が良いと思う。すでにもう声をかけ始めている。創造都市をどう作るかってことを基本的にずっと考えているから、具体的に私のできる範囲で一步踏み出したい。(米澤)

○SIAF2014に関わって

芸術祭は本当に関わって良かったと思う。本当に爆発的にいろいろな人に出会った。面白い人とすれ違っていくのが良いと思う。継続的な関係じゃなくて、現れては消えていくけど、ちゃんと挨拶して通り過ぎていく感じが。共通テーマで出会って、そんな感じがすごく楽しかった。ちょっと残念だったのは、関わっていた人たちはみんなブワーってなってたけれど、地元に戻って周りに話したら、その芸術祭をどんなものかあまり知らない人が多くて、生活圏内に密着していない感じなのかなと思った。江別に住んでいて、近いからやってることは知ってるのだけど、そこまで興味があるかというと・・・。市民の一般的なライフスタイルに即した形、表現場所みたいな。でもチ・カ・ホでもやってたけれども。街の困っているところみたいなものをアートに落とし込めたら目がいくのではないかな。例えば、最近私はバスに乗りたいたけど停留所がわかりづらい。今日も隣の停留所からバスに乗るところで「あそこに停まりますか」と聞くと一本前の5m先のバス停から乗らないといけませんとか言われて慌てて降りたりした。だからバス停マークとかをアート作品にしてもらって、面白いマップだったら乗ってみたいかな。時刻表もすごくわかりづらい。そういう、ちょっと困ってる、生活していてこれ直ったらいいのにと思ってるけど、放置しているものとか、さっきの空き家もそうだけど、そこにアートが関わることで関心の目がいって、社会的に認知されて生活しやすくなったら面白いと思う。(菊地)

○ボランティアを経験して

SIAF2014ではボランティアもやっていた。一週間に一回チ・カ・ホで。面白かったと思うのが、チ・カ・ホを歩いている市民、通行人の反応。作品をどうみているのか。芸術祭の始めのころと終わりのころとでは反応が違ってきた。尋ねてくれる人が増えてきた。最初は8割方は見て見ないふり。そのうち「何やってるの?」と、だんだん慣れてくるなあという印象があった。ブラインドブックマーケットはもったいないと思った。面白いのに非常に拒否しているような雰囲気会場にあって、だからもっと入りやすくすればいいのにと何回も書いた。段ボールの高さを変えるだけでももっと入りやすいのに。めちゃくちゃ入るのを拒否していると思う、あれは。あんなに面白いのに、もう少し入りやすくすればいいのに。あれは残念。

ボランティアをして印象に残ったことは、お孫さんを連れて毛利悠子さんの作品の前を通り過ぎたおばあちゃんが、しばらくしてお孫さんに手を引かれて「孫がどうしても見たいっていうものですから・・・」と作品の前に戻ってきたとき。(米澤)

連携事業グループインタビュー 1

日時：2015 年 6 月 19 日（金）

場所：SIAF ラウンジ

出席：中島洋（NP0 法人北海道コミュニティシネマ・札幌）、畠中秀幸（有限会社スタジオ・シンフォニカ）、福原明子（halle）

聞き手：大友恵理

オブザーバー：小田井真美

○出席者の活動

●中島洋／シアターキノ（連携事業：札幌映像制作若手育成事業「この砂赤い赤い」制作）

連携事業では、若手育成事業として札幌市の助成を受け、札幌市資料館を使った映画制作を行った。助成金 43 万円の他、もう一人のプロデューサーが 100 万円出資した。資料館を舞台にしたかった。メンバーの中心である若手がプロの映画製作を体験することが目的。ちりゆきえのアイヌ短編集を現代風にアレンジし、札幌国際短編映画祭でも上映。英語字幕入れて海外映画祭へ出品する。シアターキノでは 8 月下旬に北海道フィルムアートフェスを開催した。道外の人に知ってもらいたかったが情報届かず。

●畠中秀幸／建築家・音楽プロデュース（連携事業：ハコレン）

琴似の自宅をアールスペース「シンフォニカ・スクエア」として開放。また「途上の家」でコンサート、「写真家 KEN 五島 展覧会 in 途上の家」、「木下泰男・畠中秀幸・花田大輔・CAI18 期生 合同展覧会 in 途上の家」、椅子作りなど様々なジャンルの企画を開催。宮の沢方面のイベントは人が集まりにくい、中西圭三ライブは人が集まったので、コンテンツ次第。農業と音楽を絡めたイベントの可能性に取り組んでいる（斎藤ファーム）。芸術祭は PMF やシティジャズといった音楽イベントとうまく連携できるとよい。建築・空間と音楽をつなぐのが自分の役目。音楽の即効性を活用したい（音楽が鳴ると人が立ち寄る）。

●福原明子／halle（連携事業：ハコレン）

ハコレンでは 4 作家の個展とグループ展を開催。halle は複数のアーティストで運営しているアトリエ兼オルタナティブスペース。メンバーは 6 人。福原を含む作家 4 名（油絵・メディアアート・映像・彫刻）の他、タ張映画祭スタッフ 1 名、マネージメント 1 名。みな 20 代前半、若手のアーティストのスペースが少ないので集まれる場所を作りたい。月 1 回メンバーによるグループ展のほか、不定期でアーティストトークイベント、メンバー以外の外部アーティストの企画展も開催。道外の作家を呼んでのアーティスト・イン・レジデンスや映画の上映会などもしたい。カフェスペースも併設しているので普段ギャラリーに来ないような人でも入りやすいギャラリーにしたい。

※ハコレン（札幌ギャラリーネットワーク）

札幌市内の 17 ギャラリー＝「ハコ」が連携して、札幌国際芸術祭 2014 を地域のインデペンデントなアート関係者の力でいっそう盛り上げると共に札幌から世界に向けたアートの発信を行う。<http://sapporo-hacoren.com/about/>

○連携事業へ参加した意見・感想

・ 広報

連携事業の多さはアピールできたが、多すぎて芸術祭としてフォローしきれなかった。情報の出し方がよくなかった。きちんとした情報を出さないと、連携事業に関わった人たちに申し訳ない。一流のものと、市民が参加できるものの両方が必要。地理的条件の悪さから言っても、マップを作って欲しかった。ウェブだけでなく、ペーパーでフォローすべき。費用はそれほどかからないと思う。参加事業にペーパーを置けば、自分のエリア以外の情報も仕入れることができる。双方向の連携ができるように。例えば舞台芸術の会場で来客に手渡しするなど。バベルや CHROMA 公演の際チラシ配布を依頼したが断られた。インフォメーションセンターはデザイン性重視で機能的ではなかった。ボランティアの仕事は増えるが、チラシは壁面ではなく平置きできるようにしたほうがよい。

連携事業を一覧にまとめた全体フライヤーは情報を知ることができてよかった。ギャラリーの場所なども知れた。個々の情報が限られるという弊害はあるが、情報が網羅されていた点は良かった。

・ 事業の連携

市民がやっている連携事業を事務局がどうやってフォローするかを考えて欲しい。お金はかかるけど、連携事業をまわるバスがあったらよい。交通機関を考慮する。道外の芸術祭はアクセスがよい（ヨコハマトリエンナーレにはシャトルバスが 15 分ごとに運行していた。）。SIAF2014 では終盤はシャトルバスが無料になって利用者が増員したが、バス運行が十分周知されていなかった。芸術の森美術館所有のバスを使わせてもらってはどうか。企画として、有料バスツアーを行ってみるのはどうか。空知の炭鉱をめぐる企画（CB ツアーズ・国際大学吉岡さん・旅プロジェクト）のように新しいツアー企画の考案。

○札幌の芸術文化への問題意識

アートに興味ある人が少ない、そこを掘り起こすのかどうか？アートに無関心な層へのアプローチ（特に若い世代）。親の影響で子供のアート離れが深刻化している。音楽には興味あっても美術に関心ない、冷めている。音楽をやっている子供たちが SIAF についてネガティブなことを話していた。新聞メディア等を読んだ親の意見から影響を受けているのだと思う。現代アートに絞らないために「札幌国際芸術祭」と名付けられたが、方向性が変わってしまった。現代アートの祭典という印象が強い。現代アートが中心にあっても、全ジャンルのお祭りという位置づけにしたい。市民の関心を引くような宣伝の工夫。関心はあっても踏み込みづらく蚊帳の外に置かれた感じがある。年齢層の高い人には印象派の絵画のほうがいいのかも知れない。

普段芸術に携わっていても初めは SIAF に関心がない。行ってみて初めて面白いと感じる。子供の頃から芸術に触れる場とチャンスをつくることが大切。アートに対して何も感じない人は、何も感じない自分に気づ

くと、アートが怖くなるという悪循環に陥っている。「アートなんて怖くない」ことをもっと知って欲しい。芸術祭そのもの・現代アートに触れる機会があることは学生にとってよいこと。地元で観ることができるならおさら。広報さっぽろに芸術祭の招待券を添付してはどうか。一家に一枚配布することで家族連れを動員できる。市民に還元するスタンス。ディスカウントクーポンは主婦に効果的か。団体割引。

○他県の芸術祭のアイデアと比較

仙台メディアテークの市民が作ったチラシはお年寄りに大人気だった。情報の出し方・やり方を工夫すれば、お金をかけなくても宣伝できる。アイデア次第。

山形国際ドキュメンタリー映画祭（8日間）では100人くらいのボランティアが全国から集まり、作家インタビューなどのデイリーニュースを任される。サカナ通信に通ずるものがある。山形の映画祭は2年に1度開催されるが、老舗漬物屋や、倉のレストランを開放し、朝～深夜まで開放。飲みながら語らう場がある。外国人との交流がある。SIAFでも夜のたまり場を作りたかった。マップ作成。

○今後の課題

連携事業への参加事業は予算がないとできなくなるものがほとんど。内輪感・保守的な事業が多い。教育の問題。PMFと吹奏楽の乖離が深刻である。開かれたコミュニティをつくるきっかけづくりになれば。送り手と受けてのバランスが取れていない。

コロガル公園は大成功だった。単純に面白そうだから人が集まる。資料館に来る機会になった。家族連れで来られるような企画を増やす。

カッコいい入口よりも入りやすい入口にする。入ってみるとカッコよさがわかる。デザイン性より敷居の低さを重要視する。

次回は市民がどれだけ参加してくれる企画にできるかが勝負。子供からお年寄りまで。中高生が関われるワークショップを増やすべき。小学生は芸術の森美術館のプログラム「ハローミュージアム」等で美術館に行く機会があるが、中高生はあまりない。中高生のほうがいろんなことを考えられる。学校を休みにして行かせてはどうか。文化部だけの事業ではなく、教育政策の一環であることを示す。縦割りではなく市役所内の横の広がりを重視する。

○芸術祭が始まる前に期待していたことと経験した感想について

好きな作品は島袋道浩さん、真鍋大渡さん、カールステン・ニコライさんなどたくさんあった。一流の舞台芸術に出会えた。チ・カ・ホの使い方が難しいと思った。チ・カ・ホに柵があるのはやはり馴染まない。アーティストは自分の作品が触られたり、ちょっと壊されたりしても大丈夫という覚悟を持つ、そのかわり柵なしで見せる工夫が必要。チ・カ・ホを会場にしたのは市のエゴ。チ・カ・ホを活用するのは工夫が必要。

建築は「都市のかたち」と常に向き合っているが、アートは「都市のかたち」から解放されるべきもの。

建築家目線から言えばアートはバナキュラーなところから離れなければならない。芸術祭として音楽家をもっと呼んでほしかった。目に見えないアートの重要性。PMF やシティジャズがあるから音楽は別でいいや、というふうに見えた。いきなりまとめるのは反発を買うだろうが、いろんなコンテンツを芸術祭として吸収して大きな芸術祭にする。時間をかけてつなげていくしかない。個々のイベントの存続もかかっている。芸術祭によって札幌市の芸術事業が溢れていることが炙り出された。

個人的な意見だが、母がアーティストをやっている自分に対して優しくなった（アートに寛容になった）。会場アルバイトした経験から言えば、コネクションのない学生でも、インターンができる機会が増えるといい。マネージメント人材育成の観点から言っても適切な機会である。

連携事業グループインタビュー2

日時：2015年6月20日（土）

場所：SIAF ラウンジ

出席：小室治夫（札幌で語る〈近代〉実行委員会／写真展と上映会実行委員会）、山口哲志（ドラマチッククリエイション&エンターテインメント企画）

聞き手：大友恵理

オブザーバー：小田井真美、加藤康子

○出席者の活動

●小室治夫／岡部昌生フロッタージュ・プロジェクト 2014 札幌ラウンドテーブル「札幌で語る〈近代〉」、「自然史-北海道/福島/徳島+福島の光景」

出品作家である岡部昌生さんと露口啓二さんをフォローする企画を連携事業として開催した。

札幌市資料館で開催した ラウンドテーブル「札幌で語る〈近代〉」は、福島からの一時避難者やジャーナリストも含め、約 50 名の参加があった。岡部さんの福島のプロジェクトは近代化という部分で SIAF に重なるものがあるから、もっと掘り起こそうと考え、はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会に呼びかけて実現した。福島県も炭鉱をいくつも持っていて、近代化の歴史において北海道と共通点がある。岡部さんの作品を紹介し、意見交換しながらみんなが書いた手書きメモがどんどん蓄積された。ゲストの港千尋さん、菅啓次郎さん他、世界各地を動いて来た人達が集まったのラウンドテーブルだから、たとえ外国人がいなくても世界の様々な国の話が出てくる。こうした事業もある種の国際交流・文化交流と考えている。SIAF も国際展という名目でやっている限り、“国際展”であることを意識的にやってほしい。

「自然史-北海道/福島/徳島+福島の光景」展は、大友真志さんと共に企画した。福島から若手映像作家である岩崎孝正さんも来て、トークイベントも充実した内容になった。この企画もまた福島に関わっている。露口さんの福島のシリーズは SIAF への参加をきっかけに展開したもの。「自然史」に福島の写真がどうしても必要という露口さんに、四方幸子さんが岩崎さんを紹介したことで、福島の地元の人しか入れない地域を撮影することができた。露口さんは先日も岩崎さんの協力の元、福島へ撮影に行って、そこに四方さんも入って、今も連関しているのが素晴らしい。つまりこれをきっかけにネットワークが続いていることが大切。アンケートにも書いたが、高いレベル意識で、作家や知識人との知的交流と出会いがあり、これからの北海道文化の展開の可能性に繋がるネットワークができたと思う。

岡部さんにしても、次回あいちトリエンナーレで福島のプロジェクトを広島の被爆 70 周年や沖縄へつなげようとしている。そうすることで何となく各地が全部つながっていく。連関していくということが素晴らしいと思う。人の水脈のようなものであり、それを収穫・成果と思っていただきたい。

また、若手が展開するよう年寄りも協力的になるべき。浅田彰さんも「田舎根性は出さずに」と語っていたが、新しい世代がどんどん出て来て、他の地域につながり、世代を超え、横断してつながっていくような、

世界に飛び立つ人を育ててほしい。

●山口哲志／オリジナルポストカード展「+P9」

オリジナルポストカード展「+P9」（以下、「+P9」）は、昨年で 15 年目を迎えた。全 180 チーム、作品数 1800 種類、出品者数およそ 350～400 名。出品者層は高校生から 70 代ほどまで幅広く、アマチュアからプロまで様々。10 日で来場者 3,000 人。販売枚数 4500 枚ほど。開催後、ミライスト・カフェにブースを設け、良かった作品の生産・販売も行っている。2001 年にスタート、2005 年より現在の 4 丁目プラザで開催している。足を運びやすい会場と長年の開催が定着して常連客もついており、会場協力である 4 丁目プラザにとっても相乗効果がある。アートと同様に、展示会の敷居を下げ、観に来やすく、手に取りやすく、買いやすく、参加しやすいものとなることに狙いがある。

この企画の元々の趣旨でもあるが、イラストレーションの仕事のきっかけ、新しい作家発掘の場、出品者間の交流の場として貢献している。イラストの依頼を受けて作者に経験の少ない作者にはコーディネーションも行うことで、仕事をできるようになるための支援をする。

少しでも売れた時の嬉しさが出品者が継続的に参加するモチベーションになっている。ポストカードのフォーマットが同じであることから販売成果がシビアに分かり、出品者にとってはブラッシュアップにつながる。プロの出品者の中には価格や手間を気にせず制作を楽しむ人や自分の商品の手応えを見るアンテナの場と考えている人もいる。出品者は 20 代半ばが多く、約 8 割は女性。代表が女性の場合も多く、他のイベントを考えても、フットワークが軽い人には女性が多い印象を受ける。

広報は基本的に DM。インターネットもあるが、出品者によるそれぞれの PR がなによりの宣伝であり、口コミが一番である。新聞、テレビ、ラジオによる PR も行うが、毎年同内容で既に何度か取り上げられているため、マスコミでは取り上げにくいのが現実。

発展的な動きとして、東京でのポストカード展を開催している。開催する現地の人を巻き込むこと、観客になってもらうことが大切で、北海道から出品者を連れて行くのでは意味がない。ネット上の募集を見て九州・沖縄から申し込む人もいる。北海道での開催は年 1 回であるが、「ミュンヘン・クリスマス市」でクリスマスカードコレクションを実施。

長年実績のある「+P9」は SIAF の宣伝にかなり貢献したと言える。出品者への説明に SIAF の話も織り交ぜたり、ボランティア募集情報なども伝えている。芸術祭というと“ファインアート”のイメージが強く、デザインは関係ないように思われがち。イラストレーターに SIAF というものが伝わるのは大きい。

連携事業には「下品で最低 3」という企画も申請したが承認されなかった。性的表現の作品を含む企画で、結果は初めから予想していたことだったが敢えて申請した。周囲からは“そういうのもやるべきでは。”“なんで通らなかったの？”という意見もあった。展示内容は全体にポップなもので、観て皆でゲラゲラ笑うのが趣旨である。表現では直接的なものもあるがチラシには過激なイメージを掲載しないなどの配慮をしている。女性限定のイベントも行っている。

以前、500m 美術館でのコンペで都築響一さんの秘宝館展示しようとしたこともあるが、作者本人がまずいだろう考え実現しなかった。こうした表現が許容されない理由としては、500m 美術館が通行人に対してオー

ブンで不特定多数皆が見ざるを得ない状況だからではないか。昨年森美術館の会田誠展でも話題になったが、性的表現の作品に対して R18 指定をして対処する方法がある。アートだから許される／許されないといった問題を投げかけている。

○SIAF2014 についての意見・感想

全体にまじめな作品が多かった。全体として印象が薄かった。特にチ・カ・ホ会場は、アートウィークなど SIAF 以外のイベントとの違いがなかったように見える。天井の低さや通路についてなど制約も多く、非常に大変そうであった。

・展示と会場

地下歩行空間では、天井の低さや他都市と比べて貧弱な作りなど、構造的にとっても展開しづらい空間。事業の輪郭を別の部分で考えなければ厳しいところがある。「センシングストリームズ」とメディアアートだからセンサーものが多かった。作家のネタ被りが見受けられ、みんな同じように見えた。創造都市として、メディアアートやチ・カ・ホは必要だったのか？エゴはなかったか？

芸術の森会場は子どもが楽しそうで良かった。

札幌市資料館はアートと気付かずに子どもたちが参加できる場所になっていた。

インターネットヤミ市は馬鹿げていて良かった。会場にテレビ塔を使ったのもよかった。しかし来場者数はあまり伸びなかった印象。広報のあり方は課題である。

選ばれた各作家をフォロー・応援する体制が必要がある。せっかくゲストを呼ぶのであれば 1 つの展示だけではつまらない。トークショーもすべきだろう。内容は濃く、良いものであった。

札幌は広いので開催地域を広げられてもつらい。美術館ごとのギャラリートツアーのようなものはあったが、バスツアーもやってほしかった。昼食とグッズも強制的にセットにして会場を巡るバスツアーがあっても良いのでは。

・グッズ

買えないものが多かった。札幌には知恵のある人がいるのだから、巻き込んで上手く商品開発ができれば良かった。ひっかかりのある商品を作るべき。上手くいけば、愛知トリエンナーレのオカザえもんのように、面白くてはしゃげてゲラゲラ笑える良いものができる。キャラクターグッズには当たり外れはあり知恵と発想力が大切。

・運営体制

序盤から、SIAF の事業の立ち上がりが遅かった。早くに情報があって効率的に動けていたら成果は違ってきていたのではないだろうか。

構想力・構築力・実践力、そして経済力と全てを考えるためには、プロデューサーの力が大切で、プロデューサーが上手く動かなければ無駄なお金も出て行く。構想力が問題。シャトルバスも最初から無料であれ

ば良かったのに後手に回っている。事前に道外海外の大型展を調査していれば分かるところも多いはず。規模が大きくなるほど行程表／工程表や図面を含めたプロジェクトマネジメントが重要である。

市役所職員の異動は、経験を得た事務局の人材とそのノウハウを手放すことになり問題である。

・アートツーリズム

札幌市が観光文化的にアートツーリズムを推進するのであれば、札幌に芸術に触れるためにやってきた人々のために、さっぽろ天神山アートスタジオのような滞在施設を増やすべき。芸術の森やアルテピアッツァ美唄にも宿泊施設がなく、滞在施設不足を感じる。温泉を掘って宿泊施設にするくらいの思い切ったことをしてもよいのでは。観光の目線でどうやって札幌を楽しむか、もっと新しいことがあっても良いのではない。また、早いうちに市と旅行代理店が連携を図ればアートツーリズムも上手くいったはずであろう。わざわざ北海道に来た人に芸術だけでなく様々な面で満足してもらえるよう、もっと知恵を出すべき。

・広報

ポスター・チラシ・DM 等、SIAF のデザインはカッコ良いがキャッチするつもりのないツールだった。人が手に取りたくなるものも作るべき。ただ並んでいるだけでは埋もれてしまう。どう目立つか意識しなければならない。

たとえ作品の内容が良くても、宣伝が有効にできなかったことで集客につながっていない部分もあるのではない。海外からの観光客も多く、絶好のアピールの場となる雪まつりで幟を出していないとか宣伝ができなかったことは痛手である。前哨戦、プレイベントを行うなどしてイベントを盛り上げる・認識を深める・ファンを増やす必要があり、戦略的に何かをすべきであった。

告知のタイミングは重要。市の他イベントと上手く連携できないのか。例えば SIAF 会期中に開催されたオータムフェストで饅頭を配る。大通公園から見えるジャンプ台の芝を利用した広告を作ればチラシを撒くより効果が高いはず。ビルの垂れ幕ではデパートと変わらないのでやる必要はない。意味がわからなくても“そこになぜそれが!?” というインパクトが宣伝になる。Twitter での拡散が期待される。頭の柔軟な人を集めての検証や構築が必要。

真面目過ぎなのでは？ 良し悪しは置いておいて、例えば熊牧場の CM のように話題になるものをつくるのが大切。市税を使って何事だという人もいるかもしれないが、目立たないものを作ることとどちらが良いだろうか？

・連携事業への対応

連携事業のチラシコーナーについて。連携事業はそれぞれにチラシを作るので、紙の柔らかさも違うし、サイズも A4 からポストカードサイズまで様々。チラシコーナーの仕様にサイズが合わなかったりたわむチラシがあった。チラシが乱れていたらこまめに直すような配慮がなかった。複数サイズに対応する棚を用意する、もしくは事前にチラシコーナーのサイズ指定をするなどしてほしい。

・市民への普及効果

SIAF への関心を他区域にも広げるために、何か区対抗イベントを行ってはどうか。自分の区が最下位だという情報をきっかけに“え、なんで!?”と知らぬ間に巻き込まれていく。そのような発想が必要ではないか。

イベントに対する意見や感想は、考え方や価値観の違い、ズレがあって良い。他者の意見が加味されていない自分だけの価値観を見つけ出し、楽しんだり喜べたら良いのではないか。

・その他

まずこの SIAF をはじめたということが大切。一度開催したことによって、どうしたら良いか議論ができる。

アマチュアや学生が自分を売り込める機会として、デザインフェスタを開催してほしい。その際、さっぽろ天神山アートスタジオや小学校の体育館でもいいので、宿泊施設と合同で制作できる作業場を提供してほしい。北海道だけでなく全国からの参加を想定したイベントを構想してほしい。随分前から望まれていながら取り組む人がいない。

チ・カ・ホは芸術家の会場としては適さないがアマチュアには向いている。あの空間は特性として向き不向きがある。市民に主導権を渡すことで“何か変なもの”という空間が作り出せたら良いのではないか。路上アートなど。営利活動もできるので可能性が大いにある。アーティストが真剣に取り組むものとは別に、アマチュアあるいは気軽なことを行うアーティストが楽しそうにやっているのも大切である。

以上、ヒアリング及びグループインタビューおわり。

* ヒアリング及びグループインタビュー調査にご協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

③ 札幌（地域）の SIAF2014 の受けとめかたに関するレポートと資料集

作成：小田井真美(SIAF2014 チーフ・プロジェクトマネージャー)_2015.08(2016.01 加筆)

■SIAF2014 のしかけによる活動（参加型コンテンツ一覧とその後の展開）

企画検討が始まった時からのゲストディレクター坂本龍一の方角性を明確に表しているのが、札幌国際芸術祭 2014 ドキュメント（記録集）「人と自然が響きあう都市のかたち-ECHO OF URBAN FORM：PEOPLE / NATURE」あとがきにある一文である。「**日常的なアートへの接し方、そして市民による自主的なプロジェクトが続いていけば、それは今後の SIAF のための大きな核になるのではないか。何より大事なものは、高いお金をかけて海外の有名なアート作品を一定期間展示し、フェスティバルの閉幕とともに何事もなかったかのように日常に戻ってしまうというのではなく、市民の日常の中にアートが根付いていくことのだから。**」これは札幌国際芸術祭事業構想でも唱われた事業方針、とりわけ「創造都市さっぽろ」の象徴的事業としての位置づけを受け、坂本の SIAF2014 に対するディレクションが示されているのだが、事業運営現場においては常に上位概念として意識され、強調された点である。各コンテンツの企画内容、多彩な関連プログラム実施経緯や連なり、運営手法に至り細部まで色濃く反映されている。

「みんなでつくろう！札幌国際芸術祭」のスローガンの下、SIAF2014 公式コンテンツ 38 事業中、参加型コンテンツ（SIAF2014 企画チームまたは参加アーティストからの提案を受け、企画・運営など当事者性をもって関わる取り組み）の事業数は 24 事業である。下記、参加型コンテンツの一覧に、事業後、独立ないしは自発的に継続実施されているまたは派生ないしは連動した動きが確認された事象 12 件について記述した。

* SIAF2014 参加型プロジェクトについては、札幌国際芸術祭 2014 ドキュメント（記録集）第 2 章「一人ひとりの創造性を引き出す試み」にいくつかのプロジェクトが取り上げられ詳細が記録されている。初版は 2014 年 12 月発行された。

* 札幌国際芸術祭 2014 開催報告書（実行委員会編）は、2015 年 3 月に発行された。

* 主にデスクトップリサーチによる資料を添付した。

* 「創造都市さっぽろ」については、文末に注釈として札幌市の方針を転載し、別添資料を示した。

* 終了後に札幌地域で展開が確認できていないプロジェクト及びプログラムはグレー文字で表示した。

資料① 「創造都市さっぽろ (Sapporo ideas city) 宣言」

<http://www.city.sapporo.jp/kikaku/creativecity/creativecity/index.html>

【SIAF2014 参加型プロジェクト（実行委員会の分類より）】

* 調査時点で実施後のストーリーを見受けられなかったコンテンツ名はグレーで表示した。

* 転載コメントはイタリック体で表示した。

① アート×ライフ

①-1. COMMUNE「ブラインドブックマーケット」

COMMUNE（デザインチーム）は、SIAF2014 閉幕後にオフィスとオルタナティブスペースを札幌市内にオープンさせ、地元のクリエイティブクラスの新しい活動拠点として展開している。参加プロジェクトの暮らしがた冒険家とも共同で活動を行うなど。

①-2. エキソニモ「DesktopBAM」

①-3. 深澤孝史「とくいの銀行 札幌」

SIAF2014 の開催前から始まった活動は、アーティストが常駐する形で閉幕まで毎日行われた。第三者が参加をする前提でプロジェクトが成立するものであるのと、プロジェクトの運営そのものにも多くのボランティアが常連として関わり長い期間の活動を支え、市民ボランティアのコアなグループ、派生するイベントで生まれた人的交流など独自のコミュニティを形成した。閉幕後もとくいの銀行を経て生まれたグループのメンバーが、札幌市内の他の文化芸術活動のポジティブな観客、参加者となっている。アーティスト自身にも SIAF2014 への参加を機会に縁が結ばれ、現在は札幌に居を構えている。

＜開催報告書（実行委員会編）より：「他都市への波及」とくいの銀行 札幌が契機となり、SIAF2014 閉幕後に京極町（北海道虻田郡）の地域福祉実践計画に計上され、「とくいの銀行 京極支店」が町の取り組みとして開設された。＞

資料② SIAF2014 市民ボランティア 永井雅人さんの Facebook 投稿より

札幌国際芸術祭 2014 とその後に続くアートプロジェクトに関わっていく中で感じたこと。

2014 年 10 月 30 日 13:07 さて、昨日で 2014 年 09 月 28 日に札幌国際芸術祭 2014 が閉幕してから一ヶ月となりました。未だに深澤さんや谷くんと関わっていて次なる「するがのくにの芸術祭 富士の山ビエンナーレ 2014」の作品に協力していることを考えてみると、「札幌国際芸術祭 2014」に始まり、続いて「メディア芸術祭 + 勝帯広展」、さっぽろ天神山アートスタジオで行われた「天神山文化祭」、そして現在直接ではないけれど、間接的に関わっている「するがのくにの芸術祭 富士の山ビエンナーレ 2014」…あれ、札幌国際芸術祭 2014 に参加していただけなのに、気付いたらアートプロジェクトなるものに関わりっぱなしの状態。

絵画を中心とするアートプロジェクトであれば、おそらく私が関わるようなことはなかったとっていて、現代のテクノロジーを活用して、いわゆるメディアを含むアートプロジェクトというものだからこそ、こんなに関わってこれたのであろうと思う。そして、メディアを含むといっても、アーティストやキュレーター自身が想像以上にそれらのメディア的な技術を持っている技術者の方とうまくパイプをつなぐことができていないのかなと思い、行ったことはないのだけど、YCAM(山口情報芸術センター)のような施設や環境がパイプをつなぐ役として一役買っているのかもしれない、そしてそういう施設や環境が札幌をはじめとして全国に必要とされているのではないのだろうか。

幸い私には何人かのそういったテクノロジーに関する才能を持った方々がネットでの繋がりを始めとして存在していたため、今回の作品への協力を依頼する上で、どなたに頼もうか悩んでしまうぐらいであった。結果的には中学生時代の頃からブログや Skype といった環境でつながっている方に依頼して協力していただけることになりました(何度もお会いしようかなと計画しているのだが一度も会うことができていない)。

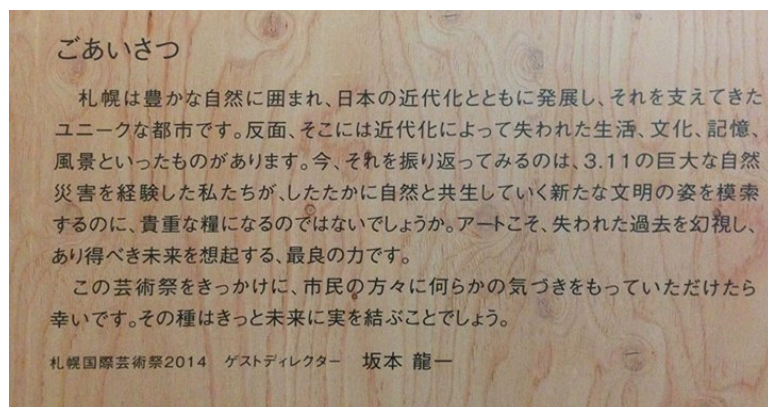
理由としては、もっと技術的にも優れていて、より高いレベルのものを短期間で作り上げるようなことができる人が何人もいたけど、同年代なこともあってそのような経験も浅く、そして浅いからこそ「こういったアプリはこうあるべきだ」というような固定観念的な物を持ち合わせていない人が作るアプリだからこそ、出来上がったアプリに自由度があり、技術的に優れているものと言えなくても、このアプリの制作経験が今後にきっと役に立つと考え、そして最初話した時には知らなかったのだけど、位置情報を使ったアプリを作成してみたいと思っていたようなので、絶好の機会だと思って今回は「Prioris Application Works」さんに依頼することにしました。

メディア芸術というものがこれからもっとより普及していくために、そして多くの人に感動を与えるものになり得るには、より多くのアーティストがメディアに関するテクノロジーを持つ方とつながり、協力しあうことが、これからの発展のために必要なことであり、これからメディア芸術に興味のある者が率先して実現に向けて努力しなければならないのだ。

札幌国際芸術祭 2014 が終了してから一ヶ月、この芸術祭に関して書くべきか、どうするべきか悩んでいました。しかしながら、札幌国際芸術祭 2014 では終わらずにアートプロジェクトに関わっていく中で感じた、メディア芸術の更なる発展のためにこれからやるべきであると考えている事をここに掲載します。

芸術祭が始まった 2014 年 07 月 19 日以前から関わっていただいている方には最近の投稿が「？」な状態であると思いますが、今後私は私がとくとしている“テクノロジー”の分野の人々と、今回関わっていく中で出会った“メディア芸術”に関わる人々の双方とを結んでいくことも新しい活動として行っていきたいと考えています。

画像は札幌市地下歩行空間内にて掲載されていた「ごあいさつ」。芸術祭で得られた何らかの“気づき”を未来で実を結ぶために、そして次回開催予定の 2017 年に向かって歩みをすすめていきましょう。坂本龍一氏の文章なのですが、何故かウェブサイトには最後まで掲載されることはありませんでした。



①-4. IDPW「インターネットヤミ市 4 in 札幌」

同プロジェクトには、札幌市内のサブカルチャーの担い手、クリエイターが多く参加した。その後の展開については引き続き調査が必要。

①-5. 「サッポロ・エホン・カイギ」

とくいの銀行と同じく、コアな運営ボランティアのグループを生んだ同プロジェクトで完成した「大きなエホン」は、閉幕後にさっぽろ天神山アートスタジオに寄託されたことを記念して読み聞かせイベントを開催、市民ボランティアが再集結する機会を創った。現在も同施設内のキッズコーナーでだれでも閲覧できるよう公開しており、子ども連れの利用者に活用されている。

②YCAM InterLab+五十嵐淳「コログル公園 in ネイチャー」

③暮らししかた冒険家 札幌の家

ゲストディレクターが、参加アーティストとしてまっさきに参加を要請したのが暮らし方冒険家の二人であり、ゼネラルプロデューサーは「新しいアーティスト・イン・レジデンスの姿だ」と評しこのプロジェクトの参加を迎えた。坂本が伝えたかった「生きること、暮らすことがアートだ」というメッセージを体現する活動を行った。暮らししかた冒険家は SIAF2014 開催前 2014 年 5 月から、ひとりの生家を両親から借り、その戸建て住宅をリノベーションしながら、また自分たちの暮らしに「必要な人」とつながりながら本格的に札幌市内で暮らし始めた。閉幕後に夫妻には第一子が誕生し、そのまま札幌在住を続ける。現在は、展覧会を市内のデザインショップで開催、自給をゆるやかに実践する農業のプロジェクトを地域の仲間と展開するなど生活と活動の拠点を札幌に移した。彼らの移住をきっかけに、札幌市内のクリエイティブ人材との共同活動が始まっている、また、北海道、札幌以外から新しい人の往来が活発に起こっている。

④プロジェクト FUKUSHIMA「フェスティバル FUKUSHIMA! 北 3 条広場で盆踊り」

＜開催報告書（実行委員会編）より：札幌市北 3 条広場で行われた「フェスティバル FUKUSHIMA! 北 3 条広場で盆踊り」が、札幌駅前通地区活性化委員会により 2015 年 8 月に再び開催されることが決定した。＞

SIAF2014 での実施から、市民オーケストラの参加が 200 名に増加、2014 年度にも設置されたさっぽろ天神山アートスタジオの「大風呂敷工場」と、2015 年度には新たにチ・カ・ホに設けられ、SIAF2014 市民ボランティアが縫子、参加者として閉幕後も継続的に関わる（参加する）受け皿として機能している。

パブリックプログラム（実行委員会の分類）

①国際公募

①-2. 札幌資料館リノベーションアイデアコンペティション

①-2. 都市空間のサウンドコンペティション

②SIAF2014 アクティビティ拠点プロジェクト

＜開催報告書（実行委員会編）より：札幌市資料館を市民交流、情報発信などアクティビティの拠点とし、会場を巡るきっかけづくりやSIAF2014の理解促進を目的として活用した。＞

同施設にSIAF2014の参加型のコンテンツを集め、会期中に最も動きのある会場としてにぎわいを創った。札幌市資料館はもともと市民の生涯学習活動発表の場として稼働率の高い公共文化施設であるが、利用するのは特定の市民に限られていた。SIAF2014のアクティビティ拠点として活用されることにより、広く市民や観光客に歴史的建造物としての価値、市内中心部におけるパブリックな“よりどころ”として新しい価値が見出され、次期SIAF開催に向けた取り組みの象徴として、2015年度から「SIAF ラボ」として建物の一部をリニューアル、多彩なアウトリーチ事業を展開している。

②-1. ボランティアセンター

＜開催報告書（実行委員会編）より：ボランティア活動を運営するセンターを設置した。＞

登録者数1000人を超えるボランティアを各会場に手配するための特設運営チーム。会期中は、ボランティアや各会場のリアルな状況を把握し、トラブルシューティングを含むボランティアのケアに奔走するなど会場運営の中核として市民ボランティア間の交流促進にも大きく貢献した。

資料③「ボランティアセンター」一條亜紀枝（SIAF2014 ボランティアセンター・リーダー）レポート

その日、ボランティアセンター（以下、ボラセン）はカオスであった。ボランティアスタッフ（以下、ボラスタ）からの集合場所がわからない、バスを間違えて遅刻しそう…などの緊急連絡、会場担当者からのボランティアの某さんが来ないとの報告、翌日以降のシフト確認の問合せなど、電話とメールの嵐が吹き荒れ、モエレ沼でSIAF2014が華々しく開幕したとき、私たちは混乱を極めていた。原因は準備不足。いや、準備はしたが、情報の管理・連絡網など、あらゆるシステムが完全ではなかったのである。

ボラセンはトリアージ（緊急度による優先順位の決定）の実践の場となった。電話一本で状況が変わる。数分前までは2週間後のシフト組みが最優先事項であっても、翌日の欠席連絡を受けたとたん、代打探しが最優先となる。合言葉は「ボラスタが活動しやすいように」。それを判断基準とし、ベストをめざしてベターはクリアできたと信じている。

しかし、常にジレンマを抱えていた。目の前のことに追われて、原因の解決に手が回らないのだ。時間がなくて会場も見えていない。致命的だ。ボラスタに寄り添えるはずがない。現場を見る必要があると痛感したのは、あるボラスタの話がきっかけだ。その人が会場で見たものと、ボラセンで知りえる情報がかけ離れていた。その後、会場で活動して、現場でしか見えないことがあると知った。さらに、ボラスタへのケアが不十分だったことと、どれだけ助けられていたかとも思い知る。あるアーティストが、ボラセンを「芸術祭の心臓」と言った。SIAFという生き物に絶え間なく、心あるボラスタを送るからと。ずいぶん軟弱な心臓だったろう。でも、ハートフルなボラスタに支えられ、ハートウォーミングな話題にこと欠かない場ではあった。いまでも交流が続くボラスタがいる。この友人たちが、私をSIAFからも札幌からも離れがたくさせる。こうした縁が、きっとたくさん生まれただろう。

②-2. SIAF 編集局

＜開催報告書（実行委員会編）より：各プログラムのタイムリーな情報を、ボランティアや地域の子どもたちが記者となって取材。「サカナ通信（かわら版）」を発行した。また、ブログやツイッターなどで日々の活動や口コミ情報などを随時発信した。＞

この場所が集っていた市民ボランティアの発案で市民主導の「アートカフェ＊『SIAF2014 に連動して起こった市民主導の活動』」が誕生した。サカナ通信ブログ <http://siaf2014volunteer.tumblr.com/>

資料④ 発行印刷物（サカナ通信 vol.01-04）データ

資料⑤ ○SIAF 編集局・サカナ通信の取り組み（山田愛衣さんの説明）

「私が関わってきたサカナ通信の紹介もさせていただきます。資料館内にある SIAF 編集局というところで、公式の発信だけではなくて参加者目線の楽しみ方をみんなで共有できるようなコンテンツを目指して作りました。メインメンバーが大学生だったんですけれども6名ほどで、サカナ通信の制作のほかに twitter の配信を始めたり、来場者の会場案内、ブログの更新、あと「サカナ通信 today」という名前で毎日アーティストや参加者の方々に日報みたいな感じで芸術祭の感想を聞いたり、あとアートカフェの開催を行いました。記事はボランティアスタッフの体験レポートや、来場者の声をメインとして、公式では取り上げられないような関連イベント、あとはボランティアスタッフにインタビューなどをしました。このサカナ通信の発行の目的のひとつは、観客目線の情報を発信していきたいということ、もうひとつは参加者やボランティアが情報源になることで当事者意識を高めてもらいたいということでした。自分の感想は、新聞や雑誌に掲載されるとみんな嬉しいと思うんですけど、その事柄についても愛情が湧くと思います。それを感じてもらうためにインターネットの配信だけでは弱くて、やっぱり紙の発行物に自分の言葉が選ばれて掲載されたという感覚が必要だと思って、紙での配布をしました。実際制作してみて感じたことは、公式だけだとどうしても内容を各会場広範に伝えなくちゃいけなかったりとか、上に内容を確認してもらうのに時間がかかったりっていうのがあるんですけども、サカナ通信や SIAF 編集局はいちボランティアスタッフからおすすめ情報として作品の感想とか、芸術祭に直接関係ない観光情報とかもある程度自由に発信することができたので。あとは、ボランティアや参加者が常駐スタッフより芸術祭をよく見ている人も多くて、その人たちに広報に協力してもらったりっていうことも助けられました。あと長い期間中のイベントなので、みんなで育てていくという考え方があると楽しんでもらえるのではないかと想い、いろいろイベントを企画したりしました。以上です。（ACF フライングフォーラムの記録文字起こしデータより）」

②-3. 連携事業ワークショップルーム

連携事業のうち特に公式コンテンツとの親和性が高く市民主体のワークショップ形式で実施された企画「札幌ハルニレプロジェクト」「TPP ミュージアム」の会場として提供。ワークショップの成果展示を行った。

②-4. 旅プロジェクト

主体的に参加した方にヒアリングを実施。（資料編に収録）

③ オープニングプログラム

③-1. カムイノミ

＜開催報告書（実行委員会編）より：SIAF2014 で実施した先住民族アイヌの神事カムイノミの（実施記録）写真が、2015 年 4 月に開館する北海道博物館に展示される予定である。＞

これまでアイヌ民族の伝統的な行事、神事は、北海道内の部族地域ごとに執り行われていたが、監修を行った北原次郎太氏（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）により、北海道内のアイヌの方々が部族地域を超えてひとつの神事のために集結した稀な出来事であったことから、記録保存のため実施記録写真が所蔵されることとなった。また、神事が執り行われた場所に展示されていた参加アーティスト島袋道浩「一石を投じる」の巨石はアイヌ民族に縁の深い二風谷地区から運び込まれてきたことから、島袋氏の作品とカムイノミの神事とが関連づけて議論されることがあったが、石の設置場所と神事の場所が同じ「北 3 条広場」だったのは、始めから“特定の意図をもって“計画されたものではなく SIAF2014 のコンテンツの組み立ての中で偶然起こったことであった。

③-2. 旋回するノイズ

＜開催報告書（実行委員会編）より：オープニングプログラム「旋回するノイズ」で「社会福祉法人札幌三和福祉会」が制作した鳩に取り付けた笛は、その後、同団体によって商品化され、会期中にグッズとして販売されたほか、会期後も地下鉄大通駅コンコースにある「元気ショップ」で販売されている。＞

③-3. ポエムサンフォニック

④ クロージングプログラム

④-1. SIAF2014 ファイナルトーク

SIAF2014 会期最終日に開催された、主に企画を担ったメンバーと札幌地域のアート関係者による公開形式の振り返りイベント。このイベントの終盤、聴衆との質疑応答の中で次回 SIAF 開催に向けてなにか作品を残したい、残すのであれば北 3 条広場に設置されている「一石を投じる（島袋道浩）」作品が好ましいという市民の発言が発端となり、大通 13 丁目にある札幌市資料館前庭に作品が移設され、SIAF2017 まで展示を継続する展開に至った。

資料⑥ 資料編（本誌）118 ページに、SIAF2014 公式振り返りイベント開催記録（コメント集）として掲載

⑤ 2014 年度プレフェスティバルイベント

⑤-1. トーク & レクチャー

⑥ 2013 年度プレフェスティバルイベント

⑥-1. 第 1 弾 札幌の芸術文化史を知ろう！（札幌の芸術文化史公開トーク）

⑥-2. 第 2 弾 札幌の未来へ向けたビジョンを聴こう！

⑥-3. 第3弾 札幌国際芸術祭にもっと関わろう！

札幌の開拓以前からまちを見守り続けていた樹齢300年（推定）の「ハルニレ」の老木が、現在も札幌市民ホール前庭にある。このハルニレを生きた札幌の歴史博物館を見なし、札幌/北海道の開拓の歴史を樹木から眺めるフィールドワークと座学で構成し開催した。このプログラムをきっかけに「市民ホール前のハルニレのことを広く伝え、このハルニレの子孫を残そう」という市民活動が始まった。現在も「札幌ハルニレプロジェクト」として、種から苗木を育て、大通高校の敷地で育てるなど市民主導の活動を継続中である。

資料⑦ SIAF2014 開催報告書（実行委員会編）「プレフェスティバルイベント」P25-28

SIAF2014の三つの事業カテゴリー「エキシビジョン」「パフォーマンス/ライブ」「プロジェクト」のうち、エキシビジョン、プロジェクトの二つのカテゴリーを中心に企画内容、作品に由来する関連イベントを会期前（2014.06）から会期終了までに、合計130事業実施した。

資料⑧ SIAF2014 開催報告書（実行委員会編）「プログラムスケジュール一覧」P20-24

参加型コンテンツとして提供されたものから派生した動きは筆者の簡易な調査ですぐに回収できた事例ばかりだが、半数にその後の動きが見えた。調査を深めればもっと多くの事例が発掘されるのではないかと考える。この感触からもこれから追跡調査は必要だと思われるし、経年調査と記録はSIAFの波及効果を計る有効なデータになる。同時に、調査結果は事業運営サイドには継続の励みになるはずだ。

そのほかの動き

SIAF 関連施設「さっぽろ天神山アートスタジオ」2014年5月にオープン。

SIAF2014 開幕に合わせてオープンさせた創造的活動を支援する滞在型文化芸術施設「さっぽろ天神山アートスタジオ」は、市民と文化芸術活動の交流を図ることを目的にしている。3年に一度開催されるSIAF事業をハイライトとして、さっぽろ天神山アートスタジオにおける「通年の活動と開かれた場」とのコンビネーションは、ほかの芸術祭事業には見られない札幌の芸術祭事業の特徴でもある。

施設がオープンした5月30日から、SIAF2014参加アーティストらの滞在、プロジェクトFUKUSHIMAの大風呂敷工場の活動が始まり、開催中を通じてSIAF2014に訪れた全国のアート関係者の滞在拠点となった。

さっぽろ天神山アートスタジオは、もともと宿泊施設だった施設の機能にアーティスト・イン・レジデンスのしくみをかぶせる運営設計をおこない、現在も地元札幌と国内外の文化芸術活動に携わる人のリサーチや制作の拠点として国際的に周知が進んでいる。同施設は、札幌市の創造的活動に対する公的支援の一環であることから、SIAF2014事業開催を契機に活動分野を問わず、美術、演劇、音楽、文芸など広く札幌のうちと外の往来や創造的活動の実践者同士の交流を促す新しいハブ施設として活動インフラの機能を発揮している。また、近隣地域、豊平区との共催や連携事業を展開するなど活動に対する地域の認知が広がっており、オープン初年度から、地域と同施設との共同開催の事業を実現させるなどユニークな運営が注目される。

■さっぽろ天神山アートスタジオ <http://tenjinyamastudio.jp/>

以上が、SIAF2014のしかけによる活動（参加型コンテンツ一覧とその後の展開）のうち、実行委員会が主催、直接運営したコンテンツに関するレポートである。

⑦ 連携事業

札幌はプロアマを問わず市民による文化芸術活動が活発に行われていた土壌があり、その上で札幌国際芸術祭事業が本格的に行政事業として起こった重要な経緯のひとつに、市民による自主的な国際展開催（プレビエンナーレ）がある。こういった経緯の中で、SIAF2014 開催テーマを共有、開催時期を同じくする二つの形の連携事業が実行委員会からの呼びかけに応じる形とはなったものの、もともとの地域の文化芸術事業者の気概でもって市民主導により札幌市内各地で実施された。

連携事業は、資金、企画ともに実行委員会からの提供はなく、すべて市民自らの働きによって実現した。多くは SIAF2014 実施以前から札幌市内を中心に活動する民間の文化芸術関係者らの自主的な企画である。

SIAF2014 事務局は会期中に、これら連携事業の広報協力を行った。

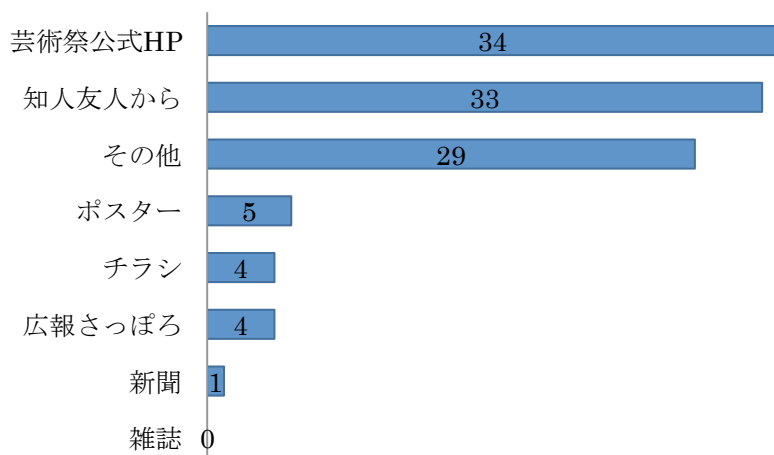
- ＊ 「連携事業」 SIAF2014 のテーマと親和性があり、企画や広報で連携を図ることが可能な市内及び近郊で実施する事業を「連携事業」とし、90 件の事業と企画の連動や相互の広報協力などを図った。
- ＊ 「同時期連携事業」 SIAF2014 の開催期間中に、共に札幌を盛り上げるため、文化芸術団体などが市内で開催する事業を「同時期連携事業」とし、69 件の事業と相互の広報協力などを図った。
- ＊ 連携事業及び同時期連携事業主催者（企画者）を今回のアンケート調査の対象とした。

資料⑨ SIAF2014 開催報告書（実行委員会編）「連携事業」 P29-32

■ SIAF2014 実行委員会実施アンケートの集計

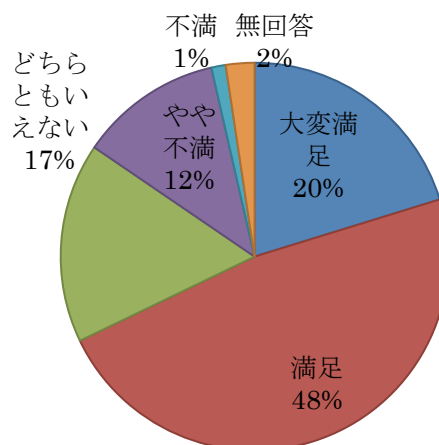
アンケート回答者数 84 名

○連携事業をどこで知ったか（複数回答可）



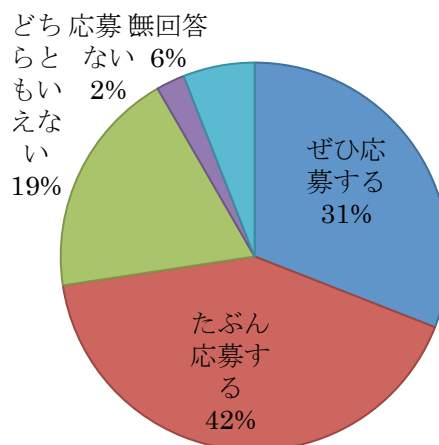
○連携事業はどうだったか

項目	度数	割合 (%)
大変満足	17	20%
満足	40	48%
どちらともいえない	14	17%
やや不満	10	12%
不満	1	1%
無回答	2	2%

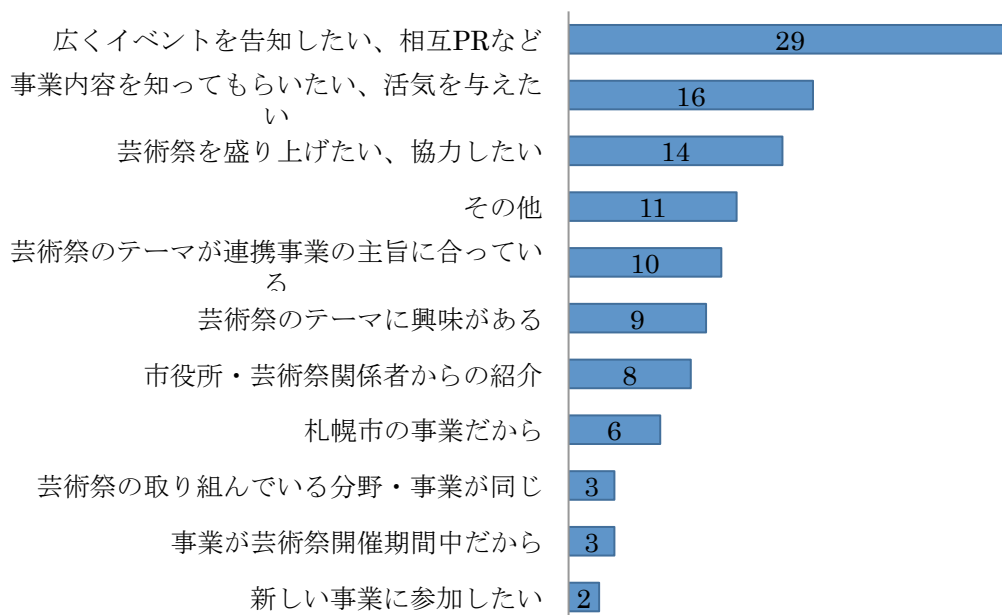


○次回応募するか

項目	度数	割合 (%)
ぜひ応募する	26	31%
たぶん応募する	35	42%
どちらともいえない	16	19%
応募しない	2	2%
無回答	5	6%



○連携事業に応募した理由



○芸術祭に期待することは何ですか（自由記述）

※ 自由記述の記載の仕方については、調査者である札幌国際芸術祭実行委員会によってまとめられた集計データにおける集計方法になった。回答を5の項目に分類し、件数と代表的な回答を記載した。

1, 芸術祭全体について（29 件）

- ◇ はじめは不満もあちこちから出るが、悪い点は改良して、回数を重ねて充実したものにしていって欲しい。
- ◇ 芸術祭が市民に根付いたものではなかった。
- ◇ 徐々に美術館やギャラリーに行く人の数が増えアートへの認知度があがればいいと思うので、続けて開催して欲しい。
- ◇ 現代アートに親しみのなかった層にも難解ながらある程度訴求できたテーマであったと思う。
- ◇ 初めは「芸術祭」と聞いても漠然としていて、関わり方がわからなかった。
- ◇ 多くの人が参加できる仕組みを作ることが必要。
- ◇ 次回は更に市民に還元できる、市民一体型の芸術祭になってほしい。
- ◇ 札幌では、諸事業に対して場当たりのことが多いので、芸術活動に関しては長期・中期的展望を示して欲しい。

2, 作品について（2 件）

- ◇ チ・カ・ホの展示はもう少し人の目を引くものがよかった。

3, 作家について（3 件）

- ◇ 海外からの参加作家作品を増やして欲しい。

- ◇ 会期中、作家自身による作品について話す機会があったのが良かった。

4, イベントについて (11 件)

- ◇ 市民参加型の事業がもっと多くあったほうが良い。
- ◇ 市民参加型でより良いものを見せるという事業が、もっと身近に、そして参加しやすいようなものになってほしい。
- ◇ イベントのバッチングがあったり、ツイッターでの告知が直前だったりした。

5, 広報について (25 件)

- ◇ 芸術祭について、チラシやポスター等で開催しているのは知っていても、どこで何をしているのかホームページを見ないと分からず、足を運びにくい状況だと感じた。
- ◇ もっと市民が参加しやすい内容で広報されると良いと思った。
- ◇ 個々の展示やイベントの質は高かったと思うが、芸術文化に関心の薄い層にもアピールする工夫が今後必要。
- ◇ 芸術祭の内容が具体的に伝わるような工夫が必要。

6, 事務局について (14 件)

- ◇ 現場に情報を把握しているスタッフが少ない。
- ◇ 事前の行程をもっと明確にわかりやすくしてほしい。

7, 市内・道内施設との連携について (1 件)

- ◇ 宿泊先と飲食店などとの協賛連携や独自のサービス連携があればよい。

8, 市内事業との連携について (4 件)

- ◇ もっと地元のコンテンツを引き上げるべきだ。

9, グッズ等について (2 件)

10, 地元のアーティストについて (3 件)

- ◇ 地元の芸術家が様々な形で参加するようにすべき。

11, その他 (6 件)

- ◇ 準備期間が短く、あわただしい取り組みになってしまったのではないかな？
- ◇ 結果や成果の報告が市民に届いていない。

○連携事業に期待することは何ですか (自由記述)

全回答

- ◇ 作品を出展された方たちに渡せる、チラシ及び入場割引券などがあつたらよかった。

- ◇ 具体的なメリットの詳細（事業一覧チラシの掲載時期、チラシへの掲載と申請時期の関係）について、事前を知っておきたかった。
- ◇ 札幌国際芸術祭本体と連携事業、同時期開催事業のそれぞれの違いが一般市民の方にはわかりづらいと感じた。
- ◇ 同時期開催事業という形であるが、微力ながらお手伝いできてたいへんありがたかった。
- ◇ 連携事業、同時期開催事業がきわめて多彩であり、市民の芸術祭の関心の向上、参加意識の高揚に大きく寄与した。
- ◇ 通年での連携をたえまなくおこなうことが、次の芸術祭の成功につながると思う。
- ◇ 相互に連携する内容が明確でなく、その手続きの仕方もわからなかったため、効果的な連携ができたか不明。
- ◇ 関連事業、連携事業、同時期開催事業の数が多すぎて、情報を処理・整理することが難しかったのではないかな。
- ◇ 同時期開催事業でも、目的に合う事業を選び、「セレクトさせた事業」を集めたほうが全体の魅力は増すと思う。
- ◇ 同時期開催事業に参加しているという手ごたえが、もっと感じられるよう盛り上げて欲しい。
- ◇ 一同に会して、それぞれの活動をアピールすると、お互いに刺激し合って有意義。
- ◇ 招待の共通チケットは、もっと余裕のある時期に送って欲しい。
- ◇ 芸術祭に関するチラシやパンフレットをいただければ、事業でも芸術祭の魅力を発信できるので、うまく相乗効果を発揮できるように取り組んでいきたい。
- ◇ 同時期開催事業に応募するメリットが何か欲しい。
- ◇ 連携事業と同時期開催事業の棲み分けが良く理解できなかった。
- ◇ 自分たちの事業がこれで良かったのか？あまり納得をしていない。
- ◇ 連携事業を今回よりも事前から計画し、大きなプロジェクトとして実施することで、多くの層への普及が可能。
- ◇ 連携事業としての取扱いには不満であるが、3年後の進化に期待したい。
- ◇ 連携事業となり、旅プロジェクトと連携できたことは非常に有意義な時間を過ごせた。
- ◇ 多種多様な連携事業が集まって興味はあったものの、気づいたら終わっていたりしたことがあったので、連携事業は音楽、パフォーマンスなどジャンル別に分かれていると、ホームページを見る方も検索しやすい。
- ◇ 連携事業のロゴは、中途半端に余白が残るので、その辺も気を使っていた方が良かった。
- ◇ 一般の市民が芸術祭に参加しやすくなったと感じたので、芸術祭に対してハードルを下げると言う意味でもとても良い。
- ◇ SIAF2017 では、本体事業としてできるよう、1095 日間、それを目標に表現を高めていきます。
- ◇ 不備な点はあるですが、次回に向けて改善していけば良くなることがほとんどなので、スタッフの皆さんには感謝している。
- ◇ もっと相互に交流や要望・検討の場があるべきなのでは？
- ◇ 準備期間に早めの調整を行い、SIAF との共通チケットやクーポンの設定など、より双方の事業に人が行き来できるような展開も検討していただきたい。
- ◇ SIAF と同じ札幌市関連の文化芸術事業について、民間の事業とは別のカテゴリーとして、連携事業の位置づけや手続き方法を検討した方が良い。
- ◇ 物理的空間としては共有できたが、関心を持って融合するには至らなかったのは、連携事業の弱さと思った。
- ◇ チ・カ・ホで行った特徴として、これまでに無い人の流れと出会いがあった。
- ◇ 「都市と自然」のテーマにあって、「都市の人が自然の思考と出会う」機会がくれた。

- ◇ 芸森からの周遊をいかに増やしていくかが課題。
- ◇ 芸術祭の基本プログラムで実施しきれない面をケアするようなプログラムを選び、芸術祭全体のボリュームを保つような仕組みになれば良い。
- ◇ 芸術祭を意識して、普段と異なった視点で展示会の企画の立案・運営を行うことができた。
- ◇ 連携事業というシステムを設けていただくことで、北海道全体の都市と芸術に対する思いや活動がレベルアップしていくと確信している。
- ◇ 第2回目以降も連携事業を継続して欲しい。
- ◇ 早い段階から広く連携事業を募ることで、次回以降があれば企画を練って参加させていただきたい。
- ◇ ハコレン事業に関しては今後もぜひ継続して欲しいが、人員を増やして運営を独立させるなどの工夫が必要。
- ◇ Web サイトでの告知等も含め、芸術祭と連携することでどのような意義があるのかがちょっと分かりにくかった。
- ◇ もう少しイベントを絞って、事務局と主催者が連携を取りながら広報を進めていった方がいい。
- ◇ 現場ではボランティアが1～2名だけで、その役割も分からず、ほとんど芸術祭と関係なく、自分たちでイベントをやっただけという印象。
- ◇ 公式カタログに少しでも連携事業の情報が載せてもらえたら、連携事業を企画する側としてはありがたい。
- ◇ 札幌、北海道のアーティストの参加率を上げるべきだと思う。
- ◇ 連携というのは公募ではなく、ある程度のクオリティや規模のある企画を、国際芸術祭側から選ぶ方が良いのでは？
- ◇ 単純に盛り上げるためのものは、同時期とかライトなもので良いと思う。
- ◇ ホームページ、マップ等で連携となっても、それによるメリットをあまり感じられなかった。
- ◇ 連携事業の代表者や担当者が集まってのシンポジウムや交流イベントを、会期中に1回設けると、SIAF関係者および連携事業参加者同士も交流が出来て、次年度以降の展開が活性化されたり、新たなプロジェクトが生まれたり、あるいは各自で抱えている問題意識や苦勞を共有する機会となる。

以上、実行委員会が実施したアンケート調査結果終わり。

⑧ 市民ボランティアの活動

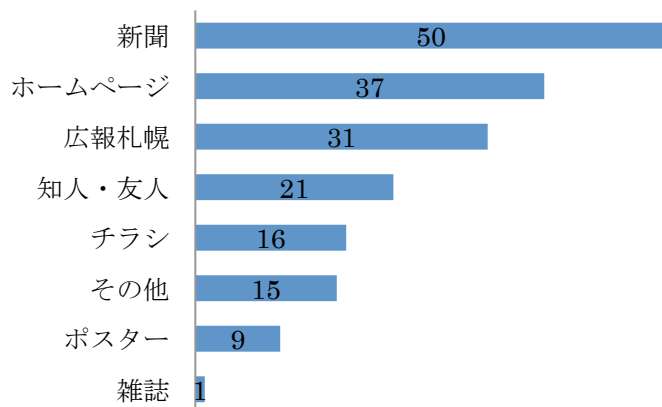
＜開催報告書（実行委員会編）より：会場運営（作品監視、会場案内など）、イベント・プログラム運営（運営サポート、入場整理など）、情報発信活動（かわら版発行など）を多くのボランティアが担った。ボランティアの待遇として、ボランティア保険（登録者負担なし）に加入するとともに、オリジナルスタッフTシャツ1枚とSIAF2014共通チケット一枚を進呈した。また全日活動を行う場合には昼食費相当分としてQUOカード500円分を支給した。●登録者1,319人（事前ボランティア38人を含む、会期中は1,281人）●会期中活動人数751人（58.6%）●活動参加のべ人数4,344人●男性：女性/23.0%：77.0%＞

札幌で開催される大規模な事業（ノルディック大会など）でも、事業運営のサポーターとして市民ボランティアが多く参加するという傾向があるとのこと。SIAF2014では、事務局の想定を遥かに超える登録者数があり、地域におけるボランティア活動の普及状況と新しい事業への関心を表すデータとなった。

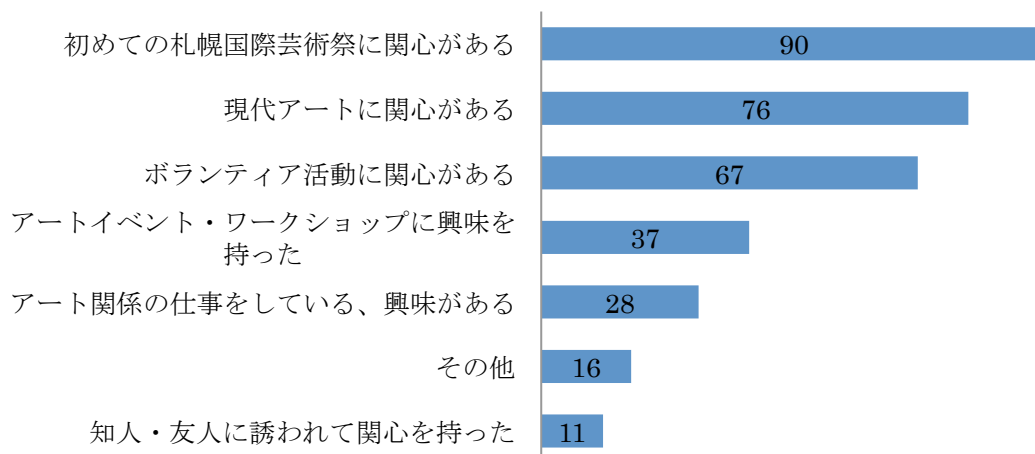
■ SIAF2014 実行委員会実施アンケート調査の事後集計

アンケート回答者数 150 名

○ボランティア募集を何で知りましたか（複数回答可）

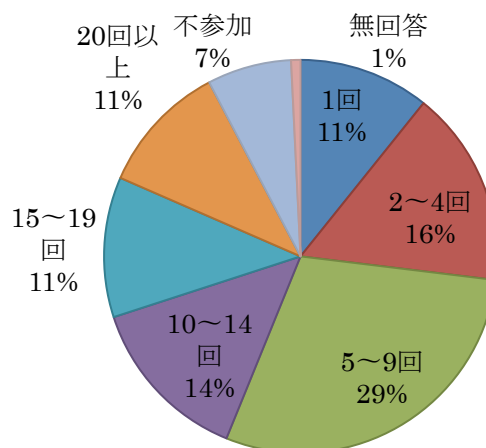


○ボランティアへの参加理由（複数回答可）



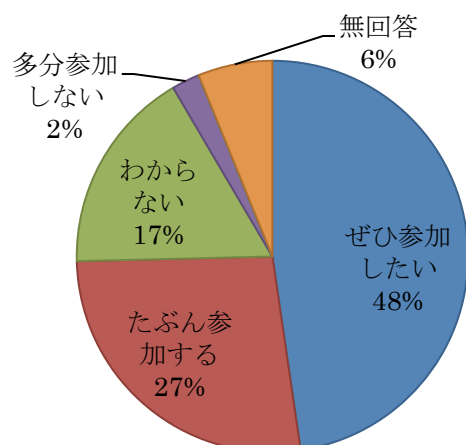
○活動回数

項目	度数	割合 (%)
1 回	14	11%
2～4 回	21	16%
5～9 回	38	29%
10～14 回	18	14%
15～19 回	15	11%
20 回以上	14	11%
不参加	9	7%
無回答	1	1%

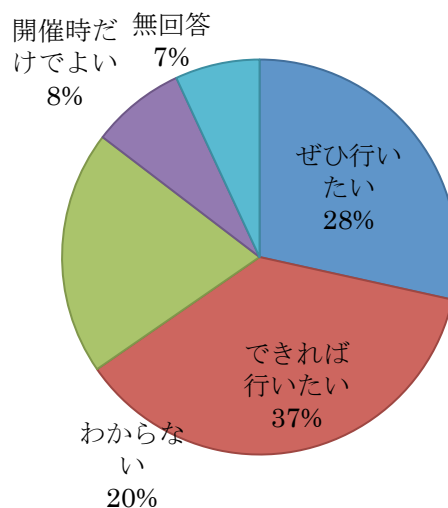


○次回ボランティアに参加したいか

項目	度数	割合 (%)
ぜひ参加したい	62	48%
たぶん参加する	35	27%
わからない	22	17%
たぶん参加しない	3	2%
参加したくない	0	0%
無回答	8	6%

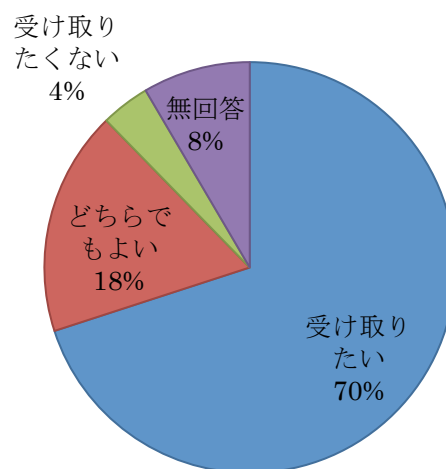
○継続的に情報交換やWSなどの活動をした
か

項目	度数	割合 (%)
ぜひ行いたい	37	28%
できれば行いたい	48	37%
わからない	26	20%
開催時だけでよい	10	8%
不明	9	7%



○今後も芸術祭の情報を受け取りたいか

項目	度数	割合 (%)
受け取りたい	91	70%
どちらでもよい	23	18%
受け取りたくない	5	4%
無回答	11	8%



○参加して良かったことは何ですか（自由記述）

※ 自由記述の記載の仕方については、調査者である札幌国際芸術祭実行委員会によってまとめられた集計データにおける集計方法になった。回答を9の項目に分類し、件数と代表的な回答を記載した。

1, 芸術作品に触れたこと、学べたこと（76 件）

現代アートと身近に接することができ、作品の理解が深まった。

2, ボランティア同士の出会い（14 件）

世代の違う方との出会い。

知り合いが増えた。

共通の会話が楽しい。

3, アーティスト・スタッフとの出会い（10 件）

アーティストと会えて、ますます現代美術が好きになった。

アーティストの生の声を聞いた。

4, 来場者・参加者との出会い・対応（14 件）

お客様にお礼を言われたこと。

観光客との交流。

5, 芸術祭との関わり（28 件）

芸術祭を運営側から見られた。

普段働けない場所で活動できた。

6, 地域の魅力を再発見（10 件）

静華亭を初めて知った。

札幌の魅力を再発見できた。

7, ボランティア活動そのもの（18 件）

参加することで自分も楽しめたとし、周りに芸術祭の面白さを発信できた。

日常では体験できないことを沢山体験できた。

8, 色々な人との出会い（31 件）

普段出会えないような色々な人々と出会うことができた。

9, その他（11 件）

自分もアートに取り組みたいと思った。

恩師との出会い。

○参加して困ったことは何ですか（自由記述）

※ 自由記述の記載の仕方については、調査者である札幌国際芸術祭実行委員会によってまとめられた集計データにおける集計方法になった。回答を 14 の項目に分類し、件数と代表的な回答を記載した。

1, 交通費の支給について（10 件）

芸森とモエレ沼は交通費を出した方がよい。

交通費の負担は重い。

2, ボランティア T シャツの支給について（3 件）

夏場では洗濯が必要であり、代え T シャツに苦勞した。

3, シフト時間について（7 件）

30 分前集合を含めて拘束時間が長い。

4, 休憩時間について（11 件）

会場によって、休憩室が無いとか、休憩の取り方や時間が違う。

5, 事務局やスタッフについて（29 件）

会場によって、監視や休憩時間などの指示が不明確。

6, 連絡体制（4 件）

電話連絡は用件を明確にして欲しい。

7, お客様への対応（21 件）

海外の方だと話すことが難しい。

作品についての説明が難しい。

8, 日程調整（9 件）

主婦は時間の制約がある。

最初に全てのシフトを出したためキャンセルが多くなった。

9, 気候（3 件）

屋外の監視で日焼けした。

10, 交通の便（1 件）

会場に行きづらかった。

11, 業務内容について（17 件）

座っているだけや立ちっぱなしな時があれば、仕事が無く暇な時があった。

12, ボランティア同士の関わり（3 件）

コアに参加している人達との壁を強く感じた。

13, 事前準備について（9 件）

作品に対しての質問が多く、事前研修や勉強会を実施した方が良い。

14, その他（3 件）

○札幌国際芸術祭について何か意見や要望があればお書きください（自由記述）

※ 自由記述の記載の仕方については、調査者である札幌国際芸術祭実行委員会によってまとめられた集計データにおける集計方法になった。回答を 8 の項目に分類し、件数と代表的な回答を記載した。

1, 会場運営方法の見直し（35 件）

会場や移動手段が分かりにくい。

すべての会場を結ぶシャトルバスがあれば良い。

2, 会場について（10 件）

会場が多すぎる。

展示空間が少ない。

会場ディスプレイの工夫が必要。

3, 作品・イベントについて（58 件）

親しみやすく子供向けのイベントが多くてもよい。

道内の作家がもっと参加して欲しい。

4, 広報関係（88 件）

告知をもっと工夫。

ワークショップやイベントの告知をもっと早くする。

公式ホームページやパンフレットが見つらい。

5, 周囲との連携（4 件）

市内のイベントや展覧会との連携強化。

6, 組織について（8 件）

幅広い分野での人材採用。

スタッフとボランティアの関係強化。

7, 開催期間（3 件）

開催期間が長い（2 件）

開催期間が短い（1 件）

8, 他都市・他芸術祭の連携（2 件）

全道の市町村とタイアップ。

○ボランティアの体制について何か意見や要望があればお書きください（自由記述）

※ 自由記述の記載の仕方については、調査者である札幌国際芸術祭実行委員会によってまとめられた集計データにおける集計方法になった。回答を 8 の項目に分類し、件数と代表的な回答を記載した。

1, ボランティア募集を工夫（8 件）

学生や定年退職者への PR。

2, ボランティア参加の特典を見直し（19 件）

交通費の支給。

ボランティア T シャツの複数枚提供。

昼食の提供。

チケット複数枚提供。

グッズの提供。

宿泊施設の用意。

3, ボランティアが参加しやすい体制づくり（18 件）

事前説明会の実施。

活動の具体的内容説明やロールプレイング研修などを実施する。

4, シフトの見直し（26 件）

お昼をまたいだ時間設定。

ショートの手シフト設定。

会場の集合は 15 分前で良い。

一日のうち数時間という設定のほうが良い。

5, ボランティア業務内容の見直しと適正な人員配置 (27 件)

監視だけでは退屈なので、もっと仕事を与えて欲しい。

ボランティアが不要と思われる会場がある。

6, 会場での改善点 (10 件)

休憩の取り方が会場により違うので統一して欲しい。

7, 運営体制の改善 (31 件)

応援職員は、日毎に変わるのは止めて欲しい。

ボランティアの内容について情報共有して欲しい。

個々人のスキルが生かされていない。

8, ボランティア組織の強化 (25 件)

ボランティアに参加しなかった人の存在。

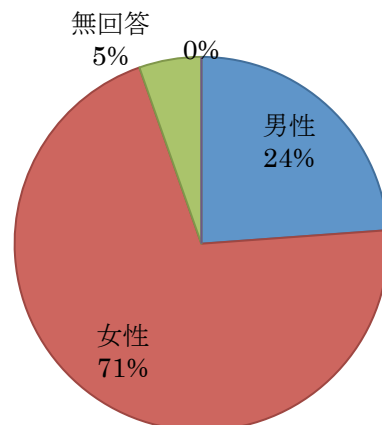
人集めに苦労したことなどを分析して総括できる場があればよい。

継続的にボランティアを運営し組織化する必要性。

○回答者について

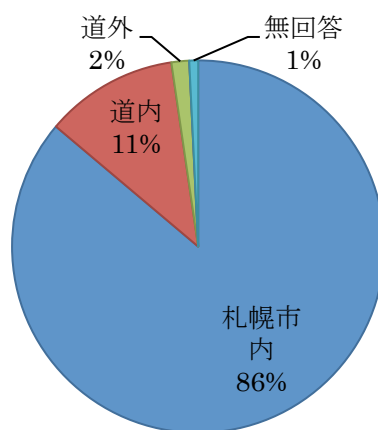
(1) 性別

	度数	割合 (%)
男性	31	24%
女性	92	71%
無回答	7	5%



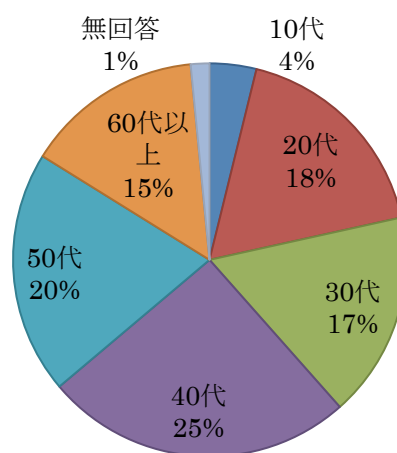
(2) 居住地

	度数	割合 (%)
札幌市内	112	86%
道内	15	11%
道外	2	2%
海外	0	0%
無回答	1	1%



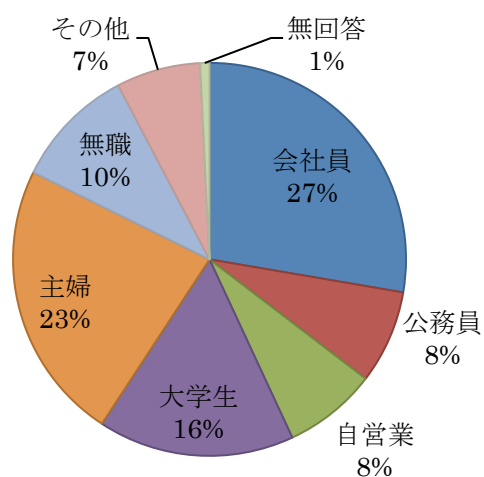
(3) 年齢

	度数	割合 (%)
10代	5	4%
20代	23	18%
30代	22	17%
40代	33	25%
50代	26	20%
60代以上	19	15%
無回答	2	1%



(4) 職業

	度数	割合 (%)
会社員	36	27%
公務員	10	8%
自営業	10	8%
大学生	21	16%
高校生	0	0%
主婦	30	23%
無職	13	10%
その他	9	7%
無回答	1	1%



以上、実行委員会が実施したアンケート調査結果終わり。

⑧-1. V-net（さっぽろアートボランティアネットワーク）の発足

札幌市内の音楽・美術・演劇界隈に存在していたそれぞれの分野のサポート、ボランティア団体及び組織のネットワーク活動（代表 西川吉武さん）。ジャンルを横断して活動するもので、平成 30 年に都心に完成する市民交流複合施設が多く市民で賑わうようにする為には、応援し支える力が不可欠だということから、SIAF2014 事業開始に合わせ西川さんの呼びかけにより発足した。国際芸術祭を盛り上げ、市民交流複合施設を市民としてサポートする。そして創造都市札幌の牽引力にりたいとのことである。

■SIAF2014 に連動して起こった市民主導の活動

前述の【SIAF2014 のしかけによる活動】の項で分類し、本資料では切り分けてとりあげているものの、これから活動の経緯と実態から、「連携事業」「市民ボランティア（v-net 発足を含む）」に関しては、SIAF2014 の事業開始を契機に起こった市民主導の活動である。もともと札幌は、鑑賞者として文化芸術祭を楽しむ、たしなむというよりは、自らが「作り手」になること、つまり表現する、発表者になる、企画し実施するという「参加欲求の高い地域性がある」と、とある地域文化の研究者は言う。筆者の知る限りでも文化芸術分野活動の領域とは分類しがたいものの、生業とは別に「本気の放課後的な活動」を行う個人は多く、生涯学習の生態を帯びた活動は多種多様に見受けられる。それらは、札幌オオドリ大学¹、よりどこオノベカ²、OYOYO まち×アートセンター³といった民間主導の場と機会サークル的な活動として活発に行なわれており、これら自発的な活動を行う市民の層は、「作り手」として、また SIAF 事業の担い手としてのポテンシャルが高い。

札幌国際芸術祭 2014 ドキュメント（記録集）「人と自然が響きあう都市のかたち-ECHO OF URBAN FORM：PEOPLE / NATURE」に寄稿された「国際芸術祭につながる札幌の美術史：吉崎元章」の中では、「**これまで札幌においては、地元の作家や美術関係者が中心となり企画し、運営する展覧会や公募展がごく当たり前のようにつけられ、この街の美術史を形成してきた。**」と書かれている。札幌に暮らしていると、まちのあちこちで実際多くの文化芸術イベントがあり、スケジュールをやりくりするのに忙しいほどである。ただし、演劇の公演でその観客には演劇関係者が多く、美術展のオープニングには、やはり「いつもの地元」メンバーが集う。それぞれの分野で表現者でもあり観客でもあるメンバーによるコミュニティが形成されているが、その分母を大きくするといったたぐいの発展に至ることが難しい、というのはとある演劇関係者の談である。SIAF 事業以前の課題として、これら市民主導の文化芸術活動を網羅的に情報発信するツール、ガイドなど広報のしくみの未整備、分野を横断した連携を促進するプロデューサー、コーディネーターなど中間支援的な人材や組織化されたしくみの不在があった。地元の課題を解決するために、2014 年度おわりに民間有志でオープンさせたカルチャー情報サイト「Art Alart」、2015 年度初頭に活動を開始した札幌市の「大通情報ステ

1. 札幌オオドリ大学 <http://odori.univnet.jp/>

2. よりどこオノベカ <http://ais-p.jp/onobeka/>

3. OYOYO まち×アートセンターさっぽろ <http://www.oyoyo16.com/>

ーション」などの新しい試みが、課題解決の一助となるか注視される場所である。また、同様に、2018年のオープンに向けて準備が進む札幌市の「アートセンター」の事業設計、特に「中間支援機能」の設置の可能性については、地元の意見を集約すると同時に、地元と世界の情勢を十分に調査した上での明確なビジョンを掲げることができ、そのビジョンをかなえる的確な体制づくりと取り組みがなされることが期待されている。

SIAF 開催地における“地元プレイヤー”、または“プレイヤーのポテンシャルを秘めた市民”が確実に存在するという地域の特徴をふまえ、活発に展開する地元の文化芸術活動にとって、SIAF がどう機能したのか、ということは今回の「札幌における SIAF 事業波及調査」を出発点に今後も地道な計測と追跡調査を要する。さらに、2014 年度の SIAF 事業が芸術文化の振興を目的にした事業ではなく、創造都市さっぽろのコンセプトの元で練られた事業計画に基づく文化芸術事業であることから、この位置づけが継続されて実施されれば、狙うところは大きく「まちづくり」であり、地元の文化芸術活動への影響にはとどまらず、SIAF は札幌（全体の市民生活）にどう機能したのか、またはするのか、と問われることとなる。

SIAF2014 事業後の開催地域における関係者追跡調査、及び開催中にも行われていた各種のアンケート調査、地域の反応として起こった出来事やヒトの記録を SIAF2014 事業評価検証の為に見直し、作成する作業の中で、より強く思い起こされるのが、ゲストディレクター坂本龍一の就任時に使われた象徴的な言葉「社会彫刻」である。ヨーゼフ・ボイスの提唱したこの理念は、上田市長が掲げた創造都市構想に共鳴するものであった。ひとりひとりが自ら考え行動することのできる市民を育てること、またすでにこういった自律性を発揮する活動を行う市民を評価し、その活動を励ますような成熟した社会、都市となることは、この理念の目的であり、導入が描く札幌の未来の姿だ。これは創造都市政策の目的と誤認されている「文化芸術による経済発展」の結果生まれるものではないだろう。ともかく、個人、そして個人の自律的活動抜きには成立しえない文化芸術分野の活動や事業に上田市長がスポットライトをあてたことは本能的な選択だったと考えられる。この前提を踏まえると、都市が理想的な次のステージに移ることは容易ではないし短期的に達成できるものではない。SIAF2014 が文化芸術事業としての意義を発揮するためには、美術館の開設と同様に長期間の継続事業として据えられなければならないということである。

もう一点、ビジョンの達成のために選択された SIAF 事業の形態について付け加える。

これまでの札幌にはハコものメインの文化芸術事業しかなかった、ところが時代の変遷を経て社会の流動性に則した公的な文化芸術事業が必要となり、だから、いま新しい形態の事業が生み出されたのではないか、もうひとつのやり方が求められたのではないかと考えた。美術館事業とは違う「イベント」の形態をもった SIAF は身軽であるがゆえ、変化する社会をとらえ並走することができる。それは SIAF が『更新可能な事業』であり、真摯な戦略と実施、正直な事業検証と評価を繰り返しながら、開催地域になにをもたらしただのか、もたらすためにをどのような順番で達成するのかを示して、事業実施ごとの計画を段階的に実行できる構造をもち『更新性を保つ』ことは SIAF 事業の生命線である。形や手法を変えながらも、目的の達成に向かうことができるということだ。

時代的強みをもって計画された SIAF2014 事業を実施しつつかんだ手応えとして、前述した「作り手」の多い地域性をきちんと汲みあげることができれば、今後はますます市民が事業運営を共に担う身内となることができるのではないかとこの予感がある。SIAF が美術館制度や博物館法等から開放されて、境界線の曖昧な、つまりハコものではない文化芸術事業だからできることのひとつである。今後の SIAF 事業で提供する参加型コンテンツ導入の目的や企画の方向性は、市民＝動員される観客ではなく、SIAF 事業をきっかけに自律的に活動する仲間を増やすことだ、と言い換え、より明快に宣言してよいのではないか。境界の曖昧さはコンテンツだけに限らず、運営体制にも現れる。例えば、事業運営の為に新規に採用される地元、地元外のマネージメント人材は、事業運営のスキルを提供し、仲間である市民とオン・ザ・ジョブ・トレーニングを共有して、お互いがよい影響を与え合いスキルを高めるということになる。運営に携わることで発生するこれらのオルタナティブで共有可能な経験は札幌の基礎体力を補強することになるため、自ら活動する市民が増え、文化芸術事業の成果の社会への波及が確認できるよりもはるかに短い時間でまちづくりに直結する動きへと発展するのではないかと期待している。

実施件数の多い連携事業の記録とともに、これらの札幌という地域の状況は、このレポート冒頭で抜粋した SIAF2014 ゲストディレクター坂本の残したあとがきの記述、SIAF2014 のしかけへと戻っていくもの・ことのひとつとなろう。実行委員会がしかけた事業やフレームとはまったく別に、もともと地域にあったプレイヤー気質に加え、SIAF の事業形態から境界線が薄まったことで生まれた市民主導の活動を下記に記録する。

資料⑩ 「2013 年度 プレフェスティバルイベント第一弾 札幌の芸術文化史を知ろう！」実施レポート

資料⑪ 札幌国際芸術祭 2014 ドキュメント（記録集）「国際芸術祭につながる札幌の美術史 吉崎元章」

資料⑫ 北海道美術批評同人誌「美術ペン」

資料⑬ PMF25 周年オフィシャルレポート「PMF に関する意識調査 結果」

① アートカフェ in 資料館

札幌市資料館がアクティビティ拠点として SIAF2014 の中で独特な活動を行っていたのは前述の通りであるが、この拠点で「サカナ編集局」を舞台に始まり、事業終了後も市民有志によって企画運営され現在も継続している活動。下記に、中心人物のひとりである山田さんの文章を転載する。

「あんまり知られていないアートカフェ in 資料館の生い立ち」

札幌国際芸術祭 2014 (SIAF) 期間、会場のひとつである札幌市資料館は、参加型アートプロジェクトや総合インフォメーション、ボランティアセンター など人の出入りが多いコンテンツが沢山ありました。その中のひとつ「SIAF 編集局」はオープンスペースとして、来場者やアーティストなど訪れた方々から SIAF 情報を集め、サカナ通信をはじめ公式とは別の視点から様々なメディア発信をしていました。

その編集局に、ボランティアスタッフとして参加されていた、シアターキノの中島洋さんが訪れてきてくれたのがきっかけです。

その日は舞台「CHROMA」が終わってすぐの時期で、舞台を見に来た人同士で感想を言い合いたいと思ったが、いい集まり場所が無く、皆夜道をウロウロしていた…という話をされていました。

SIAF 期間中、舞台や展示作品を見た後にみんなで感想を話し合える場所があったらいいという話で盛り上がり、沢山の人がそういう場所を求めているだろうと思った編集局スタッフは、出張中の代表の許可も無く「やりましょう！」と言ってしまいました。

その後、代表や資料館の方々をはじめ、沢山の参加者のご協力から、アートカフェ in 資料館（仮）が始まりました。

SIAF の長い期間の中で、その時々トレンドとなる作品や舞台をメインテーマとし、皆で食事を持ち寄りゆるく話し合おう！というのがアートカフェ（仮）の目的でした。

立ち上げ時にモデル例として洋さんが紹介してくれた「山形国際ドキュメンタリー映画祭 香味庵クラブ」は、まさにアートの交流場です。

ボランティア団体と店舗の協力により、映画祭期間中に運営されている交流の場です。いまは芸術祭の名物として沢山の人の愛されているそうです。こんな場所が不定期でもぼろぼろと札幌でも生まれたら素敵だなと思います。

（山田愛衣さん：アートカフェ in 資料館 FACEBOOK ページより転載 <https://www.facebook.com/artcafe.sapporo>）

* 2014 年 8 月の開催を皮切りに、2015 年 7 月現在 10 回のイベントを実施した。

② SIAF-HACK

SIAF2014 広報戦略のひとつに SNS（Facebook と twitter）の活用があった。SNS は事務局が直接情報発信を行い管理運営していたが、2014. 7. 19 の開幕直前に、“SIAF-HACK（非公式）”を名乗る twitter アカウントが突如登場し、SIAF2014 の情報を発信、事業の存在意義を「自主的に、勝手に」擁護、サポートするという動きが始まった。会期中には、公式アカウントと非公式アカウント（SIAF-HACK）の二つが情報発信を並走して行った。閉幕後には、SIAF-HACK（非公式）の単独主催で、SIAF2014 アソシエイトキュレーターや、参加アーティストをゲストに迎えた振り返りの為のトークイベントを開催するなど公開型のイベントを実施している。

③ ACF フォーラム「札幌国際芸術祭 2017 フライング・フォーラム」

SIAF2014 閉幕後すぐに、事業の振り返りを市民自らが行うというイベントが開催された。主催したのは、ACF 札幌芸術・文化フォーラムという「市民とアートとまちをつなぐプラットフォーム」を唱う民間の団体であり、札幌市における国際展事業開催を市民サイドから行政に提言した。SIAF2014 開幕以前から、国内国際展、芸術祭に関するフォーラムなどを市民向け勉強会という主旨で複数実施してきた。地域の文化芸術関係者で構成される同団体は、フォーラムを通して SIAF2014 事業を振り返るとともに、次回開催実現に向けて市民主導の行動をいち早く起こすことを宣言した。

ACF 札幌芸術・文化フォーラム ホームページ <http://www.sapporoacf.com/>

ACF フォーラム「札幌国際芸術祭 2017 フライニング・フォーラム」開催記録（コメント集）

開催日時：2014 年 12 月 9 日 18:20～21:10

場所：札幌エルプラザ

主催：ACF 札幌芸術・文化フォーラム

第 1 部「札幌国際芸術祭をアートの観点から振り返り 2017 年へつなげよう」

コーディネーター：吉崎元章（札幌芸術の森美術館 副館長）

パネリスト：端聡（SIAF2014 地域ディレクター）、

四方幸子（SIAF2014 アソシエイトキュレーター）、

北村清彦（北海道大学文学研究科教授）、阿部典英（美術家）

第 2 部「札幌国際芸術祭を市民の関わりの観点から振り返り 2017 年へつなげよう」

コーディネーター：古家昌伸（北海道新聞文化部長）

パネリスト：山田愛衣（SIAF 編集局/サカナ通信 代表）、

小田井真美（SIAF2014 チーフ・プロジェクトマネージャー）、

大井恵子（ギャラリー門馬 & ANNEX オーナー）、

関鎮京（北海道教育大学岩見沢校准教授/芸術・スポーツビジネス専攻芸術文化政策研究室）

以下、フォーラムの映像データで文字起こししたテキストから、発言内容を以下の 4 つの項目に類型化した。

- ① コンテンツについて
- ② 事業推進／実務／広報について
- ③ 会期運営／観客・プログラム参加者の反応について
- ④ SIAF の評価指標について

第 1 部

①コンテンツについて

- ✧ 札幌というのは北海道の象徴的な場所というふうに私は考えています。・・・・・・端氏
- ✧ アイヌの精神文化を継承していく白老の飛生芸術祭だとか、または北海道のみならず日本の近代化を支えた空知の炭坑跡地のアートプロジェクト。これというのは、まさに北海道が世界に訴えかけていくもの・・・・・・端氏
- ✧ 昨今の環境汚染の問題、エネルギーの問題、自然に対するアニミズム精神、そういうのを大切にしていこうという、もしかしたら現代人が今一番足りない部分を、この札幌以外の地方ということを十分世界に発信し得るんじゃないか。・・・・・・端氏
- ✧ けっこう公共空間が多いですね。メディアアートと参加型プロジェクトは最近けっこう近くなってきていて、色々な人が DIY ということで、色々なものを共有したりノウハウを共有して作るような状況が日常にも増えているんですね。親和性があるということで関わっている・・・・・・四方氏

- ◇ ちょっとしたこと、生活とか人生がガラッと変わるといいなと思ったりしているんですけど。．．．．四方氏
- ◇ 500m 美術館の「時の座標軸」という基本的な考え方を作らせていただきました。今まで道内の作家は何名かフィーチャーされていたことはありますけれども、北海道で行うというのでちょっと寂しいというか。．．．．北村氏
- ◇ すすきのトリエンナーレといって端さんが行ったものがあるんですけど、すすきのキャバレーの空き店舗を使った展覧会があって、こういうのを正式に場所とするのはどうか分かりませんが、札幌らしいなと印象を持ちました。今回ですね、札幌ならではというところを企画段階からかなり考えて。．．．．吉崎氏
- ◇ 坂本さんはそこにご自身の近代化の問題であるとか、エネルギーの問題であるとか、色づけをされましたけれども。．．．．北村氏
- ◇ 都市と自然というテーマに関しては広がりや深みのあるテーマになった。．．．．北村氏
- ◇ おもしろかったのは近代化ということに注目しつつ、それと社会彫刻というね、ヨーゼフボイスの提言ですけれども、それを書いてあったというところに魅力を感じたんですけど。．．．．端氏
- ◇ 北海道は後発ですから、なんせ全国の芸術祭と比べれば、北海道って何ってところから、そして都市と自然どう考えるんだということから始まらなければならない。．．．．端氏
- ◇ （中略）北海道というのは歴史と無縁ではないと言えますよね。．．．．端氏
- ◇ タ張の破綻を含めて光と影があって、そういう歴史の証言者だからこそ、世界にさまざまな現代固有の問題を発信できる。それをアートや文化で発信できるということになれば、このテーマはぴったりだと思っているので、継続したい。．．．．端氏
- ◇ 参加型プロジェクトとしてコロガル公園ですとかサッポロ絵本会議とかもやったんですよね。市民の方々がリピーターとして参加していただけることも多いプロジェクトをやっていて。．．．．四方氏
- ◇ 何もできない中で、センシングストリームの作品ってキャッチーな感じではないので、作品をちゃんと見てもらって、立ち止まってもらって、で見ると、毎回違って見えたり解釈ができたり、だんだん深い内容になる作品があるので、それを毎日通る人も見てもらえるようにしたいなと思って。．．．．四方氏
- ◇ 札幌の人口は（中略）今 190 万を超えている、京都を抜いている人口なんですね。これだけに増えたということは、日本の中でも何か特異な都市だと思うんですね。これが要するに札幌国際芸術祭をやる意義がここにあるんじゃないかと思うんですよ。なんで札幌らしさを探してしないのか。．．．．阿部氏
- ◇ もちろん炭坑が日本の近代化に貢献したということは誰も知っています。でもその中に強制労働とか色々な問題があることは、今回は一つも出てきません。．．．．阿部氏
- ◇ お互いが自立しながらも連携したり、それぞれの領域をまたいでいくコミュニケーションが重要だと思うんですね。そういう意識が今であって、芸術祭は色々な人々が出会ったり交流する場所だと思う。．．．．四方氏
- ◇ 都市と自然ということを言いますと、札幌の近代化のことを考えていた。そういう視点がありまして。美術というのも近代的なシステムなんですね。日本ではやはり明治以降に輸入されています。美術自体も変動している時代なんです。．．．．四方氏
- ◇ 色々なこれまでの価値観が変わってこざるをえない状況下で、美術の側からも生活の側からもメディアアーツの側からも歩み合って、何かあれば対話していく方がいいんですよ。こういった場があることも重要なんですけれど。それが芸術祭だと思いますし、みんな自分のための芸術祭だと思うんですね。そこを考えてほしい。．．．．四方氏

②事業推進／実務／広報について

- ◇ この国際芸術祭の動きというのはですね、60年代後半からあったんですね。・・・・・端氏
- ◇ 連携事業が161くらいあったんですね。・・・・・端氏
- ◇ もっと地方自治体との協力を結びながら連携を増やしていけたらなというふうに今回やってみて思いました。・・・・・端氏
- ◇ やはり私たちは2017も考えなきゃいけないけど、30年後50年後も考えなきゃ行けないと思っていて・・・・・四方氏
- ◇ 今日はフライング・フォーラムとなっていますが、フライングでもなんでもなくて、もう始めないと間に合わないと思うんですね。というのは、今回の国際芸術祭というのを最初に計画したのは平成23年の9月9日、三年前なんですね。・・・・・北村氏
- ◇ 基本計画が全部その通り実現することもないんですけども、実現した部分と実現しなかった部分が色々ありますけども、そのときに私たちが一番大事に考えたのが、最初っから考えたのが、どうやってこれを継続させていくのか、継続の仕組みをどうやって作るのかというのが非常に大きなテーマでした。・・・・・北村氏
- ◇ どうしても実行委員会になると毎回毎回、また次のための実行委員会を立ち上げる、それだと継続性の点で大変心配があるなと思っていました。是非、札幌国際芸術祭の恒常的な組織を作っていただいて、今回関わった人たちが30年後に中心になってもらうというつもりでやっていただきたい・・・・・北村氏
- ◇ 30年後50年後を目指してやらなければいけないというふうに考えています。・・・・・北村氏
- ◇ 会場がなんといっても市民ギャラリーが使えなかったということ、道立近代美術館が半分しか使えなかったこと、これも非常に残念・・・・・阿部氏
- ◇ 3年というのは非常に貴重な時間ですから、実際にはまだまだ反省するところがあると、よいところは伸ばせばいいし、改良すべき点は改めればいい・・・・・阿部氏
- ◇ いろいろな場所でやったということ自体はおそらく計画の中では、それを訪ね歩くこと自体が自然とすぐ隣接している札幌都市ということを体感すると共に、いろいろ感じるもの・・・・・吉崎氏
- ◇ 有料で行くというのはハードルが高いと思うんです。なので公共空間とか無料ゾーンでいろいろと見てもらって、今日持っかえっていただいて次に動員するのが近美とか芸森なんですよ。・・・・・四方氏
- ◇ 会場が分散していてけっこう色々な場所で行きにくかった・・・・・四方氏
- ◇ 芸術祭は全部見なくてもいいと思います。別にすべてを見ることが芸術祭じゃないと思うんですよ。その人が見たいものを見て、それが芸術祭、一つの芸術祭はないんです。子どもさんがコロガル公園見て、それも芸術祭。全部見ても芸術祭。でも全部見切れない人ばかりです。イベントけっこう自分の仕事で見逃していますし、連携なんかを芸術祭の一部として入れたらまったく見れてないですね。・・・・・四方氏
- ◇ 今の時点で言うと、全ての状況は分散型になっています。全てを見るような押しつけはないです。好きなものを見ていいと思うんです。なのでそういうことでいうと、好きに見てくださいとしか言えない。・・・・・四方氏
- ◇ 今回毛利悠子さんが清華亭というところで展示してくださったんですけど、そういうふうにして色々な場所があることがわかったので、見方によって面白い場所がいっぱいあり得る。・・・・・四方氏
- ◇ 場所の問題については、離れすぎちゃうと行きにくいということありますから、僕だったら市民ギャラリーを使えるようにしたらいいかなということと、それから石山緑地ですね。それから大通り公園。そうすると、芸森に続く

という。・・・阿部氏

- ◇ 他との差別化ですね、後発の芸術祭でしたから。・・・吉崎氏
- ◇ 現代アートというのは、基本的には美術館を捨てて成立してきたので、そこからまた美術館に戻るといえる意味では矛盾といえば矛盾なんです、ただ行政的な閉じこもった場所で人がカウントできないと数字が出てこないというので、美術館を使ったという経緯があります。・・・北村氏
- ◇ 固定された閉じこもった場所でもできるものだと。でも、いろいろ探したんですけども案外札幌ってそういう場所があるようでないですね。大倉山はどうかとも考えたんですけども案外ない・・・北村氏
- ◇ 継続性の問題で言うと、このテーマであと 2、3 回やってもいいと。ただ継続と同時にマンネリもあるので、それはディレクターがそれぞれにやればいい・・・北村氏
- ◇ もっと市民、北海道民がこの芸術祭に興味を持って来てほしいなというところ、そういう市民に対して開かれていて、市民も芸術祭を誇りに思っているようなものにどうしたらできるかという気持ちがあるんですよね。市民への接点、深まりを展示なりプロジェクトなりでもっと持つ良い方法はなんでしょうね。・・・吉崎氏
- ◇ チカホというのは 1 日何万人という人が通っているすごい札幌一交通量が多いところで、四方さんを中心にいろいろと作品をやったんですけど、やっぱりいろいろな規制があるのか、あるいは予算の問題なのか、あそこがアートにあまり関心のなかった人の心をぐっと捕まえて向けさせる入り口になるのかなという気がする・・・吉崎氏
- ◇ いろいろとできなかったことが多いんですよね。道路が使えないので、道路で人が立ち止まるようなプランを考えたとんですけど、窓がありますよね、あそこで虹を出すってこととも考えたんですけど、NG でした。・・・四方氏
- ◇ 規制は多いです、でも規制はしょうがないです。ただチ・カ・ホでも、実績として問題なければできるだけ場合もあるので、音とかそういう部分で少しずつ緩和されることもあるかもしれない。これは見ないとわからない。・・・四方氏
- ◇ 致命的だったのは「え、この予算額」というのがあって、本当に警備とか作品とか機材の保護だけでも予算はかかるので、予算がなかったことはかなり厳しかった・・・四方氏
- ◇ 規制もありました、いっぱい。ここまではどこの管轄とか・・・四方氏
- ◇ もう少しやりたいことがある程度自由にできるとか、もうちょっと人が立ち止まってみてもらいやすいぐらいの空間づくりがしやすかったらいいと思ったんですけど。壁も建ててませんし、ほとんど何もしていません。・・・四方氏
- ◇ 北三条広場とか上のほうでもできたらよかったなと思います。あと予算があれば壁に色を塗ったりしてキャッチーな感じにできた・・・四方氏
- ◇ キャッチー性とあまりそういうことを言いたいわけじゃなくて。あそこでもう少し予算をかけてしっかりとやれるぐらいの全体的な取り組みがあってもいいんじゃないかなと・・・吉崎氏
- ◇ 自分たちの街がアートで何かをやるところに、少なからず何か関わって盛り上げたいというところの取り込みが今回はうまくいかなかったんですけども。次回はそのあたり札幌でアートでやっていく上で何か心に留めておかなければいけない・・・吉崎氏
- ◇ たとえば、国際芸術祭の 2013 年の調査というのが冊子になっているんですよね。その部分では全部、ギャラリー、画廊を含めて全部を協力体制とすることをしたらいいんじゃないかって、僕は言っています。古いギャラリーとか

画廊がですね、今回の中で関連してやってない・・・・・・阿部氏

- ◇ 皆が『よしやろう』という雰囲気づくりを上からじゃなくて下からののぼりあげをね、何か方法があるんじゃないか・・・・・・阿部氏
- ◇ 坂本龍一さんがあまりにも世界的に有名な人で、そこは看板だったですから。ポスターも坂本龍一、その下に札幌国際芸術祭って書いてあったんでないかな。そんなことよりも、札幌国際芸術祭が主体だよってことを僕は言いたかった・・・・・・阿部氏
- ◇ 今回 64 組の中で北海道の出身あるいはゆかりのアーティストは 20 人入っています。ですから、地元のアーティストが少なかったわけではありません。ただ今回テーマがあって、テーマのもとしっかりとやってきた、しっかりとそれは選んできた・・・・・・端氏

③会期運営／観客・プログラム参加者の反応について

- ◇ 実際に地方自治体のかたと話していると、大変積極的に応援してくれました・・・・・・端氏
- ◇ 今回子どもさんたちも大勢いらしていただきました・・・・・・四方氏
- ◇ やっぱ笑顔を見たりとか驚いているところを見ると、『やった』とか思ったりする・・・・・・四方氏
- ◇ どこで何を見たら芸術祭を観たことになるのかわからないよという、色々な声が聞こえてきた・・・・・・吉崎氏
- ◇ 1 回目というのは一般の市民が現代美術にそんなに慣れていない・・・・・・四方氏
- ◇ みなさん巡るのを楽しみにしていただいて、外の方も市民の方も・・・・・・四方氏

④SIAF の評価指標について

- ◇ その半世紀の想いというのが、本当に待ちに待った開催ができた。まず、これが我々芸術関係者にとって大成功・・・・・・端氏
- ◇ 初回の連携事業としましては、相当、他の先輩方の芸術祭と比べても多かったというふうに思います。市内の連携事業が多かった・・・・・・端氏
- ◇ 次にもっと札幌以外の地方も含めまして、北海道全体をアートに満たしていきたいなと思っています・・・・・・端氏
- ◇ 坂本さんのディレクターとしてのヴィジョンがしっかりと皆で共有できて、関わっている者そして関わってくださった皆さんと一緒にそれを楽しんで、なにより楽しんで実現できた・・・・・・四方氏
- ◇ 種を蒔いたなと思っていて、でも種って育つまで時間がかかる・・・・・・四方氏
- ◇ 彼ら（来場した子どもたち）はいずれ芸術祭を担ってくださると思いますし・・・・・・四方氏
- ◇ 市民がもっともっと、創造都市と言われるような市長の方向性も含め、みんなが楽しく日常を送ったり、普段とは違う視点で、あの芸術祭を見たあとに別の視点で普段とか生活とかを見直してくださるようになるといいなと思っています。もっともっと生活にアートが入ってくるかなと思っている・・・・・・四方氏
- ◇ 芸術祭の中でいろいろな方とお会いしてきたことや、国内外のアーティストが頑張って作ってくださったものとか、みなさんと一緒に作ってきたものとか、そして、札幌の中でもいろいろな方々が新しく芸術祭のために出会いなおして、仕事を一緒にしたり、楽しんで時間を過ごすことが増えたんですね。こういった人々の繋がり、これ本当にかげがえのない宝物だなと思うんです。ここからしかはじまらないと思うんですよ。人が重要だと思うんですよ。

だからそれができたのかなと思っていて、それに関してはとても喜んでいます。・・・・・四方氏

◇ 芸術祭で生み出されたものが、色々な形で稼働していたり、展開するような状況もあるので、これからも芸術祭は
そのようにしても続きますし、みなさんと一緒に育てていくということで、芸術祭はこれから実際に育っていく必
要があると思います。・・・・・四方氏

◇ 近美や芸術の森の作家も素晴らしいですけども、(500m 美術館展示「時の座標軸」が)全然負けていないと。北海
道にもこれだけの作家がいるんだということを改めて知って頂いて大変良かった・・・・・北村氏

◇ 人数の件から言うと、48 万人(総来場者数)と非常に多いと思いますが、たしかに有料のところでは二つの美術館
合わせても 6 万 6 千人と夏場の時期としてはそれほど大きな数字ではありません。・・・・・吉崎氏

◇ それ(点在する会場)を全部巡ってもらえることが多くの人にはしてもらえなかったというような感じを受ける数
字・・・・・吉崎氏

◇ ちょっと芽が出てきたので、次回だったら『芸森行こうかな』とかってなると言うんですね。1 回目で全ては解
決しないけれども、導入はしたと思うんですね、ここからが始まると思うんで次回がすごく重要・・・・・四方氏

◇ たくさん会場があって全部回れなかったという話がありますが、基本的に今回の会場構成は悪くなかった・・・・・
端氏

◇ 昨今の芸術祭は美術を見るためだけじゃないですよ。やっぱり街の生活、または歴史というものがあって、それ
を回りながら付加価値として現代アートがある。またはその場所に行かなければ見られないもの、サイトスペシ
フィックって考え方ありますけれども、その場所で行かなければ見られないもの、でそれが市民と協力しながら制作する
もの、そういうものが点在しているということの方がいいと思っています、今回 1 回目ですから、続くのであれば完
成度を保っていくのではないかと・・・・・端氏

◇ 都市と自然というテーマが非常に良かったじゃないか・・・・・吉崎氏

◇ 非常に良いテーマだと思っています。・・・・・北村氏

◇ 単純に近美でやっているのが都市、芸森でやっているのが自然という問題ではなくて、どう私の作品が都市と自然
という全体のテーマと繋がっているのかというのを考える良い作家さんへの宿題になったような感じがして、色々
な作品出て、私たちが想定した以上にとても豊かな全体のテーマになった・・・・・北村氏

◇ 道外から来ていただいた方がすごく多かったというのが数字だけでなく実感としてもあって、これはすごいことだ
し、伸びしろといった部分でも期待できること・・・・・吉崎氏

◇ 世界中のどこでもそうなんですけれど、外の人に注目されて「こんなにおもしろいことをやっているんだ」って気付
くことも多いので、今回色々な方がいらしたことを実感された中で「なんか札幌って変わってきたな、おも
しろいことをやっているな」と思っていたかとそれは一つ良い・・・・・四方氏

◇ そこで色々な関係性ができていたり、市民の方が何回か来てもらうことによってまた人を誘ってくださったり、
だんだん表情が変わっていくなど、変容していくのが見ることが出来た・・・・・四方氏

◇ 外から来ていただく方は 1 回しか見られないんです。市民の方がどのように芸術祭の個別のプロジェクトを含めて
使いこなしてもらったり、いかに楽しさを発見してもらえるかという仕掛けが必要だなと感じていて、そこは少し
はやってみたという感じ・・・・・四方氏

◇ (センシングストリームスが)地味かどうかと聞かれると地味な感じは正直しました。・・・・・吉崎氏

◇ アートっておもしろいので他も見たいかなというような発展性があるものが、あそこでもう少しあったら、もとも

とアートに関心なかった人が集まったりあるいは関心を持たせるきっかけになる一番キーなのかなというのが正直した・・・・・・吉崎氏

- ◇ 札幌国際芸術祭の起点が、北海道でしか見られないという何ですのという部分が今回は少し希薄だったなという気がします。・・・・・・阿部氏
- ◇ この4、5年の動きですね。若手の動きで、この国際芸術祭が実現した。また、その4、5年前から様々な場所で若手だけのシンポジウムであるとかが今活発に行われています。ですから今後に期待しています。・・・・・・端氏
- ◇ 単にディレクターが決まってその人が決めたものをやるというんじゃなくて、地元の色々な『おもしろいことやりたい』『なんかやりたい』というような若い機運とかが、合体となって、祭りにふさわしい高揚感がその時期あふれているような、そんな札幌になればいいんじゃないか・・・・・・吉崎氏

第2部

①コンテンツについて

- ◇ （サカナ通信について）資料館内にある SIAF 編集局というところで、こういうのを各会場に配布していたんですけども、公式の発信だけではなくて参加者目線の楽しみ方をみんなで共有できるようなコンテンツを目指して作りました。・・・・・・山田氏
- ◇ メインメンバーが大学生だったんですけども6名ほどで、サカナ通信の制作のほかに twitter の配信を始めたり、来場者の会場案内、ブログの更新、あとサカナ通信 today という名前で毎日アーティストや参加者の方々に日報みたいな感じで芸術祭の感想を聞いたり、あとアートカフェの開催を行いました。・・・・・・山田氏
- ◇ 記事はボランティアスタッフの体験レポートや、来場者の声をメインとして、公式では取り上げられないような関連イベント、あとはボランティアスタッフにインタビューなどをしました。・・・・・・山田氏
- ◇ このサカナ通信の発行の目的の一つは、観客目線の情報を発信していきたいということ、もう一つは参加者やボランティアが情報源になることで当事者意識を高めてもらいたいということでした。・・・・・・山田氏
- ◇ 新聞や雑誌に掲載されるとみんな嬉しいと思うんですけど、その事柄についても愛情が湧くと思います。それを感じてもらうためにインターネットの配信だけでは弱くて、やっぱり紙の発行物に自分の言葉が選ばれて掲載されたという感覚が必要だと思って、紙での配布をしました。・・・・・・山田氏
- ◇ サカナ通信や SIAF 編集局はいちボランティアスタッフからおすすめ情報として作品の感想とか、芸術祭に直接関係ない観光情報とかもある程度自由に発信することができた・・・・・・山田氏
- ◇ 長い期間中のイベントなので、みんなで育てていくという考え方があると楽しんでもらえるのではないかと思います、いろいろイベントを企画・・・・・・山田氏
- ◇ 資料館でやっていた「エホン会議」ですとか「とくいの銀行」というのがありまして、これはまさに参加型プロジェクト・・・・・・古家氏

②事業推進／実務／広報について

- ◇ 公式だけだどうしても内容を各会場広範に伝えなくちゃいけなかったりとか、上に内容を確認してもらうのに時間がかかったりというのがある・・・・・・山田氏

- ◇ 広報が難しかったというのは、本当に我々も実感しているというか反省している点ではあります。色々なことは試しました。勿論広報戦略もありまして、その戦略をもう練りに練った上で、やはりそれでも届きづらかった。……

小田井氏
- ◇ 行政が本腰を入れてこの芸術祭をやるということで、SIAF の開催を通して広く芸術文化の土壌、環境の整備みたいなことが進むんじゃないかなと。進めるのが、行政が入っている国際展のひょっとしたら地域における役割なのかもしれない……小田井氏
- ◇ もともと創造活動の環境整備というのが私の方針なんですけれども、広報というものを一つ取った時に、このインフラが札幌の中にあっつけということも同時に思いました。SIAF の人間として広報をやっていかなきゃいけないときに、乗られる仕組みがあればすごく楽だったなと。……小田井氏
- ◇ アートマネジメントをしている学生と一緒に（7 月）21 日にいったんですね。（中略）芸術の森の入り口誰もいなくてですね。学生と目あわせられなくてね。ボランティアの方々がですね（中略）9 時 25 分になってもまだ打ち合わせをしているんですね。ちょっとあり得なくて（中略）それくらいばたばたしながらのボランティア体制になっていた……関氏
- ◇ 本当に計算してやっているのであれば運営スタッフの数はもっと配置されないといけなかったはずなんです。（中略）国際芸術祭って言えば企画の内容だけ完成度の高いものを見せようというのがあったと思うんですが、それに伴って国際的レベルのマネジメントが伴わないといけない……関氏
- ◇ 今回運営スタッフとして関わっていらっしゃる方々って本当に 1 人 10 人分のお仕事をなさったんじゃないかなというくらい頑張っていたと思います。……関氏
- ◇ 参加型のイベントを増やしていきたいというのはスタッフも楽しいし、参加している人も楽しいんじゃないか……山田氏
- ◇ 札幌オオドリ大学では、とくいの銀行と絵本会議の運営に携わらせていただいたんですけど。これをやってくださいというのはお伝えはしませんでした。どちらかと言うと一緒に楽しんでくださいというような関わりを一緒に作らせていただいたというような形です。……猪熊氏
- ◇ 芸術祭というのは、次も同じルールでやっていくとしたらゲストディレクターという毎回変わる企画の中心人物がいてという形になっていくんですが、それって 3 年に 1 回なんですよ。そして次々変わっていくと。……

小田井氏
- ◇ ただ変わらないものとして、それが札幌という地域なんだと思うんですけど、地域が強化されていくというのは、ざっくりした言い方なんですけれども大事かなと思っています。……小田井氏
- ◇ ボランティアが組織化されていくこととか、強固になっていくことということでもない……小田井氏
- ◇ 札幌国際芸術祭というのは開催することが目的目標ではないと私は思っています。芸術が札幌この地域に何をもちたらかということに常に我々が意識して実験しなければならないし、その集大成として一定期間に集中的に多発的に行われるのが札幌国際芸術祭だと思っています。……関氏
- ◇ そのためには市民生活の中でどうやって芸術を位置づけていくのか、日々芸術の面白さを伝えていく活動をやっていかなければならない……関氏
- ◇ hacoren の主旨なんですけれど、市内のギャラリーが連携して札幌国際芸術祭を地域のインデペンデントなアート関係者の力で一層盛り上げると共に、札幌から世界に向けたアートの発信を行うということで行いました。……

大井氏

- ◇ ネットと紙媒体によって各ギャラリーの所在地と活動が一覧可能となる総合的な情報提供を行いました。・・・・・・

大井氏

- ◇ 芸術とか美術において市民との交流を日常的に関わっていくことが出来るのはギャラリーであるし、その役目があると思います。・・・・・・大井氏
- ◇ 市民との関わり方、集客方法などについてそれぞれのギャラリーが必死に努力しているんです、日常的に。そのノウハウを国際展など盛り上がりが必要なときには活用してもらうことも可能ですし、ギャラリー自身が市民と行政の中間のプロの立場から協力体制を整えていくことが重要だと実感しました。・・・・・・大井氏
- ◇ 次期国際展のテーマを勝手にですよ、勝手に決めるつもりです。勝手に決めることでなんか見えてくるのではないかと・・・・・・大井氏
- ◇ 芸術祭なんですよ、祭りなんですよ。祭りの楽しみ方というのをギャラリーが言っていければいい・・・・・・大井氏

③会期運営／観客・プログラム参加者の反応について

- ◇ ボランティアや参加者が常駐スタッフより芸術祭をよく見ている人も多くて、その人たちに広報に協力してもらったりということも助けられました。・・・・・・山田氏
- ◇ 広報について、アートカフェという場所で、私もグループの中に入りながら、SIAF を振り返るというワークショップに参加しました。広報について本当に様々な方向からの意見が多かったです。・・・・・・小田井氏
- ◇ 3ヶ月間のボランティアの方々の方々の様子を見ますと最初はやることにいっぱいだったんですけども、徐々にこの作品が何が面白いのかとか、寄ってくる市民に近づいて自分から声かけたりして、そういうふう生き生きしている表情を見ると、なぜか私も嬉しくなりまして・・・・・・関氏
- ◇ 行政というのは、市民のパワー、それからボランティアがいるからと思って、開催を決めたんだと思います。それくらい札幌というのは行政と市民の関係というのが、パートナー関係になってきたというのとも言えますし、・・・・・・関氏
- ◇ 市民との関わり方という点において、ものすごくボランティアとの関係というのが身近に感じたことですね、それがギャラリーをしていても一番感じたことです。・・・・・・大井氏
- ◇ 私はずっと資料館にいたんですけども、最初と最後のほうは全然雰囲気も違って、他の会場の方々もそうだったんですけど。・・・・・・山田氏
- ◇ ボランティア同士で協力して、例えばチカホだとボランティアノートというのを作って、お客さんの反応がこうだったからこう説明したほうがわかりやすいとか、協力して作っていているというのは感じました。足りていたかどうかという話なんですけど、やはり足りてなくて。・・・・・・山田氏
- ◇ （ボランティア）登録はしたけど動いていない人たちとか、興味はあるけど足が動かなかったりという人もいたと思います。それはすごくもったいなかった・・・・・・山田氏
- ◇ 資料館は参加型のイベントが多かったので、展示の監視をするという感じではなくて、来てくれたお客さんと対話をしたりとか一緒に関わっていくというのが多かったので、繰り返し来てくれるボランティアの方もけっこういました。その人たちは楽しんでくれたみたいです。資料館が一番楽しいねって言うってくれる人がたくさんいまし

た。・・・・山田氏

- ◇ ミッションを与えるのではなく、一緒につくっていただいたというのが、最後までもったというか楽しくできたところなのかなあと。そういうところが、お客様が来たときに楽しく会話ができたりとか、より作品がよく見えたりとか。・・・・猪熊氏
- ◇ 札幌国際芸術祭に行っていない市民は、単純に芸術に興味がないからというだけの話ではないと思うんですね。札幌国際芸術祭がなぜ札幌に開かれているのか。これがあることによって札幌がどのように活性化していくのか、どういうふうに地域を変えていくのか、それが分からなくて疑問を持っているように思います。・・・・関氏
- ◇ 国際芸術祭の主要な会場に媒体を置いたので、その効果は歴然としておりまして、ギャラリーにも道外からの芸術関係者がおいでになりまして普段とは違う空気感を味わうことが出来ました。・・・・大井氏

④SIAF の評価指標について

- ◇ これまでたくさん民間でも公立のものでも文化芸術事業というのは何十年にもわたって行われて来ているんですけども、その情報を確実に市民に届けるような仕組みというものが果たして地元にもともとあったかと。それがないうことがわかったというのが私は最大の成果だなというふうに思っていますし、そこについて本腰を入れて動かしていくようなことをやらなきゃいけない・・・・小田井氏
- ◇ これこそ新しい公共が生まれて来たんじゃないかな・・・・関氏
- ◇ その意味で今回国際芸術祭の最も大きな意義というのは市民と地域社会の関わり方が可視化されてきたんじゃないか・・・・関氏
- ◇ 私たち運営者側が伝えるというよりも、みなさんの中からアイデアが出てきたというのがすごく魅力だった・・・・猪熊氏
- ◇ その地域というものは揺るぎなくあってそこでの活動があって変わっていく人たちが通り過ぎていくということなんだとしたら、その今回 SIAF に関わっていただいた市民ボランティアというところから徐々にその一つの細胞としてですね、揺るぎない地域の出発点としてですね、さらに仲間を募っていただくような、それってなにも組織的にということじゃない・・・・小田井氏
- ◇ SIAF は 3 年に 1 回しかないけれど、それ以外にもたくさん地元のアートの活動というのはあるので、たとえばそういうところに出かけて行って、またそこで仲間を作るとか。そんなふうに SIAF という点の間を埋めていくような。新たなに地元を振り返りながら見直しながら、個人個人が「アートってなんだろう」って思ったりとか「札幌どうなるんだろう」って思いながら過ごすという充実感こそが必要なんじゃないか・・・・小田井氏
- ◇ そういうことで、実際にやってきた中で、創造都市札幌ということが言われていると思うんですけども、人と人が出会い思いを共有すること、その積み重ねで創造性の芽は育っていくと思います。・・・・大井氏

以上、ACF 主催 札幌国際芸術祭 2014 フライングフォーラム（コメント集）終わり。

④実行委員会主催 SIAF2014 公式振り返りイベント開催記録（コメント集）

SIAF2014 公式振り返りイベント「ファイナルトーク」

日時：2014 年 9 月 28 日 13:00-15:30

場所：札幌市役所 1 階ロビー特設会場

登壇者：武邑光裕氏（SIAF2014 ゼネラルプロデューサー）

浅田彰氏（SIAF2014 企画アドバイザー）

飯田志保子氏（SIAF2014 アソシエイトキュレーター）

四方幸子氏（SIAF2014 アソシエイトキュレーター）

端聡氏（SIAF2014 地域ディレクター）

梁井朗氏（北海道美術ネット主宰）

吉崎元章氏（札幌芸術の森美術館 副館長）

寺嶋弘道氏（北海道立近代美術館 学芸部長）

坂本龍一氏（SIAF2014 ゲストディレクター）※メッセージのみ

ファイナルトークの文字起こしデータから発言内容を以下の 4 つの項目に類型化した。

- ⑤ コンテンツについて
- ⑥ 事業推進／実務／広報について
- ⑦ 会期運営／観客・プログラム参加者の反応について
- ⑧ SIAF の評価指標について

①コンテンツについて

- ◇ 市内のみならず、モエレ沼とか芸術の森とかを拝見して、作品が素晴らしい、しかしそれ以上に場所自体の魅力が素晴らしいというので、『あー来てよかったなあ』、で本当言うと芸術の森が本当に素晴らしかったものですか
ら・・・・浅田氏
- ◇ 表層的なグローバリズムとそれからその対である表層的なプロビンシャルリズムというのは避けなければいけ
ない・・・・浅田氏
- ◇ 札幌で別にどこでやっても同じようないわゆる国際的なスターが勢揃いするような国際芸術祭はやらないとい
うことははっきりしています・・・・浅田氏
- ◇ ローカルのもこそがグローバルになるし、グローバルのものはそういうローカルのものにつながらなくては
いけない。まあ、グローカルという言葉に象徴されるようにですね、ローカルということは非常に重要なんです・・・・
浅田氏
- ◇ 国際芸術祭で名乗る芸術祭では、グローバリズムに安易に乗らないことを機にですね、札幌の地元でしかやらない
という閉じたプロビンシャルリズムも絶対に駄目。ローカルだとグローバル、グローバルだからこそローカルとい
うような、グローカルな視野でやっていかなければならない・・・・浅田氏

- ◇ (前略) そういう自然や過去をふまえながら、札幌にしかできない問題を、ここで考えていくのがいいだろうという
ことで、ひとつめには「都市と自然」ということ・・・・・・浅田氏
- ◇ この芸術祭は非常にはっきりと、つまりグローバリズムとプロビンシャルイズムの両方を知ること、札幌でしか見
えないような、そういう自然と過去との対話の中で垣間見えてくる新しいポスト近代のビジョンを目指していこう
という、非常に明確なテーマが階層にあって・・・・・・浅田氏
- ◇ 全体としてこの芸術祭の意義をひとつ上げるとすると、開催したことよっての経験値とか、ある意味でこれを次に
つなげていける色んなアセットが一杯見付かったということだと思えますね・・・・・・武邑氏
- ◇ 札幌が今回できなくて、このあともうちょっとやれたらいいなと私が思っているのは、アーティストがもうちょっ
と長く滞在をできるとか、作っている姿、作品でどうやって、ブラックボックス化しないで、どうやってできてい
るのか、皆さんが見られる機会がもうちょっとあったらよかった・・・・・・飯田氏
- ◇ 芸術祭でしかできないことというのは、恐らくここの札幌という市が持っているリソース、資源をどう国際的に位
置付けていくか、そうすると人間もリソースなんですね。地元の人だけがリソースでなく、来たアーティストも地
元のアーティストもそういう大事な人材になっていく・・・・・・飯田氏
- ◇ 先端的な芸術センターというのはそういう人しか行かない場所になってはいけなくて、むしろそこで普通の中学
生が普通に受験勉強をしているのが素晴らしい。あんな(YCAMのような)ものは東京にも京都にもどこにもないん
です。だけど、札幌にはそれはあり得ると思います・・・・・・浅田氏
- ◇ これからの芸術祭、SIAF を続けるに当たって、美術館はやっぱり必要なのかどうなのかという議論をせざるを得な
いと思うんですね・・・・・・飯田氏
- ◇ 根本的な問題を考えるのが創造都市であって、芸術の産業化を考えるのが創造都市ではないんですね。そういう
全体の問題をもっと芸術祭というテーマで、逆にフェスティバルですからフェスティバルエコノミーでもあるし、
芸術祭そのものがある意味で創造都市の象徴的なイベントであると言うのは、そういうことだと思うんですね。
で、この中から本当にアーティストが生まれ、地元の中のアーティストが生まれ、それが地元の新たな経済を生み
出していくとか、そういうことであって・・・・・・武邑氏
- ◇ 予算もなかったし、本当に予算なかったのと、たぶんアートを今回中心にして産業的なものは連携で入って欲しい
と思ってすごい何回も何回もいろんな関係者にアプローチしようとしたんですけど、なかなかむずかしかったで
す・・・・・・四方氏
- ◇ アート関係者だけがやってもしょうがない。むしろ、それが産業と結びつき、ライフスタイルと結びつき、そ
れがライフスタイルの変革にさらにつながっていくことを実際にやってみせるべきだ・・・・・・浅田氏

②事業推進／実務／広報について

- ◇ どの会場でもたくさんの方が見えていて、本当は広報をちゃんとうまくやっていれば、最初からこれぐらいの人は
来たはずだと思いますけれども、そういうことも今回の経験から学んでやっていけば、絶対に次につながる芽がすく
すくと育ちつつあるという実感をしています・・・・・・浅田氏
- ◇ 普通、いわゆる有名アーティストというものをゲストディレクターにお呼びする場合、ほとんど名誉職みたいな感
じで、その方の得意とされる作品、あるいはパフォーマンスがあったらまあそれを中心的にやるけれども、あとは
よきに計らえみたいなことが多いですね。ところが、坂本さんは本当に真剣に考えられて、ちょっとマイクロマネ

ーじし過ぎじゃないのというぐらい細かいところまで、それこそ作家の選定から作品の選定、それからデザイン、都市の中での見せ方、その他その他も本当に細かく考えておられて、僕もたまには一緒に参加しながら、まずは運営体制ということで、飯田さん、四方さんなんかを入れ、それから北海道のほうではどういう人たちをそこにいたらいいかというところから始まり、作家の選定、場所の選定、細かい実行に至るまで本当にみんなで手作りで作ったという感じだと思うのですね・・・・・・浅田氏

◇ 最大のアクシデントは、開催直前に私が中咽頭がん罹患していることがわかり、ニューヨークでの治療に専念せざるを得なくなったことかもしれません・・・・・・坂本氏

◇ 今回芸術祭の開催を通してわかった最大の問題と私が思うのは、ユネスコが認めるメディア・アーツ都市札幌に、例えば山口市の山口情報芸術センター（YCAM）のようなメディア・アートを制作する拠点がなく、そして技術的にアーティストをサポートする人材がいなくということです・・・・・・坂本氏

◇ （SIAF 以外のアート行事を）単発でどういう風に今回の SIAF とどう結び付け助走期間としていくか、今回は SIAF の前に一応プレビエンナーレという芸術祭がありましたけど、やっているほうも一体どんな形で国際芸術祭になるんだろう、どういう風に実を結ぶだろうと、いまいちイメージできないでやっていたというところがあると思う・・・・・・梁井氏

◇ 札幌以外の地域とどういう風な連携を取っていくか、さっきの近代化の話で言いますと（中略）札幌を一步離れるともっと強いコントラストの形で見えてくる部分があると思うんですね。そこを、国際芸術祭の別の視点というところでどう取り組んでいくかが大切かと思います・・・・・・梁井氏

◇ プロベンシャルイズムがいけないと言ったのは地域の閉ざされた根性が駄目ということ以上にセクショナリズムがいけないことでもあって、もう道だとか市だとか、札幌市だとか室蘭市だとか言わずに、本当に世界市民として開かれたネットワークという形でやっていくことがいいかと思います・・・・・・浅田氏

◇ 今回は全国、あるいは海外から美術関係者とか、あるいはその色々な報道機関とかが来て、それに合わせて道外、海外からもお客さんが来ている。札幌だからできないのではなくて、やり方内容によってできることはたくさんあるし、可能性は一杯持っているというのは今回感じたところ・・・・・・吉崎氏

◇ （現代アートを敬遠する人たちに対して）どういうふうに観たら面白いとか、こういう観点で考えたらというところを、もっとうまく伝える方法があったんじゃないかなと感じました・・・・・・吉崎氏

◇ 例えば自然を見る、スポーツを観る、エコツーリズムをする、美味しいものを食べる、その一環としてアートを観ることがあるんだというような形で、札幌全体、更には北海道全体をもう 1 回見直すということと絡めて広報を展開していけば、絶対この倍、倍どころじゃない数倍の人が来たはずだ・・・・・・浅田氏

◇ 単にアートのイベントがあります、興味がある人は来てくださいではなくて、もっと広い他のジャンルとも関連したプログラムを提案し、且つそれとうまくアピールする形の広報活動を展開すればですね、何倍もの人が来たはずだと思います・・・・・・浅田氏

◇ やって見たらもうちょっとやってみたほうがいいな、もうちょっと説明しようかなと、どこでもね美術館とか 500m でもやってますし、試行錯誤で会期中も頑張っている対応している生き物みたいな存在なんですけれど、それを皆さんと一緒に反応を見ながら双方向的に育てていく感じが会期中もあって、それはとても重要なことだったりした・・・・・・四方

- ◇ この助走期間がすごく大事になってくるのは、ボランティアさんにとってもそうだし、実際何かの形で具体的に関わらなかった、それこそ会場に行きたいけど色んな事情で会場に行けなかった、タイミングを逃してしまった、そういう方をどう巻き込んでいくかが課題だと思います・・・・・・飯田氏
- ◇ 札幌で作られたこの作品が世界中を旅することが、一番深い意味で札幌のアピールにもなるような気がしますね・・・・・・浅田氏
- ◇ 往々にして行政がやる文化施設というのは、文化行政というのは他の都市をどうのこうのというわけではないんですけど、やはり匿名性で色んな意見を汲み取らなくてはいけない。そうするとターゲットが非常に分散化してしまって、そうするとフラットにすることが市民との関わりだという感じになってしまって、どうしてもさっきのご提案（※レジデンスやアイデアコンペの話）のようなクリエイティブな視点がどんどん失われていってしまっていて・・・・・・武邑氏
- ◇ （これまで北海道のアートを盛り上げてきた）みんなただ自分の作品を展示したいというわけではなくて、この自分たちの札幌がアートの盛り上げればいいんじゃないかと言うのに、自分たちの場所である札幌で開かれるのに、なんか蚊帳の外にされちゃった感があるなにかイメージとしては外から来た人たちが、外からまた人を連れてきてやっていると言う人もいますよ・・・・・・吉崎氏
- ◇ 地元で根付いた感性に答えているのができるか、そのあたりが地元の美術館学芸員が関わっていけるところなんじゃないかなと思います・・・・・・吉崎氏
- ◇ 今回特に残念なのは、国際芸術祭といって国際的な彩りはありました。ところが蓋を開けてみるとやっぱり美術展だったんですよ。（中略）アートだけではなくて美術だけではなくて周辺のいろいろな演劇や映画やいろいろな芸術ももっとあってフェスティバルとしてあって楽しくあればよかったし、さらにクリエイティブシティを札幌が言っている訳だから、もっと私は産業と結びついた芸術が紹介されるのかなと思っていたんですよ。その部分にアカデミックな学芸員は目を向いていないからそういうところをインディペンデントの方々やあるいはアーティストが、あるいはまちの製作者の人たちの声なども入れて産業と結びついた芸術の紹介がもっとあるとアートが社会基盤になるということはこの札幌のクリエイティブシティを名乗る札幌から全国に発信できたんじゃないかなと思うんだ・・・・・・寺嶋氏
- ◇ ビューティフルなライフスタイルをアートやスポーツで美しい自然や他者との共生の中で作ってこうという大きなメッセージは決して日本の首都ではなく、この札幌という国際都市、北海道という国際的な地方からアピールできるものだと思います・・・・・・浅田氏

③会期運営／観客・プログラム参加者の反応について

- ◇ 少なくとも最後の段階で、これだけたくさんの方の市民の方、あるいは外から来られた方の支持を集めたことは、次に向かっての非常に大きな種になったのかなと思っています・・・・・・浅田氏
- ◇ 晴れのオープニングの日に私が 30 年間温めておいた「旋回するノイズ」という（中略）サウンドインスタレーションが折り返る強風のため、鳩が旋回せずにあっという間にどこかに飛んで行ってしまいました。また（中略）神儀がルーツである日本の能楽とアイヌ民族の舞踊を同じ場所、同じステージで開催するということには、豪雨のため中止せざるを得ませんでした。また、大竹伸朗氏の巨大なインスタレーションを札幌市資料館に設置するという作品は、技術的な困難さにより実現できませんでした・・・・・・坂本氏

- ◇ とりあえずやって良かったというのが率直な感想です。（中略）市民にとって1回目、どんな形であっても成功にこぎつけることができたことは大変いいことだと思います・・・・・・梁井氏
- ◇ 今回札幌で国際芸術祭を成功できたことで、札幌でもこういうことをやっているんだということを全国、東京中央の方々に認知されることができたのは大変大きいんじゃないかと思います・・・・・・梁井氏
- ◇ 今回複数の会場があったということで、これが非常に善し悪しというか、プラスの面とマイナスの面があったかと思います。（中略）札幌の場合は（中略）近美あって、芸術の森、モエレ沼等々、非常にお互い離れちゃっていることに（マイナスが）あるんですね。（中略）逆にいいところというのは、それによって札幌の色んなところをおのずと旅できるというのですか、色んなところに行けるというのがいいとこだと思うわけです・・・・・・梁井氏
- ◇ （シャトルバスには）残念なことに中に（作品や札幌の紹介をする）アナウンスが全くない・・・・・・梁井氏
- ◇ 街の様子を見て、展覧会が始まる前、始まってから、そして今日本当に終わろうとしてますけど、何より街がアートによって元気になったから、普段アートや美術を口にしない人たちの中にも芸術祭の話題が出てきたところによかったかなというふうに思います・・・・・・寺嶋氏
- ◇ 色んなところが活性化して政治的にも経済的にも色々発言されて、やっと札幌の美術館も一人前になったかと思ったりしておりました・・・・・・寺嶋氏
- ◇ 比較的、近代美術館は美のサンプルとしてポピュラリティのある美術品を並べることが多くて、現代アートをほとんど見せて来ませんでしたので、そういう展覧会が私どもの展示室で開かれ、そして市民の皆さんが足を運んでくれて、そのきっかけに徳川美術館展を観ていただいて、何てこの時期の札幌市民の皆さんは幸せであったことかなと思っています・・・・・・寺嶋氏
- ◇ 色々と露出しているのが芸術祭というのをやっているのはわかっているんだけど、どこで何を観たらよいのか今一つ掴み切れなかった・・・・・・吉崎氏
- ◇ 少なくとも運営側に地域のいろんな方たちの参加があつてよかったんじゃないかなと思いますね、今後も。その分市の職員の人たちだとか、地域のいろんな人たちに相当な負荷がかかったんですけれども、このアセットをさらに追求して地域側でなにができるのかというようなことが、もっと議論されて準備の段階から次に向けて展開が動き出すといいなと思ってます・・・・・・武邑氏
- ◇ 今回プラットホームを作ったと思うんですよ。参加型プロジェクトもやっておりますし、結構大勢の方に参加いただいて、リピーターもあったし、昨日もとくいの銀行の最後の引き出しイベントもやってたんですけども、なんかすごく不思議な関係がみんな出来ていて、こうなんか展示見たり、参加することで結構人生変わったり、ボランティアやってもう少し知りたいなと思った人も結構多いんですよ。だから助走期間としてはできるだけことは、ある程度のことは出来ていると思う・・・・・・四方氏
- ◇ 通勤途中の地下鉄、もしくは市電の中ですね、木曜金曜日高校生が芸術祭のパンフレットを見て、この週末どこに行こうかというようなことを見てるんですね。まるで主催者のごとくうれしい思いで感じていました・・・・・・参加者

④SIAF の評価指標について

- ◇ 何をもって成功とするかは、色んな指標があるんですけども、少なくとも最初に掲げた 30 万人という動員は、9月の先々週の段階で 40 万人を超えたということで・・・・・・武邑氏

- ◇ 当初からこの芸術祭を通して札幌に幾つかの種をまくことができたなら、それが成功だと思ってきました。種はうまく育てれば芽を出し、花が咲きます。どう育てるかは札幌の人たち次第です。この芸術祭の主役は札幌市民だというのは、そういう意味です。結局は札幌をどういう街として描きたいかということなのです・・・・坂本氏
- ◇ 「都市と自然」そこから発生してくる近代とか環境問題とかそういう広がっている大元に、市内や道内の作家の中にこのテーマに連動して自分の作品を見せるような動きができたこと、これが何よりよかったと思って、作家を元気づけたかなと思います・・・・寺嶋氏
- ◇ 先ほど 40 万人既に超えているとか、経済波及効果が目標確か 48 億円という数字だと思うんですけど、それを超えたかどうかというのもひとつなんですけど、やはり次につながる確かな手ごたえとその基盤作りがどれだけできたかということがひとつの評価なのかなと思う・・・・吉崎氏
- ◇ 本当に一番お客さんに接するところで、市民の方が本当に協力的に友好的にやっていたことがすごく僕は印象深いです・・・・吉崎氏
- ◇ 実は芸術の森美術館、あるいは近代美術館からの有料空間の人数からいうと、まあうちの美術館からいうと夏の普通にやっている展覧会の人数とそう多くないんですね。道外から来た人が多いことからすると、逆に市民の数がいつもよりも少ないというのも正直なところ。それは、先ほど仰っていた広報不足、最後にはすごくようやく火が付いた感じがあるんですけど、そういうことだと感じました。この芸術祭の一番よいところを、多くの市民に観てもらえなかった悔しさを感じてます・・・・吉崎氏
- ◇ 外の人も北海道の別のイメージとか文化的印象を持っていたいて、また面白いなと思って次の理想を感じていただいたと思いますし、今日いらっしゃった市民の方にとって、北海道とか札幌とか別の見え方に見えたらよかったかなと・・・・四方氏
- ◇ （次の芸術祭までの）これから 2 年間を、例えば関わってくれたボランティアさんの気合いとか楽しかったというような気持ちとかどうやって持続させていくかというのが、まず新しい始まりなんですよ・・・・飯田氏
- ◇ そういう意味では先ほどの最優秀賞を取られたまさにアイデアコンペ（中略）（での）提案は素晴らしいと私は思っています。あれをつまり実現することが SIAF の 1 回目の種まきになると思うんですね。あれを単純にアイデアとしていただきましたというだけで終わっていたらこれは元も子もないというか、そういう提案を具体的に実現していく努力というものを続けていく必要があるんじゃないかなと思うんですよね・・・・武邑氏
- ◇ アートツーリズムを重視することも、すごく重要だと思うんですけども。ただ、今回の札幌国際芸術祭を見てみると、地域おこしということと、問題提起ここはすごく大きかった（中略）（そして）アートとしての感性がビシビシ伝わってくるものがちゃんと両立できているということ、これがですね今回の札幌国際芸術祭では一番素晴らしいことかなと思いましたね・・・・端氏
- ◇ 四方さんが担当しているアートバイライフ、暮らしかた冒険家だとかいわゆる美術展じゃない新しい生き方、金融制度に対して皆さんどう思っているんですか、今の大量生産、大量消費でない、循環型の経済ってこうだよということのシミュレーションと言うかモデルケースが今回の創造の中で行われているわけですよ・・・・端氏
- ◇ 芸術祭自体がこういうかたちで市民に浸透したり、一般の人に興味を持ってもらうことによって、お金が生み出せると思うんですよ、文化から。（中略）想像力こそが新しい経済を生み出す、それはこれまでにない 21 世紀のモデルであって、それが札幌の創造都市によってしかできないかなと思っていて、これはいま本当にそういった芽が出始めている状況ができていて、だからある程度はできているそれをどのように（中略）続けていく

かってこと。市民と一緒に(中略)そこを育てるような場をちゃんと作ってあげて保持してあげることが必要……

四方氏

- ◇ 札幌自体のメディア産業自体も育っていくと同時にそれが本当にアーティスティックな形でこういう国際芸術祭の中でその成果を出していく。かつ市民を巻き込んで新しい生き方、新しい経済を提案していくみたいなことができれば、素敵なんじゃないかと思うんですよ……浅田氏

- ◇ 単に世界市場で売れてますよとかいうことではない、本当に深いコスモポリタンな伝統を札幌の中から掘り出してきて世界に発信していくと言うことをやりたい。それがかなりうまくできたのではないかなと思います……

浅田氏

- ◇ 中谷宇吉郎さんの昔の研究室がなんだか札幌大学が改築してカフェとビジターセンターを作るのに壊されるということになりそうだったようなんですが、シンポジウムがうまくいったせいかどうか、中谷さんの昔の研究室が保存されることになったみたいで、これも芸術祭の非常に大きなもしかしたら成果だったかもしれない……浅田氏

- ◇ (事業数が多くなりどうなるんだろうと言われていたが) いざ開いてみるとけっこう地元の方々が芸術祭を応援しているってことがよく再認識できたってことと、レジデンスは天神山にあるんですけども、ホテルは(中略)全然泊まれなかった状況があった。それで個人の若手のアーティストが自分のお家をレジデンスにして全国の若手のアーティストの、なんか飛行場のようになっちゃって、その本当に札幌と全国のアーティスト関係者がすごく身近になった……端氏

- ◇ 中谷宇吉郎さんの展示していた写真というのは、今回のために新しくプリントしたもののなんです。本物はこういう小さい乾板というガラスの板で永久的に残らない素材なんです。朽ちてしまったら、割れたら終わり、今でも写真にも写っていますけどひびだらけで、火花放電のほうの写真は中谷芙二子さんのお持ちの紙焼きをスキャンしてプリントしたのでカビが生えていたり、コンディションとしては文化財的に危機的な状況となっています。そういうのを今回は(中略)かなり高い精度のクオリティでデジタル化をすることができた。(中略)美術作品として価値があるものとして残せたんですね。それを札幌市と加賀市が提携してデータは加賀市にある中谷宇吉郎雪の科学館に寄託でお渡しすることになりましたし、ちゃんとそうして札幌の持っている科学的文化的な資産がちゃんと後世に残すことができたというのも今回の芸術祭のなかで大きい、地味ですけど大きい功績のひとつで大きいんですよ……飯田氏

- ◇ 作品は残すべきですし、記録も残すべきなんですが、その一瞬の出会い、世界の最先端にここで触れた、宇宙と触れたということが一番大きな種として残るはずで、それが若いアート系の学生さんなりね、アートと関係ない、これで突然サイエンスに目覚めたっていいんですよ、中谷宇吉郎の写真を見てね、そういう人たちに未来への非常に大きな動機づけになるとすれば、それがこの国際芸術祭が坂本さん言った種を蒔いたことの一番大きな意味じゃないかという気がしますね……浅田氏

- ◇ これから3年後までなにを形として残していくか、それは私たちの創造性というものをいかに刺激しあうかということが最大の目標であり、その実践がこの芸術祭がうまくいったかどうかということの評価の一番の大きな基準になるのではないかな、そんなふうに思います……上田市長

以上、実行委員会主催 公式振り返りイベント ファイナルトーク登壇者コメント集

5

来場者アンケート調査設問、 クロス集計図表、クロス集計結果

*SIAF 実行委員会作成：2014 年開催中に実施

札幌国際芸術祭 2014 来場者アンケート

1 あなた自身のことについて伺います。

問1 あなたの性別はどちらですか。

1 男性 2 女性

問2 あなたの年齢はいくつですか。

1 10歳代 2 20歳代 3 30歳代 4 40歳代 5 50歳代 6 60歳代以上

問3 あなたのお住まいはどちらですか。

1 札幌市内（ ）区 2 札幌市以外の道内（ ）市・町・村
3 道外（ ）都・府・県 4 海外（国名： ）

問4 問3において、2, 3, 4と回答された方に伺います。札幌市内にどれくらい宿泊しますか。

1 （ ）泊 2 泊まらない（日帰り）

2 『札幌国際芸術祭 2014』をご覧になるきっかけについて伺います。

問5 どのようにして『札幌国際芸術祭 2014』が開催されることを知りましたか。（複数回答可）

1 ウェブサイト 2 Twitter 3 Facebook 4 テレビ 5 ラジオ
6 新聞 7 広報さっぽろ 8 雑誌 9 チラシ 10 駅・車内ポスター
11 友人・知人から 12 その他（ ）

問6 『札幌国際芸術祭 2014』をご覧になった理由を教えてください（複数回答可）

1 芸術に興味・関心がある 2 人に勧められた 3 町内会・サークルなどの行事
4 観光の一環として 5 メディアでの特集を見て 6 偶然通りかかった
7 その他（ ）

3 この会場でのことについて伺います。

問7 展示されている作品の内容はいかがでしたか。

1 とても良い 2 良い 3 普通 4 悪い 5 とても悪い

問8 展示されている作品に対する解説についてお聞きします。

問8-1 内容についていかがでしたか

1 とても良く分かった 2 まあ分かった 3 普通 4 やや分かりづらい
5 分からなかった

問8-2 解説文の量についていかがでしたか

1 とても多い 2 まあ多い 3 普通 4 やや少ない 5 不十分

問8-3 文字の大きさはいかがでしたか

1 大きすぎる 2 少し大きい 3 ちょうど良い 4 やや小さい 5 小さすぎる

問9 会場への入場料についてどう思われますか。

1 とても安い 2 やや安い 3 普通 4 やや高い 5 高すぎる

問10 スタッフの対応はいかがでしたか。

1 とても良い 2 良い 3 普通 4 悪い 5 とても悪い

問11 本日は、どのような交通手段を使ってお越しになりましたか。(札幌市内の移動に伴う交通手段をお答えください。複数回答可)

1 地下鉄 2 路線バス 3 シャトルバス 4 タクシー 5 自家用車 6 徒歩
7 その他 ()

4 『札幌国際芸術祭 2014』全般について伺います。

問12 『札幌国際芸術祭 2014』は、ご覧の会場以外にも、様々な場所で作品が展示されています。あなたは、どの会場をご覧になりましたか。(複数回答可)

1 北海道近代美術館 2 札幌芸術の森美術館 3 札幌大通地下ギャラリー (500m美術館)
4 モエレ沼公園 (ガラスのピラミッド) 5 北海道庁赤れんが庁舎 6 札幌市資料館
7 札幌駅前通地下歩行空間 (チ・カ・ホ) 8 清華亭

問13 『札幌国際芸術祭 2014』は、様々な場所で作品が展示されています。あなたは、これから本会場以外の会場のどこをご覧になる予定ですか。(複数回答可)

1 北海道近代美術館 2 札幌芸術の森美術館 3 札幌大通地下ギャラリー (500m美術館)
4 モエレ沼公園 (ガラスのピラミッド) 5 北海道庁赤れんが庁舎 6 札幌市資料館
7 札幌駅前通地下歩行空間 (チ・カ・ホ) 8 清華亭

問13 『札幌国際芸術祭 2014』を見て (参加して)、あなたにとってどのような効果がありましたか。(複数回答可)

1 芸術への関心が高まった 2 自分自身も創作活動を始めようと思った
3 美術館やギャラリー巡りをしようと思った 4 札幌の魅力を再発見した
5 その他 () 6 特になし

問14 『札幌国際芸術祭 2014』の総合評価はいかがですか

1 とても良い 2 良い 3 どちらともいえない 4 あまり良くない 5 悪い

問 15 『札幌国際芸術祭』は3年に1度の開催予定です。次回も見に行きたいと思いますか。

- 1 ぜひ行きたい 2 たぶん行く 3 わからない 4 たぶん行かない
5 行きたくない

問 16 『札幌国際芸術祭 2014』は7月19日から9月28日まで開催します。次回の開催時期は、どうあるべきだと思いますか。

- 1 今の時期が良い 2 もっと早い時期が良い(4月～6月)
3 もっと遅い時期が良い(10月～3月) 4 わからない

問 17 ご覧になった展覧会や作品について、または『札幌国際芸術祭 2014』に関するご意見等がありましたら、ご自由にお書きください。

今後札幌国際芸術祭についてご意見を伺うためにご連絡を差し上げてよいでしょうか。

調査にご協力いただける方はメールアドレスあるいはご住所をお教えてください。

(お預かりした個人情報は厳重に管理し、SIAFの事業評価調査の目的にのみ使用されます。)

住所：

e-mail：

電話番号：

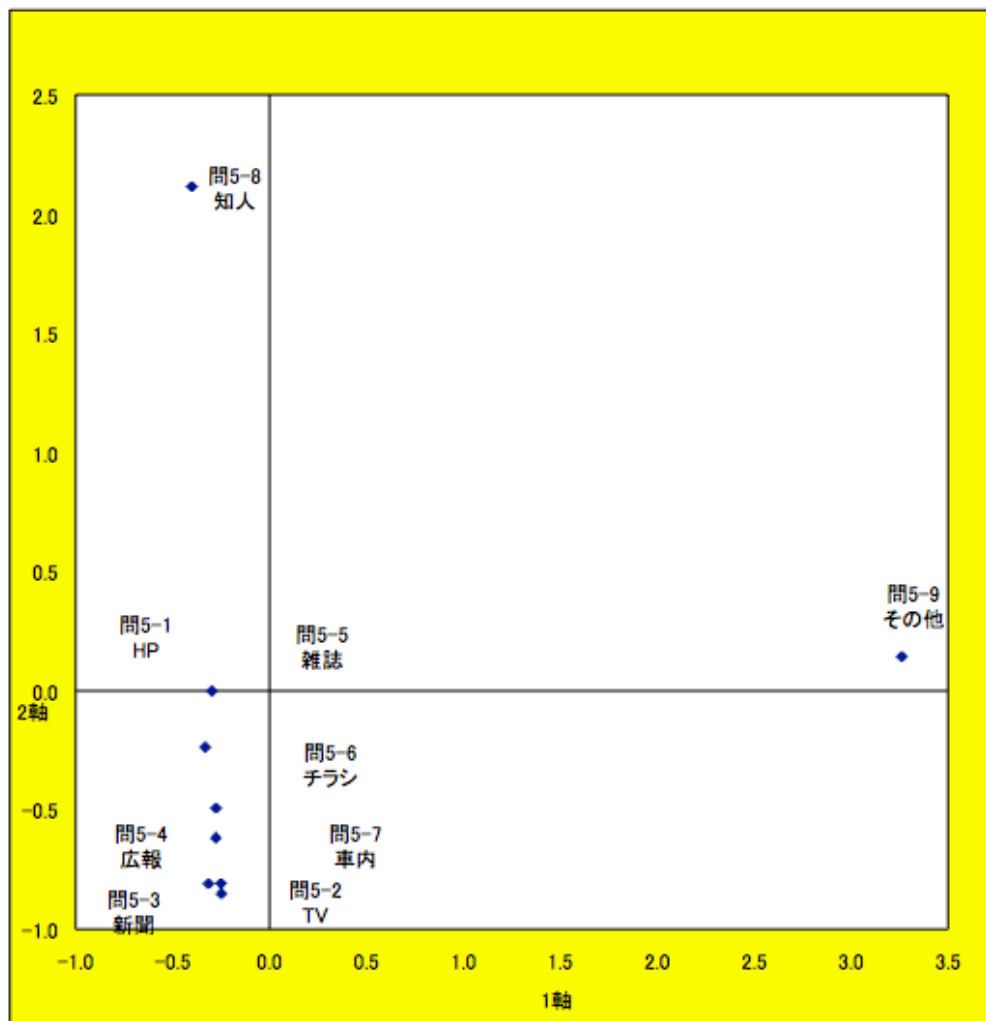
お電話差し上げてよい時間 () ～ () 時

以上、来場者アンケート転載終わり。

5. 来 場 者 ア ン ケ ー ト ク ロ ス 集 計

クロス集計表 n=2804

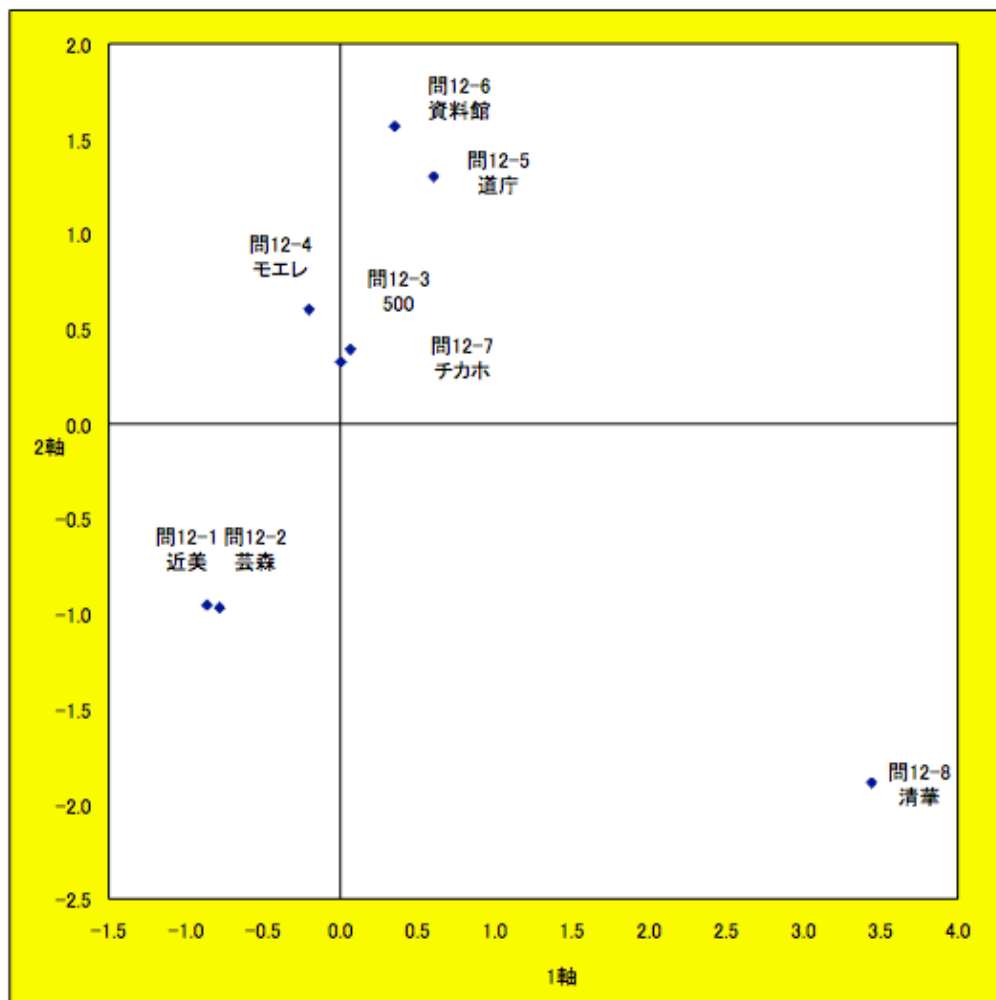
変数名	問5-1 HP	問5-2 TV	問5-3 新聞	問5-4 広報	問5-5 雑誌	問5-6 チラシ	問5-7 車内	問5-8 知人	問5-9 その他
問5-1 HP	916	96	117	99	91	123	138	161	23
問5-2 TV	96	374	146	108	38	70	97	44	16
問5-3 新聞	117	146	459	166	43	86	117	62	9
問5-4 広報	99	108	166	419	29	99	133	58	18
問5-5 雑誌	91	38	43	29	233	43	42	43	5
問5-6 チラシ	123	70	86	99	43	333	98	63	12
問5-7 車内	138	97	117	133	42	98	502	79	16
問5-8 知人	161	44	62	58	43	63	79	711	10
問5-9 その他	23	16	9	18	5	12	16	10	370



クロス集計表

n=2838

変数名	問12-1 近美	問12-2 芸森	問12-3 500	問12-4 モエレ	問12-5 道庁	問12-6 資料館	問12-7 チカホ	問12-8 清華
問12-1 近美	1697	1062	857	721	620	563	1026	324
問12-2 芸森	1062	1439	782	689	536	497	900	312
問12-3 500	857	782	1121	596	574	516	948	319
問12-4 モエレ	721	689	596	1084	458	419	716	273
問12-5 道庁	620	536	574	458	893	440	670	279
問12-6 資料館	563	497	516	419	440	816	610	247
問12-7 チカホ	1026	900	948	716	670	610	1499	382
問12-8 清華	324	312	319	273	279	247	382	546



アート関係者の評

(SIAF2014 実行委員会編：開催報告書より転載)

SIAF2014 開催報告書（実行委員会作成版） P57-64 転載

SIAF2014 の作品や展覧会の企画について、外部の有識者から寄せていただいたコメントのほか、新聞や雑誌、ウェブサイトに掲載されたアート関係者などの評を掲載する。

■アート関係者寄稿

○熊倉 純子 東京藝術大学 音楽環境創造科 教授

「ビギナーズ・ラックに終わらせないために」

大型芸術祭は行政主導にならざるを得ない、しかも初開催——華やかな舞台の裏側はさそかしググシヤクしたのではと思いきや、現地を訪ねてみると、チームワークの良さに驚いた。芸術と行政は水と油。しかし札幌では、行政チームと芸術の若手専門家たち、そして多くのホランティア市民の皆さんか、初顔合わせとは思えぬ緊密な連携プレーで、この大きな舞台を支えていた。チームワークの要になったのは、坂本龍一ディレクターの熱心なコミットメントだったのたろうか。あちこちの現場で「坂本さんの企図は…」と若いスタッフが熱心に語ってくれて、現場にとって氏が雲の上の人ではなかったことがひしひしと感じられた。しかし、火事場の馬鹿力とはいえ、これを単なるビギナーズ・ラックにしてはいけない。今回は道外から集まった専門スタッフも多く、札幌にいかにか人的資源とそのネットワークを築いていけるかが、次回に向けての課題と思われる。市には、人と活動を育む拠点形成をはじめ、地道な素地づくりを続けて 欲しいと思っている。

○山本 和弘 栃木県立美術館 シニア・キュレーター/国際美術評論家連盟aica会員

「世界批評としての SIAF2014」

現代美術は世界批評という有用性を発揮する。故に幾多の困難を乗り越えながらも、芸術は社会に提起され続けている。芸術が批評する世界とは、ある科学史家に倣えば月下世界と天上界を統合した宇宙であり、もはや環境という言葉では包摂しきれない。この意味において、札幌国際芸術祭 2014が提起した都市と自然という古典的対立項は、電磁化された情報と舞い降りる雪の結晶の対比に象徴される新たな世界像へと変換された。すなわちディレクターの坂本龍一が参照した、緑化アクションと凍てつく大地を人々の熱い対話によって接合したヨゼフ・ボイスの水平視線と、私たち地球人を遍く一体化させる21世紀的な垂直視線が綾なす聴(超)視覚的造形という〈テキスト=織物〉へと札幌は変換されたのである。さらに科学と技術と芸術の三つ巴の叡智を相互批評することによって、この造形テキストは人間と世界とが持続的に融和性を発揮しうる〈コンステレーション=星座〉へと拡張された。地球上で煌めくあまたの先行国際芸術祭の中においても SIAF はひときわ輝き続けることたろう。あたかも〈天上のシュネー・クリスタル=雪華〉のように。

○鎌田 享 北海道立近代美術館 普及情報課長

札幌国際芸術祭 2014 の開催テーマ「都市と自然」。これは、札幌の立地環境を踏まえ、今日の社会状況にも通じる、ある種の説得力をまとっている。道立近代美術館と札幌芸術の森美術館では、このテーマのもと国内外の美術作品が紹介された。構成の緻密さや作品の多様さ、美術館という会場設定。こうした分かり易さゆえに、両館での展示が芸術祭の中核と捉えられることもあったが、それはやや異なろう。企画展示と冠されたこれらは、開催テーマを多義的に紐解くための水先案内人である。その先に広がる芸術祭の真の本体は、札幌駅前通地下歩行空間など札幌全域で展開された作品や活動、そしてそこに参加した人々の振る舞いにこそ求めるべきだと思う。

「都市」を「ヒトの営巣」、「自然」を「所与の状況」と読み替えるならば、このテーマは、人間の存在可能性を問うものに他ならない。芸術祭の視座は、札幌という都市、現代という一時代に限定されるものではなかった。そして今回の企画は、札幌国際美術展ではない。札幌国際芸術祭とは、「札幌」という地で、脱札幌＝「国際」的な広がりのもと、「芸術」（＝アート）と名付けるしかない取り組みを通じて、人々の営みを読み直す「祭典」（＝日常を超えた場）だったといえる。アートで社会を読み解くという実験的な趣旨、それを具体化した複層的な事業構造こそが、札幌国際芸術祭の斬新さであった。しかしそれは、幅広い市民層への浸透不足、芸術祭の分かり難さと、表裏一体でもあった。その解消策は、単なる宣伝活動では済まない。美術作品という完結した物体からアートという未完の状況へ、展覧会の受動的鑑賞から祭典への能動的参加へ。価値の転換を、より強く訴えることが必要だったのだろう。アートが社会の改善に直接的に寄与することは、難しいかもしれない。しかしアートからの視点が社会のあり方や人々の生き方を考え直す契機とは、なり得るかもしれない。芸術祭の意味を咀嚼し展開していくことが、祭典の終幕後も引き続き求められていく。

○神田 真秋 愛知芸術文化センター 総長(前愛知県知事)

「北の大地の芸術祭を訪ねて」

「札幌でどんなアートに出会えるか」そんな期待を抱きながら、この 8 月の終わりに札幌国際芸術祭を訪ねた。札幌国際芸術祭は「都市と自然」をテーマに札幌・北海道の近代化の歴史を振り返りながら、未来を展望するという独自の取り組みである。伊福部昭や掛川源一郎、中谷宇吉郎ら北海道の先人たちの仕事をよみかえ丹念に掘り起こし、また先住民や炭鉱、開拓の痕跡を蘇らすなど、北海道という大地が歩んできた明治維新以降の歴史そのものを真正面から取り上げている。これほど直截に地元のことを芸術祭のメインステージに登場させている芸術祭も珍しいのではないだろうか。ここに札幌国際芸術祭の独自性があるに違いない。大いに意表を突かれるとともに、それはまた、これまで何回も経験してきた、新たなアートの可能性との心地よい出会いとなった。もちろん未来に向けたメッセージをもつ現代アートの魅力的な作品にもたくさん出会った。岡部昌生、中谷芙二子、カールステン・ニコライ、平川祐樹、松江泰治、宮永愛子らの作品には大いに楽しませてもらった。また会場作りで特に興味を引いたのは、地下歩行空間を活用したアートシーンの展開だろう。そこを行きかう人々の様子を眺めながら、都市における芸術との接点の一面を垣間見ることができた。愛知では、私か知事在任中の2010年に「都市の祝祭」をテーマにして「あいちトリエンナーレ」をスタートさせ、すでに 2 回を開催した。芸術祭を愛知芸術文化の100年の軸にしようとする取り組みである。今や芸術祭は全

全国各地で繰り広げられているが、こうした各地の芸術祭が互いに切磋琢磨し、刺激を受けながら連携して発展させていくことが重要である。そしてそのことが、地域の魅力を再発見するとともに、とかく人、モノ、情報が東京へ一極集中することを打破する有力な手段になるのではないだろうか。愛知も、今回の札幌国際芸術祭から得たものを第3回の更なる展開につなげていきたいと考えている。上田市長が種をまいたこの芸術祭を大きく育てていけるよう、今後の発展を大いに期待したい。

■ 国際交流基金招待の視察ツアー参加者のコメント

● 招待記者コメント

○ SIAF2014への参加は日本の別の一面を体感できた特別で素晴らしい機会だった。今回の訪問以前は札幌といわれて思い起こすことといえば冬季オリンピックだったが、札幌は文化面においても十分な舞台になり得る事を証明してくれた。坂本龍一氏が自然環境を通して受けたインスピレーションを作品として見事に表現していた事に非常に感銘を受けた。

(アレックスandro・カナボ、Corriere della Sera文化担当エディター/イタリア)

○ SIAF2014では人類の自然との関係性の中から生まれた美を表現するという、非常に熟考されたビジョンが提示されていた。それは決して単純ではない方法で気持ちを高揚させてくれるものだった。個人的にはその考え抜かれたキュレーションと、テクノロジーの先進的な使い方、そして何より作品と自然風景が織りなす息を飲む瞬間の数々にとても感動を覚えた。

(ドーン・チャン、Artforum エディター/米国)

○ SIAF2014への訪問をととても楽しんだ。各会場での展示スケールやその多様性、また各展示会場の持つテーマがそれぞれ相互に関係し合っている点がとても印象的だった。個人的には島袋道浩のパブリック インスタレーションや毛利悠子の創り出した素晴らしい空間など、北海道独自の歴史や文化を示唆する作品がとても興味深かった。四方幸子による公共通路を使用したキュレーション「センシング・ストリームズ」展やテレビ塔でのプロジェクト(インターネットヤミ市)もとても革新的で惹き付けられるものだった。

(ガブリエル・モーザー、Canadian Artエディター/カナダ)

○ SIAF2014へ参加できたことは日本訪問の中でもとても重要なことのひとつだった。坂本龍一氏の明白なテーマ性に基づき、SIAF2014では明らかに一貫性のある物語が展開されていた。特に選ばれた作品が特定の場所でその歴史と現代そして今ととても強く結びついており(北海道庁赤れんが庁舎やインターネットヤミ市など)、美術作品が通常の美術館といった空間だけでなく、地下通路などでも見られた事はとても興味深かった。また個人的には国際的な文脈の中で、海外作家と国内作家が同等にキュレーションされていたことも特筆すべきことだと思う(特に山川冬樹や宮永愛子など。宮永とは帰国後ロンドンで偶然再会し、その後一緒にパブリックトークを行う縁にも恵まれた)。

(マーク・ラポルト、Art Reviewエディター/英国) 翻訳:山越 紀子

● 招待キュレーターコメント（アンケートより抜粋）

〈参加キュレーター〉

キティ・スコット(アートギャラリー・オブ・オンタリオ/カナダ)、スティーブ・ディッツ(ノーザン・ライツ・ミネソタ/米国)、キャスリーン・フォード(ボルサン・コンテンポラリー/米国)、アンドレア・グローバー(パリッシュ・アート・ミュージアム/米国)、アドリエル・ルイス(スミソニアン・アジア・パシフィック・センター/米国)、クリスチャン・ポール(ホイットニー美術館、ニュースクール大学/米国)、ノラ・バーネット・エイブラムス(デンバー現代美術館/米国)、ルイズ・カミーロ・オソーリオ(リオデジャネイロ近代美術館/ブラジル)

○美しいインスタレーションだった。中谷芙二子の霧の彫刻とスーザン・フィリップスの森の作品は、見事だった。トマス・サラセーノ、カールステン・ニコライ、中谷宇吉郎の作品、また島袋道浩、坂本龍一の作品も興味深かった。インドア / アウトドアのアプローチが良かったし、会場が素晴らしかった。

○ SIAF2014 をとても楽しんだ。素晴らしいキュレーションで、各キュレーターによる展覧会見学ツアーのような機会を得られ、大満足だ。キュレーションの力で、アートそのものだけでなく、場所そのものの特質、その社会、政治や歴史をつかめたと思う。

○ SIAF2014 は、今回のツアーの中で、ずば抜けて良かった訪問先だった。ゲストディレクター坂本龍一氏の作品は、パワフルで味があった。「自然」「都市」「経済、地域、ライフ」のそれぞれのテーマはタイムリーで、アーティストやキュレーターの豊かな主題を見せた。モエレ沼公園と札幌芸術の森美術館が良かった。特に感動したのが飯田志保子氏のキュレーション。札幌の歴史を強調したところや、先住民族アイヌの歴史やアートを芸術祭に取り入れたのは、賞賛に値する。

○ SIAF2014の展覧会は、とても強力だった。そう思えたのも、キュレーターに直接案内してもらえたからかもしれないが、展覧会と作品との深いつながりを容易に見出せた。SIAF2014 が描いたコンテキストや先住民族アイヌを含むダイナミクスを理解することにより、日本のアートという展望で札幌が自分の都市をどのように位置付けているかを知ることができ、それぞれの展示をどう見るかに役立った。SIAF2014で鑑賞した展示すべてを非常に楽しめた。

○ SIAF2014 は、あらゆる角度でとても印象に残った点は、①ゲストディレクター坂本龍一氏によるよく考えられたコンセプト、②展覧会それぞれのキュレーター、③展示会場の展開(美術館や地下通路から元裁判所やオフサイトの小さな会場まで)、④アーティスト、作品、時間の範囲、例えば、伊福部昭や掛川源一郎の作品を、現代ニューメディアや一般彫刻(アイヌ民族に関連する二風谷の石)と共に見せていたこと、⑤個々の展示のコンセプトである。全体的には、都市、自然、都会のインフラに焦点を当てていたところが良かった。企画展示「都市と自然」の展示では、フォーカス、詩的なアプローチという意味で、個人的にすばらしいと感じたし、

インスタレーションも思慮に富んでいて、美しかった。作品は、美術館のフロアや壁を越えて、互いに共鳴し合っていた。

「フォレスト・シンフォニー」やスーザン・フィリップスの公園の作品だけでなく、インスタレーション から浮かび上がった森のテーマが気に入った。

○ SIAF2014は、現代アートを幅広く見せただけでなく、作品や展示会場を通じて、地域の歴史を紹介し、語り掛けていたように感じた。日本の歴史や文化を「ありのままに」感じた。さらに、都市や地域の問題点も参考になり、サテライトのインスタレーションの中には、現代ニューメディア・アートの非常に 良いプレゼンテーションもあった。サテライトだが、規模の大きめのプロジェクトの有機的な拡張の ように感じさせた。主催者は、サテライトのスペースや、作品の展示には想像もつかない場所を活用するという点において、大成功を収めたと思う。それによって、都市というものが現れ、特にわれわれのように馴染みのない者にとって明確となった。

○ SIAF2014の企画展示「都市と自然」の展示がとても良かった。テーマに対するキュレーターのアプローチが明確で、アーティストの選定も良かった。北海道に関連した歴史的アーティストや科学者の展覧会が、芸術祭と地域をつなぐ上で重要な役割を果たした。

○ SIAF2014は、札幌芸術の森美術館や北海道立近代美術館で実施された既存型の展覧会から札幌駅前通地下歩行空間のインスタレーションや北海道庁の庁舎を利用した参加型まで、エキサイティングで多層的だった。芸術祭のキュレーターに直接案内してもらう機会を得られ、とても有意義で楽しい経験となった。特に、毛利悠子の作品が良かった。現在、Northern Spark版の「45th Parallel」プロジェクトを企画中なので、本企画にて、札幌で出会ったキュレーターやアーティストに関わってもらえると良い。インターネットやミ市は、熱狂的な、それでいて制作プロセスにおいて多くの重要な課題に取り込んでいる参加者が共にキュレーションしてくれるライトな企画の一例として、今もよく思い出している。

■新聞、雑誌、ウェブサイトなどの評価（記事はいずれも抜粋）

○北海道新聞/ 2014 年 8 月 8 日付 「ステージ『CHROMA』」（元井 麻里子）

技術を駆使した映像と音響に生身の人間の演技が加わり、観客の想像力を心地よくかき立てた。ユニークな手法は道内の舞台芸術関係者を大いに刺激したはず。

○北海道新聞/ 2014 年 8 月 30 日付 「ステージ『BABEL (WORD)』」（元井 麻里子）

印象に残るのが、舞台装置として英国の彫刻家アントニー・ゴームリーが作った直方体の巨大な五つの フレーム。ダンサーたちによって自在に形を変え、個人や集団の「境界線」を表した。フレームの内外で、時に愛し合い、時に激しくぶつかり合うダンサーの姿を通して、人間という存在をあらためていとおし いと感じることができた。それにしても、一般的にはまだ「難解でとっつきにくい」と思われがちなコンテンポラリーダンスの敷居 をこれだけ下げてくれた芸術作品もそうないだろう。

○北海道新聞/ 2014年9月3日付 「札幌国際芸術祭 作家と作品/中谷 宇吉郎、カールステン・ニコライ、高谷 史郎(道立近代美術館)」

札幌国際芸術祭のメイン会場の一つ、道立近代美術館の2階展示室では「本来アートではないもの」に光があっている。展示は科学とアートを隔てる固定概念を取り払って見せた。

○毎日新聞/ 2014 年 8 月 14 日付 「Topics 各地で現代美術国際展」（永田 晶子）

明治以降、近代化の一端を担った北海道の歴史と地理的特性がテーマに合致。新作は決して多くないが、当地で開催する意義をうまく打ち出した。

○北海道新聞/ 2014 年 10 月 6 日付 「札幌国際芸術祭72日間を振り返る」（岩本 茂之）どんなテーマになっても今回の「21世紀以降の新しい文明の形を考える」という視点を使い捨てにせず根幹に据えたい。1回やそこらで見つかる答えではなく、私たちが未来から問われている課題なのだから。幅広い層を巻き込んで足腰を強くし、近代と共に生まれた都市・札幌で新しい文明の形を考える。そして早急に準備を始めたい。

○北海道新聞/ 2014年9月17日付 「札幌国際芸術祭を見て キマジメすぎ物足りず」（村田 真・美術ジャーナリスト）

今回の芸術祭は、札幌の地で「都市と自然」について、あるいは近代史や環境問題についてマジメに考えるにはまたとない機会といえるだろう。だが、国際展に予想を超えたアートや作品同士の火花散るバトルを期待した者にとっては、いささかもたなりなかったかもしれない。いや、これは「国際展」ではなく「芸術祭」だというなら、なおのこと、もっと祝祭的に楽しめるものであってほしかったと思う。

○読売新聞/ 2014 年 8 月 21 日付 「横浜と札幌 現代美術の国際展 都市と自然を循環」

主会場の市街地にある北海道立近代美術館に「都市」、郊外に立つ札幌芸術の森美術館に「自然」の主題を割り振り、双方が循環するように工夫している。地下街や郊外のモエレ沼公園など会場は 16カ所。ただ、広い

地下街の中で、作品展示は一部に限られている。初開催とあってコンパクトにまとめた印象の反面、街ぐるみの一体感はまだ乏しい。次回開催に向けての課題と言えそうだ。

○朝日新聞/ 2014 年 10 月 4 日付 「Opinion 北海道 芸術祭が残したもの」

・暮沢 剛巳(東京工科大 准教授) 全体にコンセプチュアル(概念的、禁欲的)で派手でない作品が多く、芸術監督の坂本龍一さんの指向や好みが出ていた。その点では統一感もあった。弱いなと感じたのは、地域やコミュニティなどの問題があまり反映されていなかった点だ。越後妻有アートトリエンナーレなど近年成功している芸術祭では、作家が地域に入り過疎などの問題と向き合い制作するのがひとつのスタイルになっている。札幌ではそうした部分が少なく、地元の人との連帯感が薄くやや盛り上がり欠けたようにも感じた。芸術祭は、どうしてもそれがもたらす効果の方に目が行きがちで動員数などが分かりやすい指標になるが、もっと展示の質に注目するべきだ。今回は、テーマに合った作品の水準を保ち、それなりに評価できる内容だと思う。

・吉澤 弥生(共立女子大 専任講師) 気になったのは評価の仕組みと芸術祭後だ。日本では、開催後に様々な指標で芸術祭の効果や成否を検証する事業評価の仕組みが整っていない。例えば「アートでまちづくり」を掲げても、集客や収入だけで成果が測られるのが現状だ。アートは街を変えない。観覧者やボランティアなど様々な立場の人に何らかの作用を及ぼし、その人が以前とは少し違う意識で日々を過ごしたり、街に働きかけたりすることで初めて街は変わる。そこを測るためにも細かな記録や調査が必要になる。今回はスタッフが自己検証的な話し合いをしている場面にも出会い、次へつなげようとする可能性も感じた。行政も、指標を定めてきっちり事後評価を行うべきだ。

・吉岡 宏高(炭鉱の記憶推進事業団 理事長)

今回の芸術祭は、札幌で完結してしまったのが残念だ。北海道の近代化を考えるなら炭鉱やアイヌ民族など多くの大切なテーマがあり、圧倒的な「場の力」を持つ地域がいくつもある。せめて道央圏ぐらいで展開してほしい。美術作品の質も大事だが、観光や地域活性化などの手段としてのアートの側面もきちんと議論すべきだ。芸術祭は3回くらいやってみないと効果は分からないと思う。次回は、より広い地域を巻き込んで開催してほしい。

○北海道新聞/2014年10月3日付 「現代アート若者魅了 48万人来場 札幌国際芸術祭」(山田 宏茂)

東京工科大の暮沢剛巳准教授(芸術学)は、「個人がアートを体験することが最も貴重だが、国際展は規模も予算も大きいため、動員や話題性を暗黙のうちに求められる。初回はその点で成功といえる」と評価する一方、「地域の特色が薄かった。にぎわいか、芸術性か、なぜ札幌か。目的を明確に定めた上で、次回にふさわしい芸術監督の人選を今から進めるべきだ」と提言している。

○北海道新聞/2014年10月13日付 「月曜討論 ボランティア結集が成果」(中島 洋・シアターキノ 代表)

芸術祭は今回、突然始まったわけではありません。地元の芸術家が 1970 年代から、海外の作家を招いて展覧会を開くなど実績を重ねてきた。私も数年前から仲間とともに芸術祭開催を目標に、プレイベントを開くなど

してようやく実った。そういう土壌、地元の作家の思いがあったことを忘れないで、継続して開催してほしいですね。

○月刊ゲーテ/2014年10月号 「都市と自然の新しい関係を探る旅 アートシティ札幌へ」(館野編集長)

もともと坂本さんの活動全体に、都市と自然の調和を考えるという姿勢は、一貫して含まれています。そしてここ2年ほど、坂本さんがこの芸術祭に心血を注いでいたのを、実際に聞いたり見たりしてました。コンセプトの醸成から出展アーティストの選択にまで携わり、さらには自身の作品の出品もしている。まさにスーパーな活動ぶりです。そんな坂本さんの情熱に導かれ、ルイ・ヴィトンも芸術祭をサポートしています。この芸術祭全体が「都市と自然」というテーマで見事に統一されているとしたら、それはあらゆる細部が、坂本龍一というフィルターを通してできあがっているからでしょう。気分を高めて美術館へ出向くのもいいけれど、アートってそれだけじゃない。子供からお年寄りまでが、日常の延長として美に触れられるこんな場も、ぜひあってほしい。日本の都市に不足する“ゆとり”や“遊び心”がここにはありますね。

○DEPARTUR(E ウェブサイト)/2014年7月22日付 「札幌国際芸術祭 2014-vol.2 札幌駅前通地下歩行空間(チ・カ・ホ)」

チ・カ・ホでは、エキシビションやプロジェクト、トークイベント、作品上映など様々なプログラムが楽しめる。公共空間での作品展示には、目に見えない様々な制約を乗り越えるための煩雑な調整が不可欠だがそのような苦勞を全く感じさせない統一感のある展示に仕上がっている。通りすぎる多くの歩行者が足を止めて作品を興味深く鑑賞している姿が印象的だ。

○週アス PLUS(ウェブサイト)/2014年8月26日付 「札幌国際芸術祭 2014 開催中!『都市がメディアとなって表現する』芸術の祭典」

札幌国際芸術祭では、都市をかたちづくっている自然をメディアアートによって浮き上がらせる数々の作品が展開されている。都市を成立させている、その地が持つ力。このアートフェスは、テクノロジーを用いてそれを前景化し、五感で確認させてくれる場であり、プロジェクトなのだ。

○SankeiBiz x SANKEI EXPRESS(ウェブサイト)/2014年9月8日付 「『札幌国際芸術祭2014』大都市に潜む自然があふれる」岡田智博・クリエイティブクラスター理事長) 都心に投じられた一石を起点に、流れるかのように配された作品に誘われ森に到るまで回遊した後、悠久なる都市の深層を巡るパズルをおのおのが解いたかのような気持ちを催す余韻を、この札幌最初の試みは与えてくれたのであった。

○artscape(ウェブサイト)/2014年11月15日付 「学芸員レポート『札幌国際芸術祭』」(山口洋三・福岡市美術館)

雄大な北海道の自然と札幌という大都市の対比かな、くらいの気持ちで会場を巡った。「都市」と「自然」じゃなくて、「自然→都市」。つまり江戸末期以降、日本が近代国家としての出発を始めたころ、蝦夷地と呼ば

れていた北海道にはいわば「自然」しかなく、そこに近代化が押し寄せてきた。「都市と自然」とはつまり、この歴史を指している。これに気がついたときに、急にこの展覧会が立体的に見えてきた。札幌にはテーマの必然性が感じられました。でも「都市と自然」というテーマをはっきりと意識させたのは、じつは山川冬樹の作品だったんでしょう。チ・カ・ホでの展示だったね。札幌の地には豊かな地下水脈がかつて存在し「、メム」と呼ばれる湧き水もあったとか。まさに自然の上に都市がある。山川は、かつての水路をカヤックで自らたどった行為を映像記録と実際に使ったカヤックとで示していた。たんに時間の水平な流れだけでなく、垂直な堆積を意識させるものだったと思う。しかしチ・カ・ホを通る人たち、歩くの速すぎじゃないか？ 高速で直進する人が多いから何度もぶつかりそうになった。地下水脈ならぬ地下人脈(笑)。つまり、「都市と自然」というテーマと作品は北海道の歴史、つまり土地の記憶に直結する内容だったというわけですね。この芸術祭、継続されると聞きましたけど、このテーマは変えないで掘り下げていくと、北海道ならではの展覧会に成長するかもしれませんね。

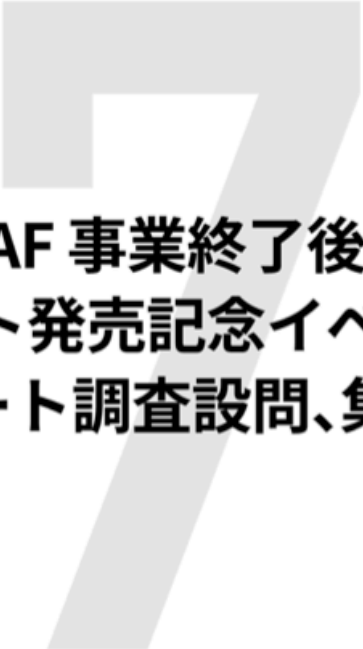
○サウンド&レコーディング・マガジン(ウェブサイト)/2014 年 9 月 2 日付 「会期はあと1カ月足らず！ 札幌国際芸術祭で見逃せないサウンド・インスタレーション」

坂本龍一が大貫妙子と「UTAU」を作り上げた芸森スタジオのあるエリアだが、その中心的な施設である 札幌芸術の森美術館の中庭および手前の池を使い、霧の彫刻家=中谷芙二子の人工霧による作品が 30 分に一度、8分という長さで立ち現れる。音の作品というわけではないが、時間という枠があり、その中で常に形を変えろという意味では、とても音楽的に感じるができるものだ。移ろいゆく霧に見とれている内に8分という時間があつという間に過ぎてしまうことから、音楽を作っている人間なら時間 というものについてさまざまな思いを巡らせてしまうことだろう。

○日本経済新聞(ウェブサイト)/2014 年 9 月 9 日付 「アートレビュー 札幌国際芸術祭 2014 霧の彫刻に目を遊ばせ、火花放電の美しさにため息」(小川 敦生・多摩美術大学 教授)

(山川冬樹「リバー・ラン・プラクティス」について)今の時代ならではの動きが表れたのは、ネットを通じたリアルタイムの反響だろう。短文投稿サイト「ツイッター」を通じて情報が広がり、川から上陸するときには、50 人ほどの人々が実際に集まって出迎えたという。パフォーマンスはリストリームやツイッターを通じて広まり、人々が実際に応援に駆けつける。ネットを通じた情報がここではバーチャルの世界で閉じずにリアルと自然につながっている。

以上、開催報告書より転載終わり。



SIAF 事業終了後の ドキュメント発売記念イベント参加者 アンケート調査設問、集計結果

7. SIAF2014 事業終了後のドキュメント発売記念イベント集計結果

1. 調査概要

○内容・・・・・・SIAF2014に参加したであろうアートファンの感想を調査

○方法・・・・・・アンケート調査

○対象・・・・・・イベント参加者

○期間・・・・・・2015年3月24日

○回答数・・・・・・25

2. 集計結果

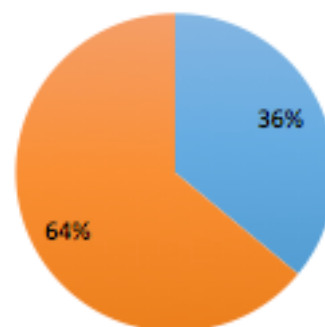
問1 札幌国際芸術祭に実際に行った

表1

項目	度数	割合
A.はい	9	36
B.いいえ	16	64

問1

■ A.はい ■ B.いいえ



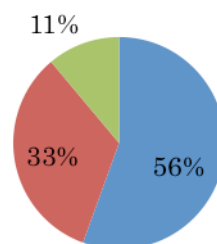
問2 全体を通して「都市と自然」というテーマ性を感じることができた

表2

項目	度数	割合(%)
A.すごく感じた	5	56
B.やや感じた	3	33
C.あまり感じなかった	1	11

図2

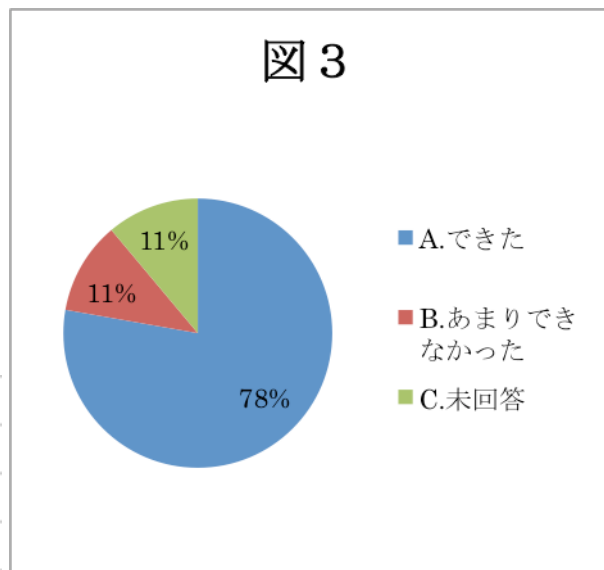
■ A.すごく感じた
■ B.やや感じた
■ C.あまり感じなかった



問3 これまでもっていた札幌のイメージとは異なる新しい価値を見つけることができた

表 3

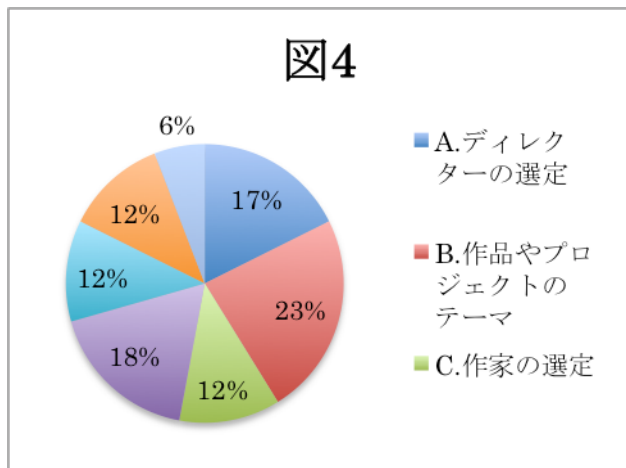
	項目	割合(%)
A.できた	7	78
B.あまりできな	1	11
C.未回答	1	11



問4 現代アートとしての先進性を感じることができた。感じることができたとすればどのような点か？（複数回答可）

表 4

項目	度数	割合
A.ディレクターの選定	3	17
B.作品やプロジェクトのテーマ	4	23
C.作家の選定	2	12
D.展示の仕方、会場の選定	3	18
E.メディアアーツの導入	2	12
F.あまり感じることができなかった	2	12
未回答	1	6

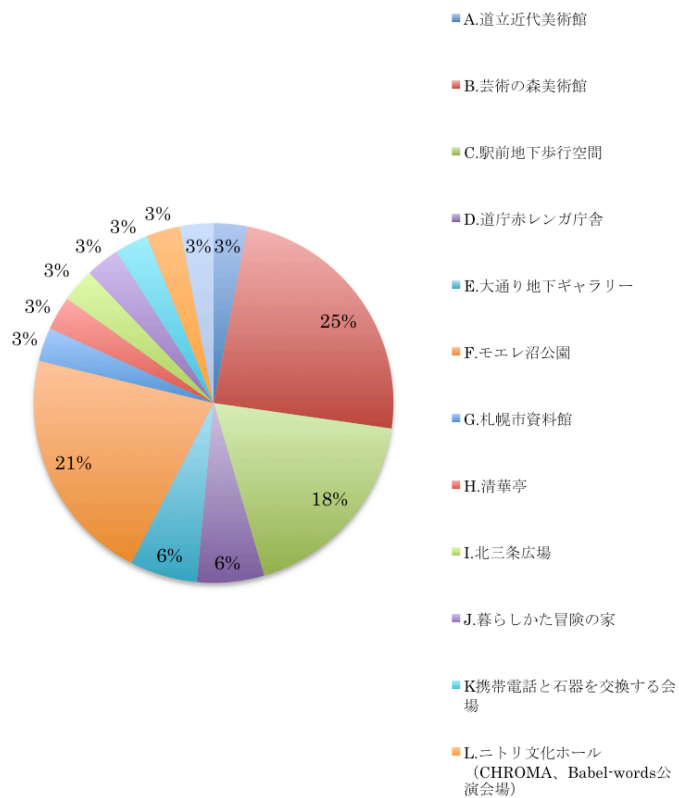


問5 特に印象に残っている展示エリア・作品について教えてください（複数回答可）

表 5

項目	度数	割合	自由筆記
A.道立近代美術館	1	3	
B.芸術の森美術館	8	25	
C.駅前地下歩行空間	6	18	
D.道庁赤レンガ庁舎	2	6	
E.大通り地下ギャラリー	2	6	
F.モエレ沼公園	7	21	
G.札幌市資料館	1	3	
H.清華亭	1	3	
I.北三条広場	1	3	
J.暮らしかた冒険の家	1	3	
K.携帯電話と石器を交換する会場	1	3	
L.ニトリ文化ホール（CHROMA、Babel-words公演会場）	1	3	
M.その他	1	3	すすき野

図 5

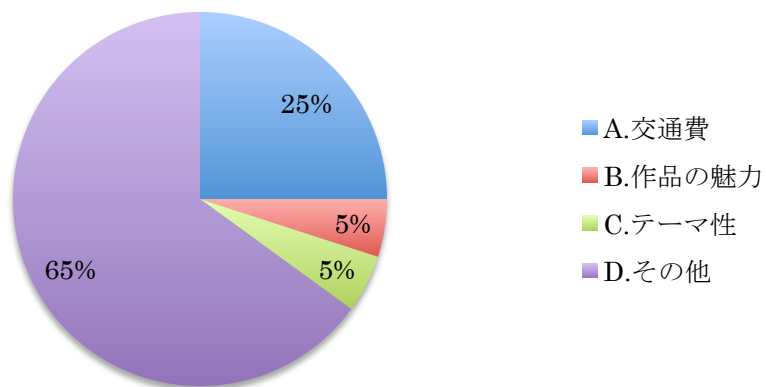


問 6 行かなかった方。今回参加を見送った理由。

表 6

項目	度数	割合
A. 交通費	5	25
B. 作品の魅力	1	5
C. テーマ性	1	5
D. その他	13	65

図 6



「その他」全回答

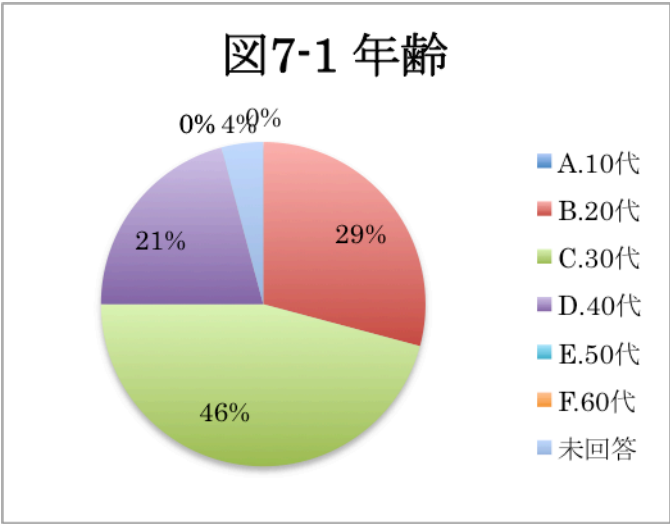
- ✧ 仕事があった
- ✧ 距離、時間
- ✧ 開催していることを意識していなかった
- ✧ タイミングが合わなかった
- ✧ 時間
- ✧ ディレクター
- ✧ 期間中に時間がとれなかった
- ✧ 休みが合わなかった
- ✧ 開催時存在を知らなかった
- ✧ 遠かった
- ✧ 広報から全体像がつかみづらかった。目玉がわかりづらかった。
- ✧ 知らなかった

問 7 回答者の現在の状況

➤ 現在の年齢

表 7-1

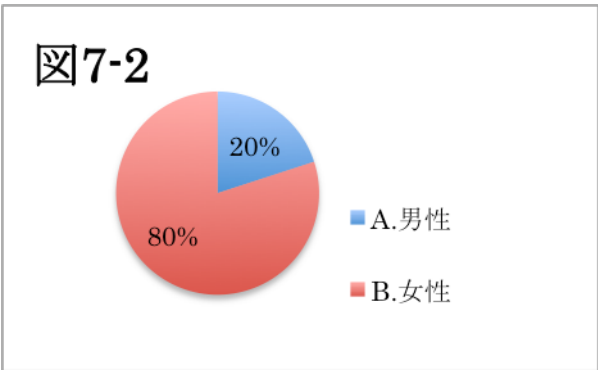
項目	度数	割合
A.10代	0	0
B.20代	7	29
C.30代	11	46
D.40代	5	21
E.50代	0	0
F.60代	0	0
未回答	1	4



➤ 性別

表 7-2

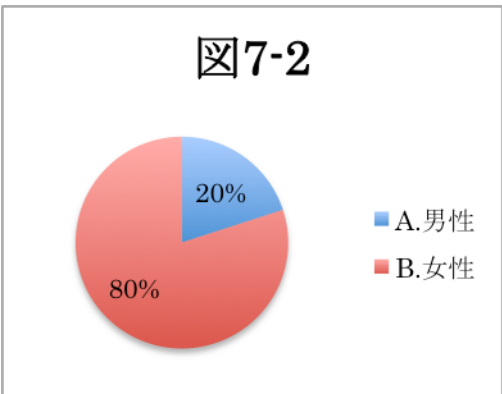
項目	度数	割合
A.男性	5	20
B.女性	20	80



➤ 現在の住まい

表 7-3

項目	度数	割合(%)
A.北海道	0	0
B.都市部(関東)	25	100
C.都市部(中部・関西)	0	0
D.その他	0	0



➤ 芸術祭参加歴

表 7-4-1

項目	度数	割合(%)
1カ所	9	37.5
2カ所	3	13
3カ所	5	21
4カ所	3	13
5カ所	2	8
6カ所	1	4
未回答	1	4

図7-4-1

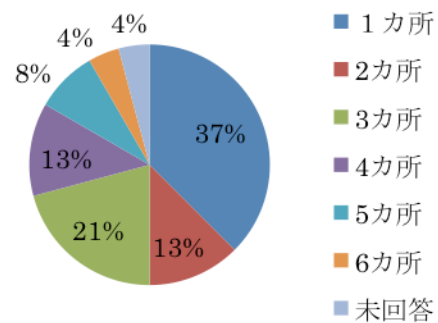
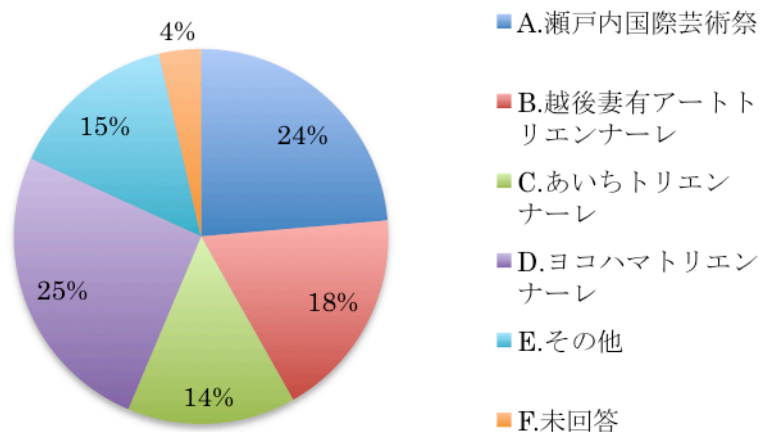


表 7-4-2

項目	度数	割合(%)
A.瀬戸内国際芸術祭	13	24
B.越後妻有アートトリエンナーレ	10	18
C.あいちトリエンナーレ	8	14
D.ヨコハマトリエンナーレ	14	25
E.その他	8	15
F.未回答	2	4

図7-4-2



以上、SIAF2014 事業終了後のドキュメント発売記念イベント集計結果

8

国際展年表

年	主要芸術祭、アートプロジェクト	文化政策及び社会の出来事
-1989	1988- アートキャンプ白州	竹下内閣「ふるさと創生一億円」(1987)/「総合保養地域整備法(リゾート法)」(1987)/ベルリンの壁崩壊(1989)/天安門事件
1990	ミュージアム・シティ・天神(のちにMCP)	企業メセナ協議会設立 /芸術文化振興基金創設/水戸芸術館開館
1992	ベネッセハウス開館(直島)	文化経済学会〈日本〉設立
1994	アーカスプロジェクト開始	地域創造設立
1995	アーカスAIR開始(PILOT計画)	阪神大震災/Windows95発売 /東京都現代美術館開館
1996		文化庁「アーツプラン21」 /スターバックス1号店(銀座)
1998	秋吉台国際芸術村	非営利活動促進法(NPO法)制定 /アートマネジメント学会設立
1999	取手アートプロジェクト(TAP)開始	東京藝術大学に先端芸術表現科が新設
2000	越後妻有アートトリエンナーレ	HPやブログの一般流通/せんだいメディアテーク
2001	横浜トリエンナーレ※ 日本初の国際展	文化芸術振興基本法制定 /国立博物館・美術館の独立行政法人化
2002	アサヒ・アート・フェスティバル開始	カフェブーム/藝大に音楽環境創造科新設
2003	越後妻有アートトリエンナーレ	指定管理者制度開始/BankART、YCAM、森美術館開館/ 特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)開始
2004		mixi開始/金沢21世紀美術館開館
2005	横浜トリエンナーレ	黄金町違法飲食店の一斉排除開始
2006	越後妻有アートトリエンナーレ	
2007		国立新美術館開館/文化・芸術による福武地域振興財団 設立/初代iPhone発表/文化庁長官表彰の文化芸術創造 都市部門/文化政策学会設立
2008	横浜トリエンナーレ/黄金町バザール /ヨコハマアートサイト開始	リーマンショック/財政縮小/ツイッター等SNS普及
2009	越後妻有アートトリエンナーレ /水と土の芸術祭/混浴温泉世界	アーツ千代田3331開館/東京文化発信プロジェクト開 始/創造都市推進事業

2010	瀬戸内国際芸術祭/あいちトリエンナーレ	十和田市美術館開館/創造都市モデル事業
2011	横浜トリエンナーレ	東日本大震災/おおさかカンヴァス推進事業
2012	越後妻有アートトリエンナーレ /水と土の芸術祭/混浴温泉世界	
2013	瀬戸内国際芸術祭/あいちトリエンナーレ /十和田奥入瀬芸術祭/中之条ビエンナーレ	
2014	道後オンセナート/札幌国際芸術祭 /横浜トリエンナーレ/ヨコハマ・パラトリエ ンナーレ/いちはらアート×ミックス /鳥取藝住祭/国東半島芸術祭	地方創生事業
2015	PARASOPHIA：京都国際現代芸術祭 /越後妻有アートトリエンナーレ /水と土の芸術祭 /混浴温泉世界/中之条ビエンナーレ	

※本年表は、日本国内で開催された芸術祭、アートプロジェクト等を一部抽出しているものであり、網羅的なデータではありません。

※ 本年表は、TARL「アートプロジェクトの「言葉」を編む」2014の一環として、文献収集の作業シートとして作成したものに、手を加えたものです。

作成：

海老澤彩、高橋かおり（TARLリサーチャー）

熊谷薫（検証会コーディネーター）

佐藤李青（東京アートポイント計画プログラムオフィサー）

以上、国際点年表。

来場者アンケート調査設問改善案

(SIAF2014 事業評価検証会 作成)

札幌国際芸術祭 2014
事業評価検証会 報告書

別冊資料

9.札幌国際芸術祭 2014 来場者アンケート改善案

＊改善の為に変更した箇所は赤字となっています。

1 あなた自身のことについて伺います。

問1 あなたの性別はどちらですか。

- 1 男性 2 女性

問2 あなたの年齢はいくつですか。

- 1 10歳代 2 20歳代 3 30歳代 4 40歳代 5 50歳代 6 60歳代以上

問3 あなたのお住まいはどちらですか。

- 1 札幌市内（ ）区 2 札幌市以外の道内（ ）市・町・村 3 道外（ ）都・府・県
4 海外（国名： ）

問4 問3において、2, 3, 4と回答された方に伺います。札幌市内にどれくらい宿泊しますか。

- 1 （ ）泊 2 泊まらない（日帰り）

2 『札幌国際芸術祭 2014』をご覧になるきっかけについて伺います。

問5 どのようにして『札幌国際芸術祭 2014』が開催されることを知りましたか。（複数回答可）

- 1 インターネット（ウェブサイト、Twitter、Facebook） 2 テレビ・ラジオ 3 新聞 4 広報さっぽろ
5 雑誌 6 チラシ 7 駅・車内ポスター 友人・知人から 9 その他（ ）

問6 『札幌国際芸術祭 2014』をご覧になった理由を教えてください（複数回答可）

- 1 芸術に興味・関心がある 2 人に勧められた 3 町内会・サークルなどの行事 4 偶然通りかかった
5 観光の一環として 6 メディアでの特集を見て 7 その他（ ）

3 この会場でのことについて伺います。

問7 展示されている作品の内容はいかがでしたか。

- 1 とても良い 2 良い 3 普通 4 悪い 5 とても悪い

問8 展示されている作品に対する解説についてお聞きします。

問8-1 内容についていかがでしたか

- 1 とても良く分かった 2 まあ分かった 3 普通 4 やや分かりづらい 5 分からなかった

問 8-2 解説文の量についていかがでしたか

- 1 とても多い 2 まあ多い 3 普通 4 やや少ない 5 不十分 hyu7

問 8-3 文字の大きさはいかがでしたか

- 1 大きすぎる 2 少し大きい 3 ちょうど良い 4 やや小さい 5 小さすぎる

問 9 会場への入場料についてどう思われますか。

- 1 とても安い 2 やや安い 3 普通 4 やや高い 5 高すぎる

問 10 スタッフの対応はいかがでしたか。

- 1 とても良い 2 良い 3 普通 4 悪い 5 とても悪い

問 11 本日は、どのような交通手段を使ってお越しになりましたか。(札幌市内の移動に伴う交通手段をお答えください。複数回答可)

- 1 地下鉄 2 路線バス 3 シャトルバス 4 タクシー 5 自家用車 6 徒歩 7 その他 ()

4 『札幌国際芸術祭 2014』全般について伺います。

問 12 『札幌国際芸術祭 2014』は、ご覧の会場以外にも、様々な場所で作品が展示されています。あなたは、どの会場をご覧になりましたか。(または、ご覧になる予定ですか。複数回答可)

- 1 北海道近代美術館 2 札幌芸術の森美術館 3 札幌大通地下ギャラリー(500m美術館) 4 モエレ沼公園(ガラスのピラミッド)
5 北海道庁赤れんが庁舎 6 札幌市資料館 7 札幌駅前通地下歩行空間(チ・カ・ホ) 8 清華亭

問 13 『札幌国際芸術祭 2014』を見て(参加して)、あなたにとってどのような効果がありましたか。(複数回答可)

- 1 芸術への関心が高まった 2 自分自身も創作活動を始めようと思った
3 美術館やギャラリー巡りをしようと思った 4 札幌の魅力を再発見した
5 その他 () 6 特になし

問 14 『札幌国際芸術祭 2014』の総合評価はいかがですか

- 1 とても良い 2 良い 3 どちらともいえない 4 あまり良くない 5 悪い

問 15 『札幌国際芸術祭』は3年に1度の開催予定です。次回も見に行きたいと思いませんか。

- 1 ぜひ行きたい 2 たぶん行く 3 わからない 4 たぶん行かない 5 行きたくない

問 16 『札幌国際芸術祭 2014』は7月19日から9月28日まで開催します。次回の開催時期は、どうあるべきだと思いますか。

- 1 今の時期が良い 2 もっと早い時期が良い（春～初夏 4月～6月）
3 もっと遅い時期が良い（秋～冬 10月～3月） 4 わからない

問 17 ご覧になった展覧会や作品について、または『札幌国際芸術祭 2014』に関するご意見等がありましたら、ご自由にお書きください。

今後札幌国際芸術祭についてご意見を伺うためにご連絡を差し上げてもよいでしょうか。
調査にご協力いただける方はメールアドレスあるいはご住所をお教えてください。

ご協力いただきありがとうございました。

以上、来場者アンケート調査設問改善案（SIAF2014 事業評価検証会 作成）